

Universal Volume Manager

ユーザガイド

Hitachi Virtual Storage Platform One Block 85

4051-1J-U16-00

ストレージシステムを操作する場合は、必ずこのマニュアルを読み、操作手順、および指示事項をよく理解してから操作してください。

著作権

All Rights Reserved. Copyright (C) 2026, Hitachi Vantara, Ltd.

免責事項

このマニュアルの内容の一部または全部を無断で複製することはできません。

このマニュアルの内容については、将来予告なしに変更することがあります。

このマニュアルに基づいてソフトウェアを操作した結果、たとえ当該ソフトウェアがインストールされているお客様所有のコンピュータに何らかの障害が発生しても、当社は一切責任を負いかねますので、あらかじめご了承ください。このマニュアルの当該ソフトウェアご購入後のサポートサービスに関する詳細は、弊社営業担当にお問い合わせください。

商標類

IBM は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。

Internet Explorer は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

Linux は、Linus Torvalds 氏の日本およびその他の国における登録商標または商標です。

Microsoft は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

NetApp は、米国およびその他の国における Network Appliance, Inc. の登録商標です。

Oracle[®]、Java、MySQL 及び NetSuite は、Oracle、その子会社及び関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。

UNIX は、The Open Group の米国ならびに他の国における登録商標です。

その他記載の会社名、製品名などは、それぞれの会社の商標または登録商標です。

輸出時の注意

本製品を輸出される場合には、外国為替及び外国貿易法の規制並びに米国輸出管理規則など外国の輸出関連法規をご確認の上、必要な手続きをお取りください。

なお、不明な場合は、弊社担当営業にお問い合わせください。

発行

2026 年 1 月 (4051-1J-U16-00)

目次

はじめに.....	9
対象ストレージシステム.....	10
マニュアルの参照と適合プログラムバージョン.....	10
対象読者.....	10
このマニュアルの位置付け.....	10
マニュアルで使用する記号について.....	11
ユーザの操作権限（ロール）について.....	11
REST API の管理ツールについて.....	11
プログラムプロダクト TrueCopy について.....	12
発行履歴.....	12
1.Universal Volume Manager の概要と構成要素.....	13
1.1 Universal Volume Manager の概要.....	14
1.1.1 異なるストレージシステム間のコピー操作の統一.....	14
1.1.2 ホストと複数ストレージシステムとの接続の統一.....	15
1.2 Universal Volume Manager の構成要素.....	16
1.3 外部ストレージシステムのボリュームとの接続に必要な操作.....	18
1.4 外部ストレージシステムのボリュームのマッピング.....	19
1.4.1 ポート探索とボリューム探索.....	20
1.5 Universal Volume Manager と併用できるプログラムプロダクト.....	21
2.Universal Volume Manager のシステム要件と操作に関する注意事項.....	23
2.1 Universal Volume Manager システムの要件.....	24
2.1.1 外部ストレージシステムとして接続できるストレージシステムの種類.....	24
2.1.2 ドライブタイプによる使用推奨度.....	26
2.1.3 Universal Volume Manager の要件.....	27
2.2 Universal Volume Manager の操作に関する注意事項.....	28
2.2.1 マッピング時の注意事項.....	29
2.2.2 メインフレームから外部ボリュームを使用する場合の注意事項.....	30
2.2.3 外部ボリュームの属性に関する注意事項.....	30
2.2.4 外部パスに関する注意事項.....	31
(1) 外部パスとして使用できない経路.....	31
(2) 使用中のパス経路に外部パスを追加する場合の注意事項.....	32
(3) 物理パスに関する注意事項.....	33
2.2.5 性能に関する注意事項.....	33

2.2.6 外部ストレージシステムの保守に関する注意事項（再マッピング）	34
2.2.7 iSCSI を使用するときの注意事項	34
(1) 外部パスに関する注意事項（iSCSI を使用するとき）	35
(2) 物理パスに関する注意事項（iSCSI を使用するとき）	35
(3) ポートに関する注意事項（iSCSI を使用するとき）	35
(4) ネットワークの設定に関する注意事項（iSCSI を使用するとき）	37
2.2.8 ファイバチャネルを使用するときの注意事項	37
(1) 外部パスに関する注意事項（ファイバチャネルを使用するとき）	38
2.2.9 外部ボリュームのコマンドを同時に複数実行するときの注意事項	38
2.2.10 外部ストレージシステムからの応答遅延の検知と対処	41
3. Universal Volume Manager で外部ストレージシステムのボリュームとの接続に必要な設定	45
3.1 外部ストレージシステムを接続するポートの設定	46
3.2 マッピングする外部ストレージシステムのボリュームを決定するときの制限事項	46
3.3 マッピング時に設定する外部ボリュームグループ	47
3.4 マッピングに必要なボリュームの属性	47
3.5 外部パスの接続と設定	49
3.5.1 外部ボリュームのパスモードの種類	50
3.6 外部パスの冗長化（冗長パスの追加）	51
3.6.1 冗長パスの設定例	51
3.6.2 冗長パスへの I/O 実行パス切り替えの例（パスモードが Single モードの場合）	52
3.6.3 冗長パスへの I/O 実行パス切り替えの例（パスモードが Multi モードの場合）	53
3.7 パスグループの設定	54
3.8 メインフレームシステム用ボリュームとの接続	54
3.9 オープンシステム用ボリュームとの接続	55
4. Universal Volume Manager の操作	57
4.1 ローカルストレージシステムのポート属性を設定する	59
4.2 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングする	59
4.2.1 接続する外部ストレージシステムのポートに管理 LU が設定されている場合の注意事項	62
4.3 外部パスの設定と変更	62
4.3.1 外部パスを設定するときの注意事項	63
4.3.2 既存のパスグループに外部パスを追加する	63
4.3.3 外部パスの優先順位を変更する	64
4.3.4 iSCSI 接続の CHAP 認証を設定する	65
4.3.5 外部パスを削除する	67
4.3.6 iSCSI ターゲットの iSCSI 名を削除する	67
4.3.7 外部パスの変更	68
4.3.8 既存のすべての外部パスを入れ替える場合の設定の流れ	68
4.4 外部ボリュームの詳細情報を確認する	69
4.5 外部ストレージシステムのボリュームへの接続を切断する	69
4.6 外部ストレージシステムのボリュームに再接続する	71
4.7 外部ストレージシステムのボリュームへの外部パスの接続を切断する	72
4.8 外部ストレージシステムのボリュームへの外部パスを再接続する	72
4.9 外部ボリュームグループのキャッシュモードを変更する	72
4.10 外部ボリュームへのキャッシュ書き込みを制御する	73
4.11 外部ボリュームグループのパスモードを変更する	73

4.12 外部ストレージシステムへの I/O の負荷分散方式を変更する.....	74
4.13 外部ストレージシステムのポートの設定を変更する.....	74
4.14 外部ストレージシステムのボリュームのマッピングを解除する.....	74
4.15 外部ボリュームグループに割り当てられた MP ユニットを変更する.....	75
4.16 ストレージシステムの電源操作.....	76
4.16.1 ローカルストレージシステムだけの電源操作.....	76
(1) ローカルストレージシステムの電源をオフにする（計画停止する）.....	76
(2) 計画停止後、ローカルストレージシステムを再接続する.....	77
4.16.2 外部ストレージシステムだけの電源操作.....	77
(1) 外部ストレージシステムの電源操作.....	77
(2) 外部ストレージシステムの電源をオフにする（計画停止する）.....	78
(3) 計画停止後、外部ストレージシステムを再接続する.....	79
4.16.3 ローカルストレージシステムと外部ストレージシステムの電源操作.....	79
(1) ローカルストレージシステムと外部ストレージシステムの電源をオフにする.....	79
(2) ローカルストレージシステムと外部ストレージシステムの電源をオンにする.....	80
5. Universal Volume Manager のトラブルシューティング.....	81
5.1 Universal Volume Manager の一般的なトラブルシューティング.....	82
5.2 外部パスのトラブルシューティング.....	84
5.3 ボリューム探索のトラブルシューティング.....	87
5.4 お問い合わせ先.....	89
付録 A 外部ストレージシステム接続時の設定と注意事項.....	91
A.1 VSP One B20 および VSP One B80 のストレージシステム接続時の設定.....	93
A.1.1 VSP One B20 または VSP One B80 のストレージシステム側で回復が必要となるパス障害の例.....	93
A.1.2 VSP One B20 接続時の注意事項.....	94
A.1.3 VSP One B80 接続時の注意事項.....	94
A.2 VSP 5000 シリーズストレージシステム接続時の設定.....	94
A.2.1 VSP 5000 シリーズストレージシステム側で回復が必要となるパス障害の例.....	94
A.2.2 VSP 5000 シリーズストレージシステム接続時の注意事項.....	95
A.3 VSP G1000, G1500 および VSP F1500 ストレージシステム接続時の設定.....	95
A.3.1 VSP G1000, G1500 および VSP F1500 ストレージシステム側で回復が必要となるパス障害の例.....	95
A.3.2 VSP G1000, G1500 および VSP F1500 ストレージシステム接続時の注意事項.....	96
A.4 VSP G130, G150, G350, G370, G700, G900、VSP F350, F370, F700, F900 および VSP E シリーズのストレージシステム接続時の設定.....	97
A.4.1 VSP G130, G150, G350, G370, G700, G900、VSP F350, F370, F700, F900 および VSP E シリーズのストレージシステム側で回復が必要となるパス障害の例.....	97
A.4.2 Power Saving または Power Saving Plus を使用する VSP G800 接続時の注意事項.....	98
A.4.3 VSP G130, G150, G350, G370, G700, G900、VSP F350, F370, F700, F900 および VSP E シリーズのストレージシステム接続時の注意事項.....	98
A.5 VSP G100, G200, G400, G600, G800 および VSP F400, F600, F800 のストレージシステム接続時の設定.....	98
A.5.1 VSP G100, G200, G400, G600, G800 および VSP F400, F600, F800 のストレージシステム側で回復が必要となるパス障害の例.....	98
A.5.2 VSP G100, G200, G400, G600, G800 および VSP F400, F600, F800 接続時の注意事項.....	99
A.6 VSP One SDS Block ストレージシステム接続時の注意事項.....	99
A.7 HPE EVA ストレージシステム接続時のファームウェアバージョン.....	100
A.7.1 EVA ストレージシステム接続時のシステムオプションパラメータ.....	100

A.7.2 EVA ストレージシステム接続時のボリュームの識別方法（デバイス ID の利用）	101
A.8 HPE Nimble Storage/Alletra 接続時の注意事項	102
A.9 HPE Primera A630/A650/A670/C630/C650/C670 接続時の注意事項	102
A.9.1 HPE Primera A630/A650/A670/C630/C650/C670 接続時のシステムオプションパラメータ	102
A.9.2 HPE Primera A630/A650/A670/C630/C650/C670 接続時のその他の注意事項	102
A.10 Oracle（旧 SUN） StorEdge 6120/6320 ストレージシステム接続時の設定	103
A.10.1 Oracle（旧 SUN） StorEdge 6120/6320 ストレージシステム接続時のシステムオプションモード	103
A.10.2 Oracle（旧 SUN） StorEdge 6120/6320 ストレージシステム接続時のシステムオプションパラメータ	103
A.11 Oracle（旧 SUN） StorageTek V2X2 ストレージシステム接続時の注意事項	104
A.12 Dell EMC VNX シリーズ接続時の設定	104
A.12.1 Dell EMC VNX シリーズ接続時のシステムオプションモード	104
A.12.2 Dell EMC VNX シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ	104
A.12.3 Dell EMC VNX シリーズ接続時のその他の注意事項	105
A.13 Dell EMC Symmetrix シリーズ/DMX シリーズ/VMAX シリーズ/PowerMax シリーズ接続時の設定と注意事項	105
A.13.1 Dell EMC Symmetrix シリーズ/DMX シリーズ/VMAX シリーズ/PowerMax シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ	105
A.13.2 Dell EMC Symmetrix シリーズ/DMX シリーズ/VMAX シリーズ/PowerMax シリーズの同一ポート配下に装置製番が異なるボリュームが混在する場合の注意事項	106
A.13.3 PowerMax8000 接続時のシステムオプションモード	106
A.14 IBM DS3000/DS4000/DS5000 シリーズのシステムオプションパラメータ	106
A.15 IBM SVC シリーズのシステムオプションパラメータ	107
A.16 IBM V840/V3000/V5000/V7000/V9000 接続時の設定と注意事項	107
A.16.1 IBM V840/V3000/V5000/V7000/V9000 接続時のシステムオプションパラメータ	107
A.16.2 IBM V840/V3000/V5000/V7000/V9000 接続時のその他の注意事項	107
A.17 IBM XIV シリーズ接続時のシリアル番号表示の差異	108
A.18 Fujitsu FibreCAT CX シリーズ接続時の設定と注意事項	108
A.18.1 Fujitsu FibreCAT CX シリーズ接続時のシステムオプションモード	108
A.18.2 Fujitsu FibreCAT CX シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ	108
A.18.3 Fujitsu FibreCAT CX シリーズ接続時のその他の注意事項	109
A.19 Fujitsu ETERNUS DX60 S2/DX80 S2/DX90 S2 または Fujitsu ETERNUS DX400 S2 シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ設定	109
A.20 Fujitsu ETERNUS DX8900 S4/DX8900 S3/DX8700 S3/DX60 S5/DX100 S5/DX200 S5/DX500 S5/DX600 S5/DX900 S5/AF150 S3/AF250 S3/AF650 S3 接続時のシステムオプションパラメータ設定	109
A.21 HPE（旧 SGI） IS4600 シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ	110
A.22 3PAR T400、T800、F400、V800、V400、StoreServ シリーズ接続時の注意事項	110
A.22.1 3PAR T400、T800、F400、V800、V400、StoreServ シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ	110
A.22.2 3PAR T400、T800、F400、V800、V400、StoreServ シリーズ接続時のその他の注意事項	111
A.23 Seagate Exos X シリーズ接続時の設定と注意事項	111
A.23.1 Exos X シリーズ側でホストにボリュームをマッピングする際の注意事項	111
A.23.2 Exos X シリーズ側のデフォルトで定義された LUN0 に関する注意事項	112
A.24 日立製品以外のストレージシステム接続時の設定	112

付録 B メインフレームシステムに必要な外部ストレージシステムのボリュームの容量	113
B.1 メインフレームシステムにおける外部ストレージシステムのボリュームに必要な容量の考え方	114
B.2 メインフレームシステム用のエミュレーションタイプごとの容量一覧	116

付録 C 他のプログラムプロダクトとの外部ボリュームの運用例.....	119
C.1 Universal Volume Manager と Volume Migration の外部ボリューム運用の流れ.....	120
C.2 Universal Volume Manager と TrueCopy の外部ボリューム運用の流れ.....	121
C.3 Universal Volume Manager と Universal Replicator の外部ボリューム運用の流れ.....	122
C.4 Universal Volume Manager と ShadowImage の外部ボリューム運用の流れ.....	123
C.5 Universal Volume Manager と仮想ボリュームを併用してボリュームコピーする場合の注意事項.....	124
付録 D ペアに設定するボリュームの容量の調整.....	127
D.1 外部ボリュームをプライマリボリュームにして外部ストレージシステムのデータをコピーする流れ.....	128
D.2 外部ボリュームをセカンダリボリュームにして外部ストレージシステムにデータをコピーする流れ.....	128
付録 E リモートコマンドデバイスのマッピングと注意事項.....	131
E.1 リモートコマンドデバイスの概要.....	132
E.2 リモートコマンドデバイスとしてマッピングできるコマンドデバイス.....	132
E.2.1 リモートコマンドデバイスからホストに報告されるコマンドデバイスのデバイス情報.....	133
E.3 リモートコマンドデバイスの注意事項.....	133
付録 F RAID Manager コマンドリファレンス.....	135
F.1 RAID Manager コマンドとアクションの対応表.....	136
F.2 RAID Manager のオプションのパラメータの設定範囲.....	137
付録 G このマニュアルの参考情報.....	139
G.1 操作対象リソースについて.....	140
G.2 このマニュアルでの表記.....	140
G.3 このマニュアルで使用している略語.....	142
G.4 KB（キロバイト）などの単位表記について.....	142
用語解説.....	143
索引.....	165



はじめに

このマニュアルでは、Universal Volume Manager の概要について説明しています。

- 対象ストレージシステム
- マニュアルの参照と適合プログラムバージョン
- 対象読者
- このマニュアルの位置付け
- マニュアルで使用する記号について
- ユーザの操作権限（ロール）について
- REST API の管理ツールについて
- プログラムプロダクト TrueCopy について
- 発行履歴

対象ストレージシステム

このマニュアルでは、次に示す Hitachi Virtual Storage Platform One Block 80 のストレージシステムに対応する製品（プログラムプロダクト）を対象として記述しています。

- Hitachi Virtual Storage Platform One Block 85

このマニュアルでは特に断りのない限り、上記モデルのストレージシステムを単に「ストレージシステム」または「本ストレージシステム」と称することがあります。

本ストレージシステムと接続する VSP E390, VSP E590, VSP E790, VSP E1090、および VSP 5000 シリーズには、オールフラッシュレイモデルとハイブリッドフラッシュレイモデルがあります。このマニュアルでは、オールフラッシュレイモデルとハイブリッドフラッシュレイモデルで接続条件等の差異がない場合は、オールフラッシュレイモデルの名称を使って説明します。

オールフラッシュレイモデル	ハイブリッドフラッシュレイモデル
VSP E390	VSP E390H
VSP E590	VSP E590H
VSP E790	VSP E790H
VSP E1090	VSP E1090H
VSP 5100, 5500	VSP 5100H, 5500H
VSP 5200, 5600	VSP 5200H, 5600H

VSP E990 は、オールフラッシュレイモデルのみです。

マニュアルの参照と適合プログラムバージョン

このマニュアルは、次の DKCMAIN プログラムバージョンに適合しています。

A0-05-21-XX

対象読者

このマニュアルは、次の方を対象読者として記述しています。

- ストレージシステムを運用管理する方
- UNIX[®]コンピュータまたは Windows[®]コンピュータを使い慣れている方
- Web ブラウザを使い慣れている方

このマニュアルの位置付け

このマニュアルでは、主に Universal Volume Manager の機能、操作の準備、およびトラブルシューティングについて説明します。

詳細な操作方法については、次の各管理ツールのマニュアルを参照してください。

管理ツール	参照マニュアル
RAID Manager	『RAID Manager コマンドリファレンス』
詳細 API	『VSP Block Storage REST API リファレンスガイド』
VSP One Block Administrator*	『VSP One Block Administrator ユーザガイド』

注※

Universal Volume Manager の一部の操作のみサポートしています。詳細は、参照マニュアルで確認してください。

マニュアルで使用する記号について

このマニュアルでは、注意書きや補足情報を、次のとおり記載しています。



注意

データの消失・破壊のおそれや、データの整合性がなくなるおそれがある場合などの注意を示します。



メモ

解説、補足説明、付加情報などを示します。



ヒント

より効率的にストレージシステムを利用するのに役立つ情報を示します。

ユーザの操作権限（ロール）について

このマニュアルに記載されている、RAID Manager および内蔵 CLI を操作する際に、前提条件として必要となるロールの詳細は、『RAID Manager ユーザガイド』*を参照してください。

注※

詳細は、「ユーザ認証機能」の Storage Navigator または maintenance utility で設定したユーザの操作権限に従って実行されるコマンドに関する記載を参照してください。

REST API の管理ツールについて

Virtual Storage Platform One Block 80 が提供する REST API の管理ツールには、次の 2 種類があります。それぞれの特徴や使い分けなどの詳細は、『VSP Block Storage REST API リファレンスガイド』を参照してください。

「REST API」と記載している箇所は、次の両方の REST API を示します。

REST API 管理ツール	説明
シンプル API	リクエストラインに simple を含む REST API です。 基本的なプロビジョニングのために設計されており、高速な実行を確保するためのアーキテクチャーを取り入れています。設定項目は最小限に抑えられ、複雑さを軽減し、効率的な手順で迅速にシステムのプロビジョニングができます。
詳細 API	リクエストラインに simple を含まない REST API です。

REST API 管理ツール	説明
	プロビジョニングのための詳細な設定項目を提供しており、ストレージシステムが混在した環境での高度な設定に対応した、幅広い選択肢が用意されています。設定にはシンプル API よりも多くの手順を伴いますが、より柔軟な制御を実現できます。

プログラムプロダクト TrueCopy について

DKCMAIN プログラムバージョン A0-05-21-XX/XX 以前では、TrueCopy は未サポートです。

発行履歴

マニュアル資料番号	発行年月	変更内容
4051-1J-U16-00	2026 年 1 月	新規 適合 DKCMAIN プログラムバージョン : A0-05-21-XX

Universal Volume Manager の概要と構成要素

Universal Volume Manager の概要について説明します。

- 1.1 Universal Volume Manager の概要
- 1.2 Universal Volume Manager の構成要素
- 1.3 外部ストレージシステムのボリュームとの接続に必要な操作
- 1.4 外部ストレージシステムのボリュームのマッピング
- 1.5 Universal Volume Manager と併用できるプログラムプロダクト

1.1 Universal Volume Manager の概要

Universal Volume Manager は、本ストレージシステムを含む複数のストレージシステムを、まるで1つのストレージシステムであるかのように扱えるプログラムプロダクトです。Universal Volume Manager を使用すると、システム管理者は機種異なる複数のストレージシステム内のボリュームを、本ストレージシステム内のボリュームと同様に管理できるようになります。

例えば、Universal Volume Manager を使用すると次のことが統一できます。

- 異なるストレージシステム間のコピー操作
- ホストと複数のストレージシステムとの接続

関連概念

- [1.1.1 異なるストレージシステム間のコピー操作の統一](#)
- [1.1.2 ホストと複数ストレージシステムとの接続の統一](#)

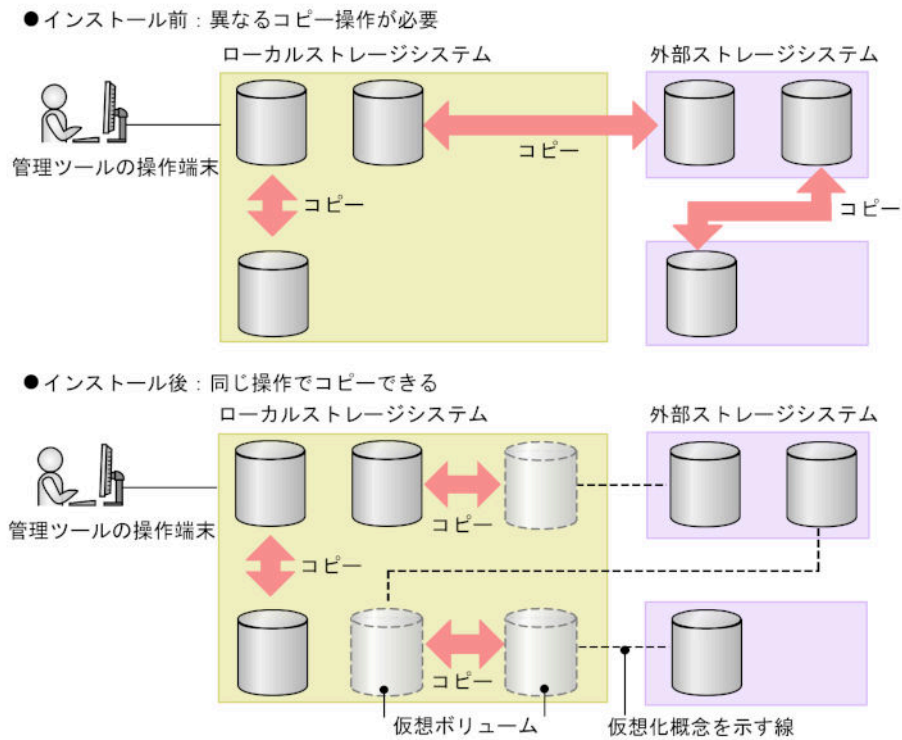
1.1.1 異なるストレージシステム間のコピー操作の統一

異なるストレージシステム間でデータをコピーする場合、通常は、使用するストレージシステムによってコピー操作が異なります。

Universal Volume Manager をインストールすると、ローカルストレージシステム内のボリューム間でデータをコピーするのと同じ操作で、次の操作ができます。

- ローカルストレージシステム内のボリュームと、外部ストレージシステムのボリューム間のコピー
- 異なる外部ストレージシステムのボリューム間のコピー

異なるストレージシステム間のコピー操作の統一の概要を次の図に示します。



関連概念

- [1.1 Universal Volume Manager の概要](#)

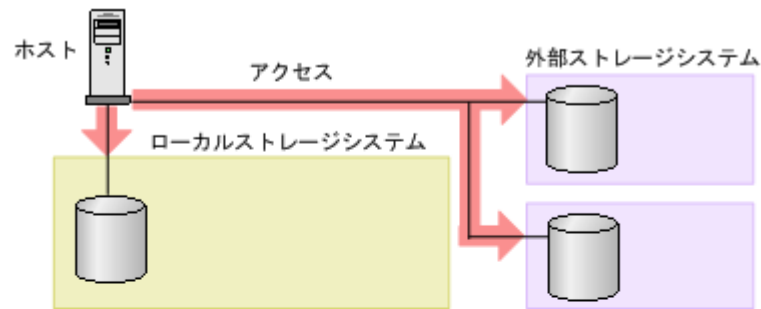
1.1.2 ホストと複数ストレージシステムとの接続の統一

複数のストレージシステムを使ったシステムでは、通常、ホストはすべてのストレージシステムにアクセスする必要があります。システム管理者がホストからボリュームへの接続を設定するには、それぞれのストレージシステムに応じた設定方法に従う必要があります。

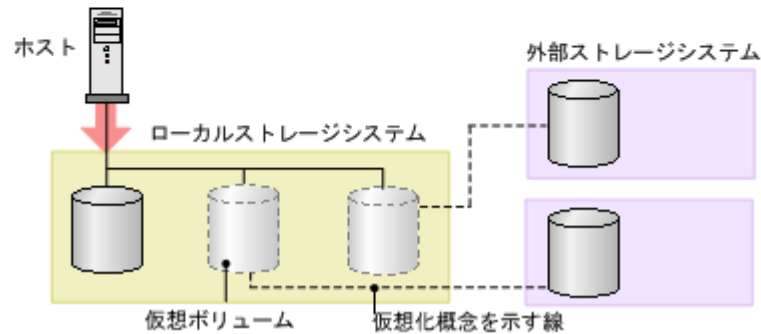
Universal Volume Manager をインストールすると、システム管理者はホストからローカルストレージシステムへの接続を設定するだけで済みます。設定完了後、ホストからは、ローカルストレージシステム内のボリュームを操作するのと同じ方法で、外部ストレージシステム内のボリュームを操作できます。

ホストと複数ストレージシステムとの接続の統一の概要を次の図に示します。

- インストール前：ホストは複数のストレージシステムとの接続が必要



- インストール後：ホストはローカルストレージシステムに接続するだけ



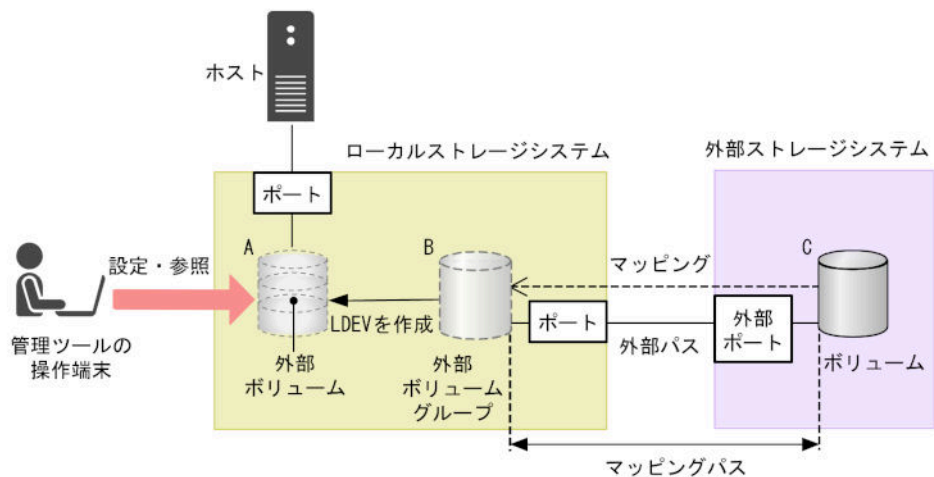
関連概念

- ・ [1.1 Universal Volume Manager の概要](#)

1.2 Universal Volume Manager の構成要素

Universal Volume Manager を使用したシステムは、通常次の要素で構成されています。

Universal Volume Manager の構成要素の関係を次の図に示します。



- ・ ローカルストレージシステム：
接続元の本ストレージシステムを「ローカルストレージシステム」と呼びます。
- ・ 外部ストレージシステム：
接続先のストレージシステムを「外部ストレージシステム」と呼びます。他のマニュアルでは、外部デバイスと呼ぶこともあります。

Universal Volume Manager は、日立製品、日立の OEM 製品、および他社製品（IBM や Dell EMC など）を、接続できる外部ストレージシステムとしてサポートしています。これらのボリュームは、ホストにとっては、ローカルストレージシステムの内部ボリュームとして認識されます。

- 管理ツールの操作端末：
管理ツールが動作しているコンピュータです。
- Universal Volume Manager：
本ストレージシステムを含む複数のストレージシステムを、まるで 1 つのストレージシステムであるかのように扱えるプログラムプロダクトです。
- 外部ストレージシステムのボリューム（図の C）：
外部ストレージシステム内にあるボリューム（図の C）のことを、「外部ストレージシステムのボリューム」と呼びます。
Universal Volume Manager を使って接続元ストレージシステムのボリュームとしてマッピングされた、外部ストレージシステム内のボリュームです。
- 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングしている、ローカルストレージシステムのボリューム（図の B）：
ローカルストレージシステムで管理する仮想的なボリューム（図の B）のことを「外部ボリュームグループ」と呼びます。
Universal Volume Manager を使ってローカルストレージシステムのボリュームとして外部ストレージシステムのボリュームをマッピングした、ローカルストレージシステム内の仮想的なボリュームです。
- 外部ボリュームグループに作成した LDEV（図の A）：
外部ボリュームグループ（図の B）を、実際にホストや他プログラムプロダクトから使用するには、システム管理者が、外部ボリュームグループ内に LDEV を作成する必要があります（図の A）。LDEV は、外部ストレージシステムのボリュームをマッピングした後に VLL 機能（Virtual LUN）を使用して作成します。作成した LDEV のことを、「外部ボリューム」と呼びます。



ヒント

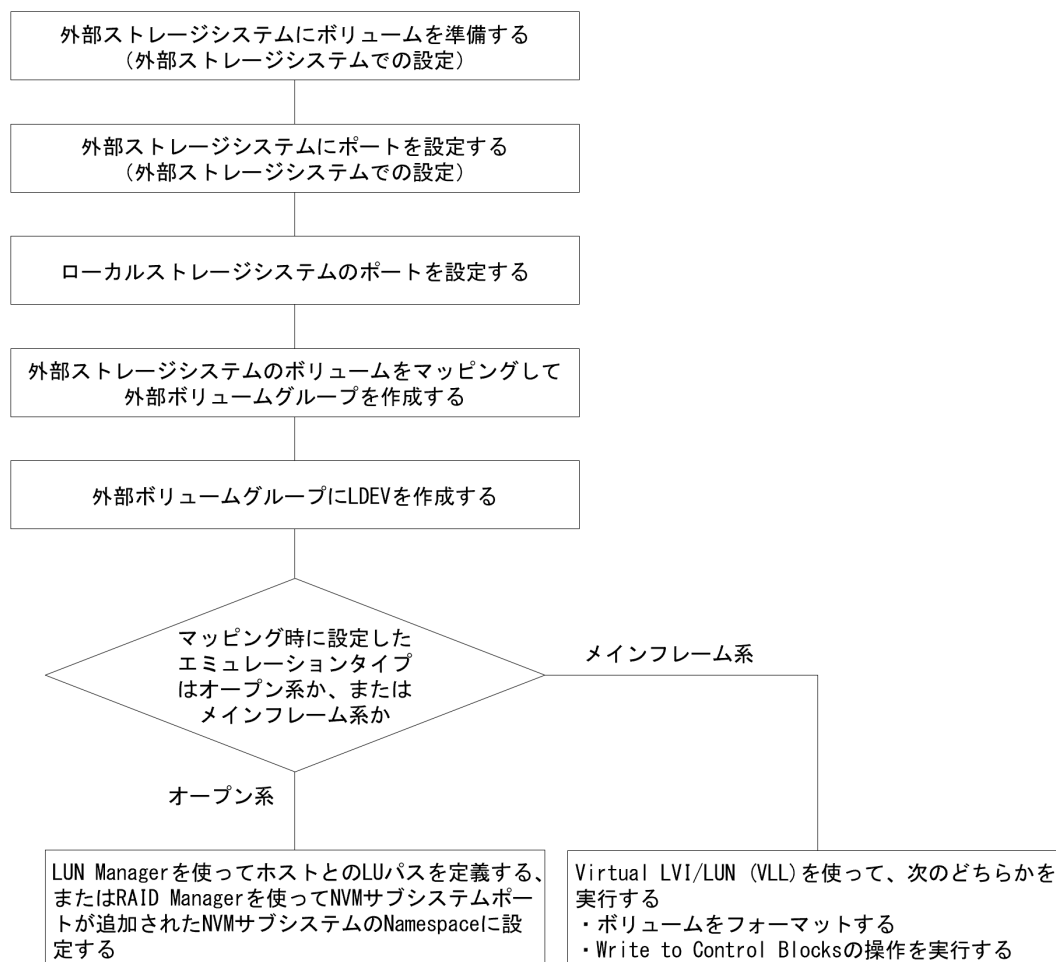
VLL 機能の概念に当てはめた場合、外部ボリュームグループ（外部ストレージシステムのボリュームをマッピングしている仮想ボリューム）は VDEV に、外部ボリューム（外部ボリュームグループに作成した LDEV）は LDEV に該当します。マッピングが完了したあとは、VLL 機能を使用して外部ボリュームグループに可変ボリュームを作成できます。VDEV および LDEV の詳細については、『オープンシステム構築ガイド』および『メインフレームシステム構築ガイド』を参照してください。

- 外部パス：
Universal Volume Manager を使用する前に、ローカルストレージシステムのポートから、外部ストレージシステムのポートまでをケーブルで接続します。このケーブルで接続されたポート間の経路のことを「外部パス」と呼びます。
- マッピング：
ローカルストレージシステムから外部ストレージシステムのボリュームを操作するためには、マッピングが必要です。システム管理者は、外部ストレージシステムのボリュームをローカルストレージシステムの外部ボリュームグループ（図の B）としてマッピングします。マッピング後は、ローカルストレージシステムから、外部ボリュームグループを操作できます。
- マッピングパス：
マッピングによって、外部ストレージシステムのボリュームと外部ボリュームグループとの間にパスが自動的に設定されます。このパスを「マッピングパス」と呼びます。マッピングパス

は、ボリュームとボリュームを結ぶパスです。マッピングパスの一部に、外部パスを使用しています。

1.3 外部ストレージシステムのボリュームとの接続に必要な操作

外部ストレージシステムのボリュームとの接続に必要な操作を次の図に示します。



外部ストレージシステムをローカルストレージシステムに接続しただけでは、外部ストレージシステムからローカルストレージシステムを認識できません。

ローカルストレージシステムから外部ストレージシステムに接続されたポートに対して外部 Target ポートを探索することで、初めて外部ストレージシステムからローカルストレージシステムをホストとして認識できます。



ヒント

外部 Target ポートを探索しても、その後マッピングせずに 15 分以上経過した場合は、再び外部ストレージシステムからローカルストレージシステムを認識できない場合があります。

外部ストレージシステムのボリュームをホストから使えるようにする設定を次に示します。

1. 外部ストレージシステムに、ボリュームを準備します。
2. 外部ストレージシステムのポートとシステムオプションを設定します。
操作方法は、ご使用の外部ストレージシステムのマニュアルを参照してください。

3. RAID Manager を使って、外部ストレージシステムを接続するローカルストレージシステムのポート属性を Bidirectional ポートに設定します。
4. 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングし、外部ボリュームグループを作成します。マッピング後に、マッピングした外部ストレージシステムのボリュームにある既存のデータをローカルストレージシステムから読み出したい場合は、マッピング時に外部ボリュームグループのエミュレーションタイプを OPEN-V に設定する必要があります。また、次の手順で、外部ボリュームグループに作成する LDEV の数を 1 つにする必要があります。
5. 外部ボリュームグループに LDEV を作成します。
6. マッピング時に設定したエミュレーションタイプによって、次の操作を実行します。
 - メインフレームシステム用のエミュレーションタイプを設定した場合 VLL 機能を使ってボリュームをフォーマットするか、または Write to Control Blocks の操作を実行します。詳細については、『メインフレームシステム構築ガイド』および『RAID Manager コマンドリファレンス』を参照してください。
 - オープンシステム用のエミュレーションタイプを設定した場合 LUN Manager を使って LU パスを設定するか、または RAID Manager を使って NVM サブシステムポートが追加された NVM サブシステムの Namespace に設定します。LU パスまたは Namespace を設定する手順については、『オープンシステム構築ガイド』および『RAID Manager コマンドリファレンス』を参照してください。



メモ

NVMe の Namespace に関する設定は、RAID Manager から操作してください。NVMe の Namespace の操作詳細については、『オープンシステム構築ガイド』および『RAID Manager コマンドリファレンス』を参照してください。

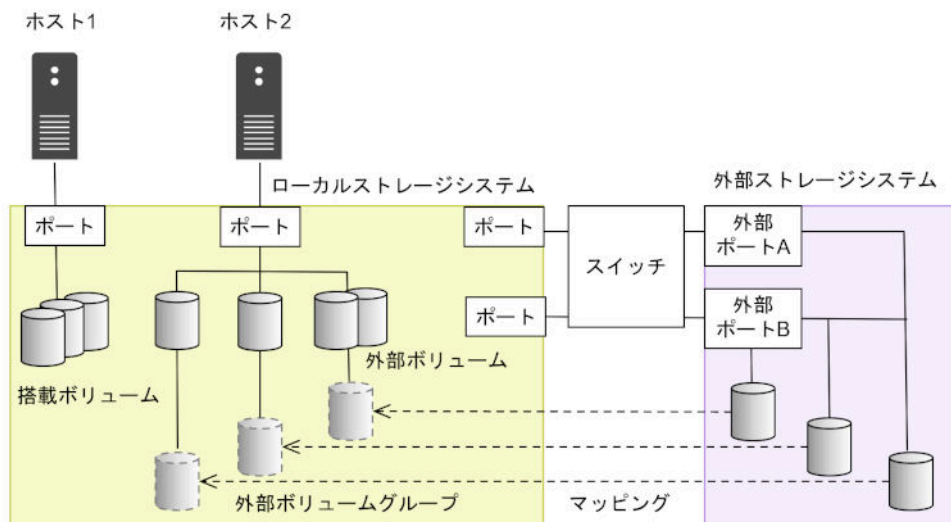
関連タスク

- [4.1 ローカルストレージシステムのポート属性を設定する](#)
- [4.2 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングする](#)

1.4 外部ストレージシステムのボリュームのマッピング

外部ストレージシステムのボリュームをローカルストレージシステムから操作するには、外部ストレージシステムのボリュームのマッピングが必要です。マッピングとは、外部ストレージシステムのボリュームに、ローカルストレージシステムから操作するために必要な管理番号を割り当てることです。外部ストレージシステムのボリュームに管理番号を割り当てると、システム管理者は、外部ストレージシステムのボリュームをローカルストレージシステムのパーティグループであるかのように管理できるようになります。また、外部ボリュームグループに作成した LDEV（外部ボリューム）はホストに割り当てたり、プログラムプロダクトのボリュームとして利用できたりします。この管理番号は、「外部ボリュームグループ番号・通し番号」で表されます（例：2-1、50-3）。

Universal Volume Manager のマッピングの概念を図に示します。



図では、Universal Volume Manager によってローカルストレージシステムに他のストレージシステムを接続しています。ローカルストレージシステムは、外部ストレージシステム接続用のポートからスイッチを経由して、外部ストレージシステムと接続しています。接続した外部ストレージシステムのボリュームは、ローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングされています。

図のように、外部ストレージシステムのボリュームをローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングすれば、外部ストレージシステムのボリュームをローカルストレージシステムのボリュームであるかのようにローカルストレージシステムから操作できるようになります。



ヒント

外部ストレージシステムのボリュームがローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングされている場合、そのボリュームにアクセスしたりコピーしたりできるのは、ローカルストレージシステムに接続しているホストだけです。外部ストレージシステムに接続しているホストからは、ローカルストレージシステムにマッピングされているボリュームへのアクセスやコピーはできません。

関連概念

- [1.4.1 ポート探索とボリューム探索](#)

1.4.1 ポート探索とボリューム探索

ポート探索とボリューム探索は、外部ストレージシステムのボリュームを見つけるための処理で、外部ストレージシステムのボリュームのマッピング時および外部パスの追加時に実行します。

ポート探索とは、ローカルストレージシステムの外部ストレージシステムへ接続するポートから、接続先の外部ストレージシステムの **Target** ポートを検索し、情報を取得する処理のことです。ポート探索を実行することで、管理ツール上に外部ストレージシステムの最新情報を表示できます。

ボリューム探索は、外部ストレージシステムの **Target** ポートからボリュームを検索し、情報を取得する処理のことです。ボリューム探索を実行することで、管理ツール上に外部ストレージシステムのボリュームの最新情報を表示できます。

関連概念

- [1.4 外部ストレージシステムのボリュームのマッピング](#)

1.5 Universal Volume Manager と併用できるプログラムプロダクト

Universal Volume Manager を使ってマッピングした外部ストレージシステムのボリュームは、本ストレージシステムのプログラムプロダクトを使って使用したり管理したりできます。各プログラムプロダクトで外部ボリュームを使用する場合の操作方法と注意事項については、各プログラムプロダクトのユーザーズガイドを参照してください。

LUN Manager

オープンシステム用のエミュレーションタイプを指定してマッピングした場合、マッピングしたボリュームをホストから使用するために、LUN Manager を使って LU パスを設定する必要があります。

外部ストレージシステムのボリュームをマッピングしているポートのトポロジ設定は変更できません。

Virtual LVI/LUN (VLL)

メインフレームシステム用のエミュレーションタイプを指定してマッピングした場合、VLL 機能を使ってマッピング後のボリュームをフォーマットする (LDEV フォーマット操作を実行する) か、または Write to Control Blocks の操作を実行する必要があります。ボリュームのフォーマットおよび Write to Control Blocks の操作手順については、『メインフレームシステム構築ガイド』を参照してください。

VLL 機能を使って外部ボリュームグループ内に LDEV を作成した場合、作成された LDEV のキャッシュモードは作成元の外部ボリュームグループの設定と同じになります。

Volume Migration

外部ボリュームを Volume Migration で使用できます。

TrueCopy

外部ボリュームを TrueCopy で使用できます。

TrueCopy for Mainframe

外部ボリュームを TrueCopy for Mainframe で使用できます。

global-active device

外部ボリュームを global-active device で使用できます。

Universal Replicator

外部ボリュームを Universal Replicator で使用できます。

Universal Replicator for Mainframe

外部ボリュームを Universal Replicator for Mainframe で使用できます。

ShadowImage

外部ボリュームを ShadowImage で使用できます。

ShadowImage for Mainframe

外部ボリュームを ShadowImage for Mainframe で使用できます。

Dynamic Provisioning、Dynamic Provisioning for Mainframe

外部ボリュームを Dynamic Provisioning と Dynamic Provisioning for Mainframe で使用できません。

プールボリュームとして使用できる外部ボリュームのエミュレーションタイプは、メインフレームシステムの場合は 3390-V だけです。

SNMP Agent

外部ボリュームの情報を表示できます。

外部ストレージシステムへ接続するポートの情報を表示できます。



メモ

Universal Volume Manager と Thin Image Advanced の併用はできません。

関連タスク

- ・ [付録 C.1 Universal Volume Manager と Volume Migration の外部ボリューム運用の流れ](#)
- ・ [付録 C.2 Universal Volume Manager と TrueCopy の外部ボリューム運用の流れ](#)
- ・ [付録 C.3 Universal Volume Manager と Universal Replicator の外部ボリューム運用の流れ](#)
- ・ [付録 C.4 Universal Volume Manager と ShadowImage の外部ボリューム運用の流れ](#)
- ・ [付録 D.1 外部ボリュームをプライマリボリュームにして外部ストレージシステムのデータをコピーする流れ](#)
- ・ [付録 D.2 外部ボリュームをセカンダリボリュームにして外部ストレージシステムにデータをコピーする流れ](#)

Universal Volume Manager のシステム要件と操作に関する注意事項

Universal Volume Manager のシステム要件と操作に関する注意事項について説明します。

- 2.1 Universal Volume Manager システムの要件
- 2.2 Universal Volume Manager の操作に関する注意事項

2.1 Universal Volume Manager システムの要件

Universal Volume Manager の操作に必要な要件は次のとおりです。

本ストレージシステム (1 台目のストレージシステム)

本ストレージシステムに必要なハードウェアとファームウェアが、すべて使用できるように設定されている必要があります。

1 台目のストレージシステム以外のストレージシステム

外部ストレージシステムとして使用するストレージシステムが必要です。

管理ツールの操作端末

ストレージシステムを操作するための管理ツールの操作端末が必要です。

Universal Volume Manager プログラムプロダクトに必要なライセンスキー

Universal Volume Manager を操作するためには、ライセンスキーを使って Universal Volume Manager をインストールする必要があります。

関連概念

- [2.1.1 外部ストレージシステムとして接続できるストレージシステムの種類](#)
- [2.1.2 ドライブタイプによる使用推奨度](#)
- [2.1.3 Universal Volume Manager の要件](#)

2.1.1 外部ストレージシステムとして接続できるストレージシステムの種類

外部ストレージシステムとして接続できるストレージシステムの種類と、それぞれのストレージシステムの表記に関する備考を次の表にまとめます。表にないストレージシステムについてはお問い合わせください。なお、外部ストレージシステムとして接続できるのは、ブロックストレージだけです。ブロックストレージ以外のストレージシステムは接続できません。

外部ストレージシステムごとの固有設定については、「[付録 A. 外部ストレージシステム接続時の設定と注意事項](#)」を参照してください。設定に関する記載がない場合、通常、ローカルストレージシステムと接続する外部ストレージシステムのポートは、Windows ホストに接続する Target ポートとして設定する必要があります。設定の詳細については、必要に応じてサードパーティーベンダにお問い合わせください。

ローカルストレージシステムと外部ストレージシステム間の接続形態については、外部ストレージシステムごとにサポート状況が異なりますので、お問い合わせください。

ストレージシステム	備考
VSP One B85 ストレージシステム	<ul style="list-style-type: none">• 管理ツール上には、「VSP One B85」と表示されます。• 外部パスのパスモードは Multi です。
VSP One B20 ストレージシステム	<ul style="list-style-type: none">• 管理ツール上には、「VSP One B20」と表示されます。• 外部パスのパスモードは Multi です。

ストレージシステム	備考
VSP E シリーズストレージシステム	<ul style="list-style-type: none"> 管理ツール上には、「VSP E series」と表示されます。 外部バスのバスモードは Multi です。
VSP G130, G150, G350, G370, G700, G900 ストレージシステム VSP F350, F370, F700, F900 ストレージシステム	<ul style="list-style-type: none"> 管理ツール上には、「VSP Gx00」と表示されます。 外部バスのバスモードは Multi です。
VSP G100, G200, G400, G600, G800 ストレージシステム VSP F400, F600, F800 ストレージシステム	<ul style="list-style-type: none"> 管理ツール上には、「VSP Gx00」と表示されます。 外部バスのバスモードは Multi です。
VSP 5000 シリーズストレージシステム	<ul style="list-style-type: none"> 管理ツール上には、「VSP 5000 series」と表示されます。 外部バスのバスモードは Multi です。
VSP G1000, G1500, F1500 ストレージシステム	<ul style="list-style-type: none"> 管理ツール上には、「VSP G1000」と表示されます。 外部バスのバスモードは Multi です。
VSP One SDS Block ストレージシステム	<ul style="list-style-type: none"> 管理ツール上には、「VSSB」と表示されます。 外部バスのバスモードは ALUA です。
Hitachi Virtual Storage Platform VX7	<ul style="list-style-type: none"> 管理ツール上には、「XP7」と表示されます。 外部バスのバスモードは Multi です。
HPE XP8 Storage	<ul style="list-style-type: none"> 管理ツール上には、「XP8」と表示されます。 外部バスのバスモードは Multi です。
HPE XP7 Storage	<ul style="list-style-type: none"> 管理ツール上には、「XP7」と表示されます。 外部バスのバスモードは Multi です。
EVA ストレージシステム	<ul style="list-style-type: none"> 管理ツール上には、「EVA」と表示されます。 外部バスのバスモードは Single です。
IBM ストレージシステム	サポートしているストレージシステムの具体的な形式については、お問い合わせください。
Dell EMC ストレージシステム	サポートしているストレージシステムの具体的な形式については、お問い合わせください。
富士通ストレージシステム	サポートしているストレージシステムの具体的な形式については、お問い合わせください。
NEC ストレージシステム	サポートしているストレージシステムの具体的な形式については、お問い合わせください。
SUN ストレージシステム	サポートしているストレージシステムの具体的な形式については、お問い合わせください。
NetApp ストレージシステム	サポートしているストレージシステムの具体的な形式については、お問い合わせください。
3PAR ストレージシステム	サポートしているストレージシステムの具体的な形式については、お問い合わせください。

関連概念

- 2.1 Universal Volume Manager システムの要件

2.1.2 ドライブタイプによる使用推奨度

外部ボリュームのドライブタイプによる使用用途の推奨可否を次の表に示します。

この表は、あくまでも推奨度を示しており、実際の使用可否は、お客様環境の使用方法や性能要件に依存します。

外部ボリュームのエミュレーションタイプがオープンシステム用の場合

用途	ドライブタイプ	
	SAS/SSD/FMD/SCM	SATA
データベース オンライントランザクション処理 (OLTP)	△	△
ホストからのファイル操作 (読み込み、書き込み)	○	△
ホストからのファイル操作 (読み込みが主な用途)	○	○
バックアップ	○	◎
アーカイブ	○	◎

(凡例)

- ◎：推奨
- ：使用可
- △：推奨しません

外部ボリュームのエミュレーションタイプがメインフレームシステム用の場合

用途	ドライブタイプ	
	SAS/SSD/FMD/SCM	SATA
データベース オンライントランザクション処理 (OLTP)	×	×
ホストからのファイル操作 (読み込み、書き込み)	×	×
ホストからのファイル操作 (読み込みが主な用途)	×	×
バックアップ	△※1	△※2
アーカイブ	△※1	△※2

(凡例)

- △：推奨しません
- ×：使用不可

注※1

ShadowImage for Mainframe の S-VOL 用途限定で使用可

注※2

Volume Migration による移動先用途限定で使用可

関連概念

- [2.1 Universal Volume Manager システムの要件](#)

2.1.3 Universal Volume Manager の要件

Universal Volume Manager の要件を次の表にまとめます。

項目	要件
接続可能な外部ストレージシステムの最大数	4,096 個
登録可能な外部ストレージシステムの WWN の最大数	16,384 個
外部パスに使用できるインターフェース	<ul style="list-style-type: none"> • ファイバチャネル • iSCSI
外部パスに設定できるポートの構成	<ul style="list-style-type: none"> • ファイバチャネルの場合：ポートの動作モードが、SCSI モードに設定されていること • iSCSI の場合：なし
マッピングできる外部ストレージシステムのポートの最大数	<ul style="list-style-type: none"> • ファイバチャネルの場合：1 個のポートに対して 1,024 個 • Ethernet 25Gbps チャネルボードの場合：1 個のポートに対して 64 個
パスグループの最大数	63,232 個
外部ボリュームグループの最大数	63,232 個 Dynamic Provisioning を使用している場合は、次の式を満たす必要があります。 外部ボリュームグループ数 + 仮想ボリューム数 ≤ 63,232
すべての外部ボリュームグループから作成可能な LDEV (外部ボリューム) の最大数	VSP One B85 : 63,232 個 Dynamic Provisioning を使用している場合は、次の式を満たす必要があります。 外部ボリュームグループに作成した LDEV 数 + 仮想ボリューム数 + 非仮想ボリューム数 ≤ モデルごとの最大数
ひとつの外部ボリュームグループから作成可能な LDEV (外部ボリューム) の最大数	2,048 個
外部ストレージシステムの 1 個のボリュームに対して設定できるマッピングパスの最大数	8 本
マッピングできる外部ストレージシステムのボリュームの最大容量	外部ストレージシステムの 1 個のボリュームにつき 256TB (549,755,813,888block)。 指定した外部ストレージシステムのボリュームが 256TB 以上の場合、256TB までは使用できます。 256TB を超える領域に記録されているデータにはアクセスできません。
マッピングできる外部ストレージシステムのボリュームの最小容量	<ul style="list-style-type: none"> • データダイレクトマップ属性を有効にする場合 外部ストレージシステムの 1 個のボリュームにつき 16,777,216block (約 8,192MB)

項目	要件
	<ul style="list-style-type: none"> データダイレクトマップ属性を無効にする場合 外部ストレージシステムの1個のボリュームにつき 96,000block (約 47MB)
1個のポートに対してマッピングできる外部ストレージシステムのボリュームの最大数	スイッチを経由して外部ストレージシステムへ接続する1個のポートが複数のTargetポートに接続されている場合、Targetポートに定義されているLUの合計は4,096個までです。
外部ボリュームのシステム最大容量	外部ストレージシステム内の4TBまでのボリュームをマッピングする場合、外部ボリュームグループとしては、外部ストレージシステムのボリュームと同じ容量の1個のLDEV(LU)として定義されます。 データダイレクトマップ属性が有効なDynamic Provisioningの仮想ボリュームを使用すると、4TBを超える容量の外部ストレージシステムのボリュームを、容量を変更しないで接続元のストレージシステムの仮想ボリュームとしてマッピングできます。データダイレクトマップ属性が有効な仮想ボリュームを使ったマッピングについては、『オープンシステム構築ガイド』を参照してください。 外部ボリュームグループの最大容量を超える領域に記録されているデータにはアクセスできません。
外部ボリュームのRAIDレベル	内部処理としては、外部ボリュームグループのRAIDレベルを一律RAID-1として扱っています。管理ツールの表示では、「-」(ハイフン)が表示されます。また、上位装置(OS)に報告する外部ストレージシステムに関する値も、RAIDレベルは一律RAID-1として報告されます。
外部ボリュームグループから作成可能なLDEVの最大容量	<ul style="list-style-type: none"> データダイレクトマップ属性が有効な外部ボリュームグループからLDEVを作成する場合 1個の外部ボリュームにつき256TB (549,755,813,888block)。 データダイレクトマップ属性が有効でない外部ボリュームグループからLDEVを作成する場合 1個の外部ボリュームにつき4TB (8,589,934,592block)。 データダイレクトマップ属性が有効な仮想ボリュームを使ったマッピングについては、『オープンシステム構築ガイド』を参照してください。

関連概念

- 2.1 Universal Volume Manager システムの要件
- (3) ポートに関する注意事項 (iSCSI を使用するとき)
- 3.3 マッピング時に設定する外部ボリュームグループ

2.2 Universal Volume Manager の操作に関する注意事項

Universal Volume Manager の操作に関する注意事項について説明します。

関連概念

- 2.2.1 マッピング時の注意事項

- [2.2.3 外部ボリュームの属性に関する注意事項](#)
- [2.2.5 性能に関する注意事項](#)
- [2.2.6 外部ストレージシステムの保守に関する注意事項（再マッピング）](#)
- [2.2.7 iSCSI を使用するときの注意事項](#)
- [2.2.8 ファイバチャネルを使用するときの注意事項](#)
- [2.2.9 外部ボリュームのコマンドを同時に複数実行するときの注意事項](#)

2.2.1 マッピング時の注意事項

- マッピングする前に、外部ストレージシステムのボリュームがホストからリザーブされていないことを確認してください。
ホストからリザーブされているボリュームは、マッピングできません。マッピングしたいボリュームがホストからリザーブされている場合は、リザーブの設定を解除してからマッピングしてください。
- マッピングした外部ストレージシステムのボリュームには、ホストからリザーブの設定をしないでください。
マッピングしたボリュームにリザーブを設定すると、外部ボリュームが閉塞状態になります。
- マッピングした外部ストレージシステムのボリュームには、ローカルストレージシステム側だけからアクセスしてください。
例えば、次のような用途でアクセスしないでください。
 - 外部ストレージシステム側に接続したホストからアクセスする。
 - 外部ストレージシステム側の機能（コピー機能など）を使ってアクセスする。
 - 他の日立ストレージシステムから外部ボリュームとしてアクセスする。
ローカルストレージシステム以外の装置から、外部ボリュームとして使用中のボリュームにアクセスした場合、ローカルストレージシステム以外の装置とローカルストレージシステム間のアクセスを排他できないため、データ不正が発生する可能性があります。
ローカルストレージシステムに接続している外部ストレージシステムのボリュームのうち、ローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングされていないボリュームについては、ホストからのアクセスに制限はありません。
- 外部ストレージシステムの間接ボリューム（マルチプラットフォームボリューム）は、ローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングしないでください。
- 所有権を持つ外部ストレージシステムを接続する場合、外部ストレージシステムのプライマリコントローラへの外部パスを、プライマリパスとして設定してください。
所有権とは、ボリュームを制御する独占権のことです。所有権を持つコントローラをプライマリコントローラと呼びます。所有権を持たないコントローラへの外部パスがプライマリパスとして設定されている場合、所有権の切り替えが発生し、性能に影響するおそれがあります。
- 外部ストレージシステムの設定を変更する場合、まず、ローカルストレージシステムにマッピングされている外部ストレージシステムのボリュームを切断してからマッピングを解除し、その後、外部ストレージシステムの設定変更後に再マッピングする必要があります。マッピングをし直さなかった場合、ローカルストレージシステムで外部ボリュームを使用できなくなります。
- 外部ストレージシステムのボリュームがマッピングされているローカルストレージシステムのボリュームに LU パスまたは NVMe の Namespace が設定されている場合、マッピングは解除できません。
- 外部ボリュームが、TrueCopy、Universal Replicator、ShadowImage、または global-active device などのペアを作成するボリュームに指定されている場合、マッピングは解除できません。

- 外部ボリュームがプールボリュームに設定されている場合、マッピングは解除できません。
- 外部ボリュームが Quorum ディスクに設定されている場合、マッピングは解除できません。

関連概念

- [2.2 Universal Volume Manager の操作に関する注意事項](#)

関連タスク

- [4.2 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングする](#)
- [4.14 外部ストレージシステムのボリュームのマッピングを解除する](#)

2.2.2 メインフレームから外部ボリュームを使用する場合の注意事項

- 外部パスに iSCSI を使用する外部ボリュームは、メインフレームの OS から使用できません (3390-x などのエミュレーションタイプを外部ボリュームに設定できません)。
- 外部ボリュームをメインフレームの OS から使用する場合 (3390-x などのエミュレーションタイプを外部ボリュームに設定する場合)、1 個の外部ボリュームグループに作成する LDEV の数が 1 個になるような外部ボリュームグループを選択するか、事前に外部ストレージシステムのボリュームの容量を調整してからマッピングしてください。
1 個の外部ボリュームグループに複数の LDEV が作成されている場合、それらの LDEV への I/O が集中したときに、外部ストレージシステムのボリュームへの Read/Write コマンドがタイムアウトになることがあります。タイムアウトになった場合は、SIM (Service Information Message) (21d2xx) が報告されます。
- 外部ボリュームをメインフレームの OS から使用する場合の MIH (Missing Interrupt Handler) タイマは、45 秒 (推奨値) に設定してください。

関連概念

- [2.2 Universal Volume Manager の操作に関する注意事項](#)

2.2.3 外部ボリュームの属性に関する注意事項

- 外部ボリュームグループに作成されるすべての LDEV の外部ボリューム属性は、同じになります。
VLL 機能を使って LDEV を再作成した場合も、属性は引き継がれます。
- 外部ボリュームグループ内の LDEV は、すべて同じキャッシュモードになります。
- 外部ストレージシステム側で設定されているボリュームの属性 (例えば、ポートセキュリティ、LUN Security の属性など) は、マッピング時には引き継がれません。
必要に応じて、マッピング後のボリュームに対してローカルストレージシステム側から設定してください。
- 外部ボリュームグループに、T10 PI 属性が有効な LDEV は作成できません。

関連概念

- [2.2 Universal Volume Manager の操作に関する注意事項](#)

関連タスク

- [4.2 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングする](#)

2.2.4 外部パスに関する注意事項

(1) 外部パスとして使用できない経路

ローカルストレージシステムと外部ストレージシステムをファイバチャネルで接続する場合、次のようなローカルストレージシステムのポートと外部ストレージシステムのポート間の経路は外部パスとして使用できません。外部パスとして使用できない経路を使用した場合、外部ストレージシステムからローカルストレージシステムへの接続が切断される可能性があります。外部パスとして使用できる経路を使用してください。

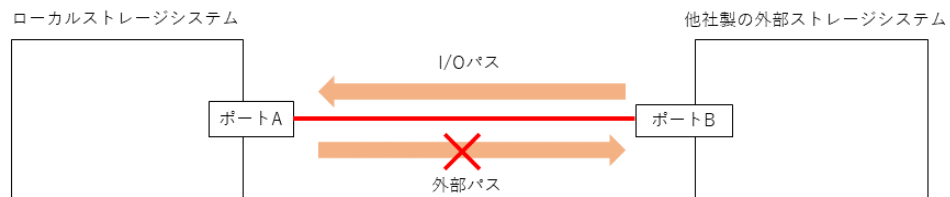
1. 他社製の外部ストレージシステムのポートを起点とし、ローカルストレージシステムのポートを終点とする I/O パス※で使用中の経路
2. [1] の I/O パスでのローカルストレージシステムのポートを、起点として使用する経路

注※

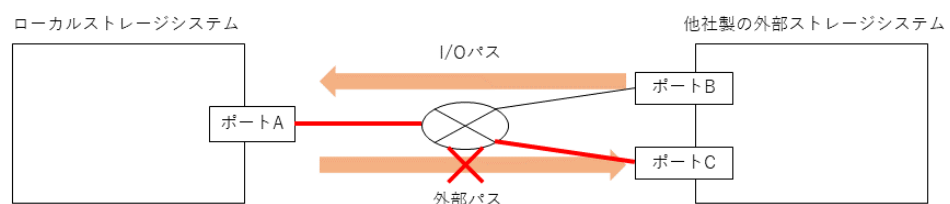
Universal Volume Manager と同様の他社のストレージ仮想化機能など、外部ストレージシステムからローカルストレージシステムに対し I/O を発行する経路を指します。

外部パスとして使用できない経路

ポート A を起点、ポート B を終点とする経路は外部パスとして使用できません。ポート A を起点、ポート B を終点とする経路を外部パスとして使用した場合、ポート B を起点、ポート A を終点とする I/O パスが切断される可能性があります。



ポート A を起点、ポート C を終点とする経路は外部パスとして使用できません。ポート A を起点、ポート C を終点とする経路を外部パスとして使用した場合、ポート B を起点、ポート A を終点とする I/O パスが切断される可能性があります。

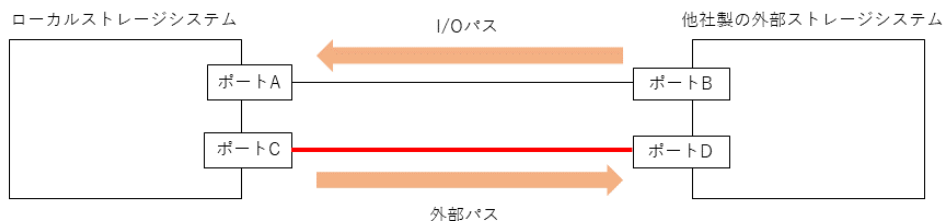


メモ

- RAID Manager には、外部ストレージシステムからローカルストレージシステムへの接続の切断の可能性がある処理を抑止するコマンドオプションがあります。詳細は、「[\(2\) 使用中のパス経路に外部パスを追加する場合の注意事項](#)」を参照してください。
- 外部ストレージシステムが日立製の場合は、使用中の外部パス、リモートパスと同一経路に外部ストレージシステムへの外部パスを追加できます。ただし、外部ストレージシステムからのパスが一時的に切断される可能性があります。詳細は、「[\(2\) 使用中のパス経路に外部パスを追加する場合の注意事項](#)」を参照してください。

外部パスとして使用できる経路

ポート C を起点、ポート D を終点とする経路を外部パスとして使用可能です。



(2) 使用中のパス経路に外部パスを追加する場合の注意事項

外部パスを追加する際は、同じ経路を使用する他のパスに注意してください。他のパスと同じ経路への外部パス追加可否を示します。

外部ストレージシステム	使用中パスの経路への外部パス追加可否	注意事項
日立製	以下の使用中パスの経路に追加できる。 <ul style="list-style-type: none"> 日立製ストレージシステムからローカルストレージシステムへの外部パス リモートパス 	次の表に示す操作をすると、使用中パスが、一時的に切断される可能性がある（直ちに再接続されるため、使用中パスの閉塞は発生しない）。 このため、外部ボリュームに対するホスト I/O 性能またはリモートコピー性能が一時的に低下する可能性がある。
他社製	以下の使用中パスの経路に追加できない。 <ul style="list-style-type: none"> 他社製の外部ストレージシステムからローカルストレージシステムへの I/O パス 	次の表に示す操作をすると、使用中パスが切断される可能性がある。

表 1 接続の切断が発生する可能性がある操作

管理ツール	コマンドまたはリクエストライン
RAID Manager	<code>raidcom add external_grp</code>
	<code>raidcom add path</code>
	<code>raidcom discover external_storage</code>
	<code>raidcom discover lun</code>
詳細 API	<code>POST <ベース URL >/v1/objects/external-parity-groups</code>
	<code>POST <ベース URL >/v1/objects/external-path-groups/<オブジェクト ID >/actions/add-path/invoke</code>
	<code>GET <ベース URL >/v1/objects/external-storage-ports</code>
	<code>GET <ベース URL >/v1/objects/external-storage-luns</code>

日立製の外部ストレージシステムに上記操作をする場合は、外部パスまたはリモートパスとして使用中でない経路を使用するよう、接続構成を変更してください。または、外部ボリュームに対するホスト I/O 性能またはリモートコピー性能が一時的に低下しても問題ないことを確認してから操作してください。

他社製の外部ストレージシステムに上記操作をする場合は、他社製の外部ストレージシステムからローカルストレージシステムへの I/O パスに使用していない経路を使用してください。

より安全に運用するために

上記の RAID Manager コマンドには、外部ストレージシステムからローカルストレージシステムへの接続の切断の可能性がある処理を抑止するコマンドオプション「-safety_check enable」を指定できます。

- raidcom discover external_storage コマンドに-safety_check enable オプションを指定すると、接続の切断の可能性がある経路は“Unknown”と表示されます。
- 日立製の外部ストレージシステムが“Unknown”の場合は、一時的な接続の切断によって、当該経路を使用する外部ボリュームのホスト I/O 性能またはリモートコピー性能が一時的に低下する可能性があります。外部パスまたはリモートパスとして使用中でない経路を使用するよう、接続構成を変更してください。または、一時的な性能低下が発生しても問題ない場合には、-safety_check enable オプションを指定せずにコマンドを実行してください。
- 他社製の外部ストレージシステムが“Unknown”の場合は、他社製の外部ストレージシステムからローカルストレージシステムへの I/O パスに使用していない経路を使用するよう、接続構成を変更してください。
- 詳細は『RAID Manager コマンドリファレンス』を参照してください。

(3) 物理パスに関する注意事項

ファイバチャネルまたは iSCSI の物理パスを交換するときには、交換する物理パスを使用している外部パスを事前に削除してください。

2.2.5 性能に関する注意事項

- 外部ボリュームの読み込みや書き込みの性能は、外部ストレージシステムの性能や状況の影響を受けます。
外部ストレージシステムに高い負荷がかかっている場合、外部ボリュームの読み込みや書き込み処理の速度が遅くなります。この場合、メインフレームホストからの I/O は MIH エラーになることがあります。
- 外部ボリュームに対して、外部ストレージシステムの I/O 性能以上の I/O をローカルストレージシステムに接続したホストから実行した場合、ホストからのコマンドが時間切れ (Timeout) になるおそれがあります。
外部ストレージシステムが受け付け可能な I/O 流入量の最大値より、ホストから外部ボリュームへの I/O 流入量が多くなった場合、ホストからローカルストレージシステムへのコマンドがタイムアウトになるおそれがあります。外部ストレージシステムの I/O 流入量の限界を考慮して構成してください。
- 外部ボリュームに対して、本ストレージシステムの各プログラムプロダクトの機能による I/O 処理を実行した場合、外部ストレージシステムの I/O 性能以上に I/O 処理を実行すると、コマンドが時間切れ (Timeout) になりエラーが発生することがあります。
外部ストレージシステムが受け付け可能な I/O 流入量の最大値より、各プログラムプロダクトから外部ボリュームへの I/O 流入量が多くなった場合、各プログラムプロダクトのコマンドがタイムアウトになり、エラーが発生するおそれがあります。外部ストレージシステムの I/O 流入量の限界を考慮して構成してください。
- ホストから外部ボリュームを使用する場合、外部ボリュームのパス閉塞監視時間に注意してください。
ホストのコマンドタイムアウト時間よりもパス閉塞監視時間が長い場合、外部ストレージシステムの電源オフ時や障害時に、ホストからのコマンドがタイムアウトになるおそれがあります。ホスト I/O を重視する場合は、外部ボリュームのパス閉塞監視時間を、ホストのコマンドタイムアウト時間以下に設定してください。

関連概念

- [2.2 Universal Volume Manager の操作に関する注意事項](#)

2.2.6 外部ストレージシステムの保守に関する注意事項（再マッピング）

外部ストレージシステムの設定を変更する場合、まず、ローカルストレージシステムにマッピングされている外部ストレージシステムのボリュームを切断してからマッピングを解除し、その後、外部ストレージシステムの設定変更後に再マッピングする必要があります。マッピングをし直さなかった場合、ローカルストレージシステムで外部ボリュームを使用できなくなります。

再マッピングが必要になる外部ストレージシステムの設定の例を次に示します。

- ローカルストレージシステムに接続しているすべての Target ポートの WWN/iSCSI 名を変更する
- 外部ストレージシステムのシリアル番号を変更する
- 外部ストレージシステムのボリュームの LUN を変更する
- 外部ストレージシステムのボリュームの容量を変更する

上記以外にも、ホストを直接外部ストレージシステムに接続している場合で、ホスト側で再設定が必要となる外部ストレージシステムの設定を変更したときは、Universal Volume Manager でも再マッピングが必要です。

ローカルストレージシステムに接続している一部の Target ポートの WWN/iSCSI 名を変更する場合は、ローカルストレージシステムにマッピングされているボリュームを解除する必要はありません。マッピングを解除せずに外部ストレージシステムの WWN/iSCSI 名を変更する流れを次に示します。

1. 外部ストレージシステムの WWN/iSCSI 名を変更します。
WWN/iSCSI 名の変更方法については、『VSP One Block Administrator ユーザガイド』または『VSP Block Storage REST API リファレンスガイド』を参照してください。WWN/iSCSI 名を変更すると、WWN/iSCSI 名を変更した Target ポートを使用している外部パスが閉塞します。
2. WWN/iSCSI 名を変更した Target ポートとローカルストレージシステムとの間に外部パスを追加します。
3. 手順 1 で閉塞した外部パスを削除します。

マッピングを解除する前には、LU パスまたは NVMe の Namespace への割り当てを解除したり、そのボリュームが TrueCopy などのペアを作成していないか、などを確認したりする必要があります。

関連概念

- [2.2 Universal Volume Manager の操作に関する注意事項](#)

関連タスク

- [4.2 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングする](#)
- [4.14 外部ストレージシステムのボリュームのマッピングを解除する](#)

2.2.7 iSCSI を使用するときの注意事項

iSCSI を使用してシステムを構築するときには、次に示す注意が必要です。

iSCSI に関する説明は、『オープンシステム構築ガイド』を参照してください。

関連概念

- 2.2 Universal Volume Manager の操作に関する注意事項
- (1) 外部パスに関する注意事項 (iSCSI を使用するとき)
- (2) 物理パスに関する注意事項 (iSCSI を使用するとき)
- (3) ポートに関する注意事項 (iSCSI を使用するとき)
- (4) ネットワークの設定に関する注意事項 (iSCSI を使用するとき)

(1) 外部パスに関する注意事項 (iSCSI を使用するとき)

- 外部パスに iSCSI を使用する外部ボリュームは、メインフレームの OS から使用できません (3390-x などのエミュレーションタイプを外部ボリュームに設定できません)。
- 1 つのパスグループには、同一のプロトコルの外部パスだけを追加してください。ファイバチャネルと iSCSI の外部パスが、1 つのパスグループ内に混在しないようにしてください。
- 外部パスに Ethernet 25Gbps チャネルボードのポートを使用する場合、パス閉塞監視時間は 150 秒以上に設定してください。パス閉塞監視時間を 150 秒より短く設定した場合、Ethernet 25Gbps チャネルボードのファームウェア交換によって、外部パスおよび外部ボリュームが閉塞するおそれがあります。
- ホストから外部ボリュームを使用する場合、ホストのコマンドタイムアウト時間は、パス閉塞監視時間よりも長く設定してください。パス閉塞監視時間がホストのコマンドタイムアウト時間よりも長い場合、外部ストレージシステムの電源オフ時や障害時に、ホストからのコマンドがタイムアウトになるおそれがあります。
- iSCSI パスを追加したあとで、iSCSI ターゲットへのログインテストを実行して、ログインできるかを確認してください。ログインできない iSCSI パスがあると、これらに対しても接続しようとするのでストレージシステムやネットワークに負荷がかかり、外部ストレージシステムのボリュームを認識できないおそれがあります。
iSCSI ターゲットへログインできない iSCSI パスは、iSCSI ターゲットの編集や外部ストレージシステムの設定を確認して、ログインできるかを確認してください。または、iSCSI パスを削除してください。

(2) 物理パスに関する注意事項 (iSCSI を使用するとき)

ホストとストレージシステム間の物理パス、およびストレージシステム間の物理パスでは、同一プロトコルを使用することを推奨します。

次の例のように、使用するプロトコルが混在する場合、ホストとストレージシステム間のコマンドのタイムアウト時間には、ストレージシステム間のコマンドのタイムアウト時間以上の値を設定してください。

- ホストとストレージシステム間の物理パス：ファイバチャネル
- ストレージシステム間の物理パス：iSCSI

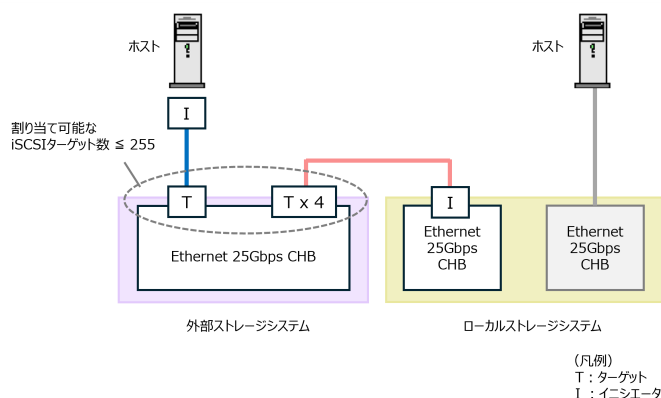
(3) ポートに関する注意事項 (iSCSI を使用するとき)

- iSCSI ポートのパラメータの設定を変更するときは、一時的に iSCSI の接続が切断され、その後再接続されます。システムへ影響がないように、I/O 負荷の低い時間帯にパラメータの設定を変更してください。
- ホストと接続している iSCSI ポートの設定を変更すると、ホストでログが出力されることがありますが、問題ありません。システムログを監視しているシステムでは、アラートが出力されるおそれがあります。アラートが出力された場合は、iSCSI ポートの設定を変更したあと、ホストが再接続されているかどうかを確認してください。

- ・ ストレージシステム間の接続に iSCSI を使用している場合、同一のポートを使用してホストと接続しているときでも、遅延 ACK を無効にしてください。
 ポートの遅延 ACK が有効の場合、ホストから外部ボリュームの認識に時間が掛かることがあります。ボリュームが 2,048 個のときは、約 8 分掛かります。なお、遅延 ACK のデフォルトは有効に設定されています。
- ・ ポートの選択型 ACK は有効（デフォルト）のままにしてください。
- ・ 長距離での接続など、ストレージシステム間の回線で遅延が発生する環境では、ローカルストレージシステムと外部ストレージシステムの両方で、iSCSI ポートのウィンドウサイズを変更できます。iSCSI ポートのウィンドウサイズは、外部パスに使用するポートによって異なります。
 - Ethernet 25Gbps チャンネルボード：64KB～2,048KB（デフォルト 256KB）
- ・ Universal Volume Manager では、外部ストレージシステムの iSCSI ターゲットごとに、外部パスの接続が確立されます。Ethernet 25Gbps チャンネルボードの場合、1 個のポート当たりの外部パス数は最大 64 個です。
- ・ iSCSI ポートはフラグメント処理（パケットの分割処理）をサポートしていません。スイッチの最大送信単位（MTU）の値が、iSCSI ポートの MTU の値より小さい場合、パケットが消失し、正常に通信できないおそれがあります。スイッチの MTU の値は iSCSI ポートの MTU 値以上の値を設定してください。MTU の設定および値に関しては、スイッチのマニュアルを参照してください。
 なお、iSCSI ポートの MTU の値は 1500 以下に設定できません。MTU の値が 1500 未満の WAN 環境では、フラグメント処理によって分割されたデータを送受信できません。この場合、WAN 環境に合わせて WAN ルータの最大セグメントサイズ（MSS）を小さくしてから、iSCSI ポートに接続してください。または、MTU の値が 1500 以上の WAN 環境で使用してください。
- ・ iSCSI Header Digest（iSCSI 通信のヘッダ情報をエラーから保護する機能）と Data Digest（iSCSI 通信のデータ情報をエラーから保護する機能）はデフォルトで有効です。なお、次に示す注意が必要です。
 - Ethernet 25Gbps チャンネルボード：
 - 同一パスグループ内の外部パスは、iSCSI Header Digest と Data Digest のそれぞれで、有効/無効を統一してください。混在すると設定操作が失敗します。
- ・ Universal Volume Manager で、仮想ポートモードを有効にした iSCSI ポートを使用するには、RAID Manager によるコマンド操作が必要です。詳細は「[付録 F. RAID Manager コマンドリファレンス](#)」を参照してください。
 また、仮想ポートモードの有効化も、RAID Manager で設定する必要があります。
 ローカルストレージシステムの iSCSI ポート内に設定した複数の仮想ポートから同一の外部ストレージの iSCSI ポートに対して、外部パスを設定しないでください。
 物理的な iSCSI ポートで障害が発生した場合、対象となる iSCSI ポート内に設定されたすべての仮想ポートも障害の影響を受けるため、冗長パスとして機能しません。
 したがって、外部ストレージ接続するパスおよび冗長パスは、物理的に異なる iSCSI ポート間で使用することを推奨します。
- ・ 1 つのポートを、ホストと接続するポート（Target 属性）と、ストレージシステムと接続するポート（Initiator 属性）の、両方に使用できます。ただし、次に示す観点を重視する場合は、Target 属性と Initiator 属性は、別々のチャンネルボード（CHB）に接続することを推奨します。
 - ホストとストレージシステムのどちらかで障害が発生したときに、システムへの影響範囲を軽減する
 - ターゲットとイニシエータのそれぞれが、CHB の最大データ転送速度で I/O できるようにする

- 日立製ストレージシステムでは、1つのポートに対して、iSCSI ターゲットを 255 まで割り当てることができます。ホストと接続するターゲットと、ストレージシステム間を接続するターゲット（外部ストレージシステムとの接続、およびリモートコピー接続に使用するターゲット）が1つのポートに混在する場合も、255 までです。1つのポートに割り当てられている iSCSI ターゲット数の算出方法を次に示します。

iSCSI ターゲット数 = ホストとの接続数 + ローカルストレージ側が Ethernet 25Gbps チャンネルボードのストレージシステム間を接続するターゲット数 × 4



(4) ネットワークの設定に関する注意事項 (iSCSI を使用するとき)

- iSCSI ポートに接続しているスイッチのポートでは、スパニングツリーの設定を無効にしてください。スイッチでスパニングツリー機能を有効にすると、リンクがアップまたはダウンするときに、ネットワーク上でパケットがループしなくなります。このときに、パケットが約 30 秒間遮断されるおそれがあります。スパニングツリーの設定を有効にする必要がある場合は、スイッチの Port Fast 機能を有効にしてください。
- ストレージシステム間のネットワーク経路で、iSCSI ポートの転送速度よりも転送速度が低い回線を使用した場合、パケットが消失し、回線品質が低下します。iSCSI ポートの転送速度と回線が、同一の転送速度となるシステム環境を構築してください。
- ストレージシステム間の回線の遅延はシステム環境によって異なるため、事前にシステムを検証して、最適な iSCSI ポートのウィンドウサイズの設定を確認してください。回線の遅延の影響が大きいと判断した場合は、WAN 最適化・高速化の装置の適用を検討してください。
- iSCSI を使用する場合、TCP/IP でパケットを送受信します。このため、パケットの量が通信回線の許容量を超えてしまったり、パケットの再送が発生することがあり、性能に大きく影響を与えるおそれがあります。性能を重視する重要なシステムの場合は、ファイバチャネルを使用してください。

2.2.8 ファイバチャネルを使用するときの注意事項

ファイバチャネルを使用してシステムを構築するときには、次に示す注意が必要です。

ファイバチャネルに関する説明は、『オープンシステム構築ガイド』を参照してください。

関連概念

- [2.2 Universal Volume Manager の操作に関する注意事項](#)
- (1) [外部パスに関する注意事項 \(ファイバチャネルを使用するとき\)](#)

(1) 外部パスに関する注意事項 (ファイバチャネルを使用するとき)

- 外部パスにファイバチャネルを使用してポートスピードを自動 (Auto) に指定する場合、パス閉塞監視時間を 10 秒以上に指定してください。パス閉塞監視時間を 9 秒以内に指定する場合は、ポートスピードを自動 (Auto) 以外に指定してください。
- パス閉塞監視時間が短い場合、ネットワーク上の遅延やスピードネゴシエーションの時間の超過によって、パスが閉塞するおそれがあります。

関連概念

- 2.2.8 ファイバチャネルを使用するときの注意事項

2.2.9 外部ボリュームのコマンドを同時に複数実行するときの注意事項

RAID Manager、詳細 API、または VSP One Block Administrator から外部ボリュームの操作を複数同時実行すると操作が失敗または正しい結果が得られない場合があります。そのため、以下のコマンドは、ストレージシステムに対して 1 つずつ操作を実行する運用を推奨します。複数同時実行する運用は非推奨です。

コマンドの種類	RAID Manager コマンド
ポート探索	raidcom discover external_storage
ボリューム探索	raidcom discover lun
iSCSI ターゲットログインテスト	raidcom check external_iscsi_name
iSCSI ターゲット探索	raidcom discover external_iscsi_name



メモ

非推奨の運用例を示します。非推奨の運用をすると、正常に動作しない場合があります。

- 1 人のユーザが、同じストレージシステムに対して、raidcom discover external_storage コマンドを同時に複数実行する。
- 複数のユーザが、同じストレージシステムを操作している環境で、同時にそれぞれのユーザが 1 つまたは複数の raidcom discover external_storage コマンドを同じストレージシステムに対して実行する。

RAID Manager で外部ボリュームのコマンド操作を同時に複数実行して、エラーが発生した場合の対処方法を次の表に示します。

RAID Manager コマンド	コマンドを同時に複数実行したときに発生する現象※	説明
<ul style="list-style-type: none"> raidcom discover external_storage raidcom discover lun 	<ul style="list-style-type: none"> raidcom add path/delete path コマンドがエラー (エラーコード: EX_CMDRJE、(SSB1, SSB2): (2EDA, FECC), (2EDA, FFFF), (2EDB, FFFF), (2EDB, FECC)) で失敗する。 raidcom add external_grp コマンドがエラー (エラーコード: EX_CMDRJE、(SSB1, SSB2): (2EDA, FECC), (2EDB, FECC)) で失敗する。 raidcom delete external_grp コマンドが、エラ 	<p>要因 コマンドを同時に複数実行した。対処 しばらく待ってから、失敗した操作を 1 つずつ実行してください。繰り返し発生する場合は、お問い合わせ先にお問い合わせください。</p>

RAID Manager コマンド	コマンドを同時に複数実行したときに発生する現象※	説明
	<p>ー (エラーコード: EX_CMDRJE、(SSB1, SSB2):(2EDA, FFFF)) で失敗する。</p> <ul style="list-style-type: none"> raidcom discover external_storage コマンドで、外部ストレージシステムが表示されない。 raidcom discover lun コマンドで、外部ストレージシステムの LU が表示されない。 	<p>要因 コマンドを同時に複数実行した。 対処 構成が正しいか確認し、しばらく待ってから、表示不正になった操作を1つずつ実行してください。繰り返し発生する場合は、お問い合わせ先にお問い合わせください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> raidcom check external_iscsi_name raidcom discover external_iscsi_name 	<ul style="list-style-type: none"> raidcom check external_iscsi_name コマンドがエラー (エラーコード: EX_CMDRJE, (SSB1, SSB2)=(2E11, 9B01), (2E14, 9B01), (2EBF, FEEC)) で失敗する。 raidcom discover external_iscsi_name コマンドがエラー (エラーコード: EX_CMDRJE, (SSB1, SSB2)=(2E11, 9B01), (2E114, 9B01), (2EBF, FEEC)) で失敗する。 	<p>要因 コマンドを同時に複数実行した。 対処 しばらく待ってから、再度コマンドを1つずつ実行してください。繰り返し発生する場合は、お問い合わせ先にお問い合わせください。</p>

注※

詳細 API または VSP One Block Administrator から、外部ボリュームのコマンドを同時に複数実行すると、同様の現象が発生する場合があります。

詳細 API で外部ボリュームのコマンド操作を同時に複数実行して、エラーが発生した場合の現象を次の表に示します。詳細 API については、『VSP Block Storage REST API リファレンスガイド』を参照してください。

詳細 API	対応する RAID Manager コマンド	現象
<ul style="list-style-type: none"> GET <ベース URL > /v1/objects/external-storage-ports GET <ベース URL > /v1/objects/storages/<ストレージデバイス ID >/external-storage-ports 	raidcom discover external_storage	HTTP ステータスコードに 503 (Service unavailable) が返却されるか、操作の再実行を促すメッセージが表示されます。
<ul style="list-style-type: none"> GET <ベース URL > /v1/objects/external-storage-luns GET <ベース URL > /v1/objects/storages/<ストレージデバイス ID >/external-storage-luns 	raidcom discover lun	HTTP ステータスコードに 503 (Service unavailable) が返却されるか、操作の再実行を促すメッセージが表示されます。

詳細 API	対応する RAID Manager コマンド	現象
<ul style="list-style-type: none"> POST <ベース URL > /v1/objects/iscsi-ports/<オブジェクト ID >/actions/discover/invoke POST <ベース URL > /v1/objects/iscsi-ports/<オブジェクト ID >/actions/check/invoke PUT <ベース URL > /v1/objects/storages/<ストレージデバイス ID >/iscsi-ports/<オブジェクト ID >/actions/discover/invoke PUT <ベース URL > /v1/objects/storages/<ストレージデバイス ID >/iscsi-ports/<オブジェクト ID >/actions/check/invoke 	<pre>raidcom discover external_iscsi_name raidcom check external_iscsi_name</pre>	HTTP ステータスコードに 503 (Service unavailable) が返却されるか、操作の再実行を促すメッセージが表示されます。
<ul style="list-style-type: none"> POST <ベース URL > /v1/objects/external-path-groups/<オブジェクト ID >/actions/add-path/invoke POST <ベース URL > /v1/objects/external-path-groups/<オブジェクト ID >/actions/remove-path/invoke PUT <ベース URL > /v1/objects/storages/<ストレージデバイス ID >/external-path-groups/<オブジェクト ID >/actions/add-path/invoke PUT <ベース URL > /v1/objects/storages/<ストレージデバイス ID >/external-path-groups/<オブジェクト ID >/actions/remove-path/invoke 	<pre>raidcom add path raidcom delete path</pre>	HTTP ステータスコードに 503 (Service unavailable) が返却されるか、操作の再実行を促すメッセージが表示されます。
<ul style="list-style-type: none"> POST <ベース URL > /v1/objects/external-parity-groups POST <ベース URL > /v1/objects/storages/<ストレージデバイス ID >/external-parity-groups 	<pre>raidcom add external_grp</pre>	HTTP ステータスコードに 503 (Service unavailable) が返却されるか、操作の再実行を促すメッセージが表示されます。
<ul style="list-style-type: none"> DELETE <ベース URL > /v1/objects/external-parity-groups/<オブジェクト ID > DELETE <ベース URL > /v1/objects/storages/<ストレージデバイス ID >/external-parity-groups/<オブジェクト ID > 	<pre>raidcom delete external_grp</pre>	HTTP ステータスコードに 503 (Service unavailable) が返却されるか、操作の再実行を促すメッセージが表示されます。

関連概念

- [2.2 Universal Volume Manager の操作に関する注意事項](#)

2.2.10 外部ストレージシステムからの応答遅延の検知と対処

タイムアウト（レスポンス遅延）の検知

ローカルストレージシステムと接続している外部ストレージシステムの不具合や、ストレージシステム間のスイッチなどの通信経路の不具合の影響によって、ホストのレスポンス遅延が発生する可能性があります。

ローカルストレージシステムから外部ストレージシステムへコマンドを発行した際に、外部ストレージシステムからのレスポンスが、外部バスの I/O タイムアウト値（デフォルトは 15 秒）を超えると、外部バスのタイムアウトが発生します。外部バスが二重化されている構成では、他方の外部バスからコマンドがリトライされ、処理が継続されます。しかし、外部ストレージシステムや通信経路（スイッチなど）の不具合が原因でタイムアウトが発生している場合は、他方の外部バスに切り替わっても、引き続きタイムアウトが発生する可能性があります。このような外部ストレージシステムの不具合や、通信経路の不具合を検知して対策することによって、ホストとストレージシステム間のレスポンス遅延が解消される場合があります。

タイムアウト（レスポンス遅延）の発生通知

- 外部バスのタイムアウトが一定時間内に一定回数以上発生すると、SIM 21d2xx が報告されます。
- システムオプションモード 1282 を設定することによって、外部バスの I/O タイムアウト値に関係なく、外部ストレージシステムからのレスポンスで、15 秒を超えるレスポンス遅延が一定回数以上発生した場合も、SIM 21d2xx が報告されます。

システムオプションモード 1282 は、RAID Manager の `raidcom modify system_opt` コマンドで設定してください。

タイムアウト（レスポンス遅延）発生時の外部バス閉塞

- 通常、外部バスでタイムアウトが発生しても、外部バスは閉塞しません。
- 外部バス閉塞機能は、外部バスの通信障害の予兆を検知し、通信障害が悪化して I/O タイムアウトが頻発する前に、外部バスを閉塞します。この機能は、しきい値（時間）を超える外部ストレージシステムからの応答（応答遅延）が、1 時間あたり 100 回発生すると、外部バスに通信障害が発生している可能性があるとして判断し、外部バスを閉塞します^{*1}。
- しきい値は、外部バスの I/O タイムアウト値に対する割合（25～100%）で指定します（デフォルトは 100%）。
- 外部バス閉塞機能は、応答遅延を検知して対処したい外部ボリュームグループの、すべてのバスに設定してください。本機能を設定しないバスは、応答遅延の監視対象とならないため、そのバスに応答遅延が発生していても検知できません。本機能が設定されていると、応答遅延の判定基準を超えない程度の遅延でも、応答遅延の発生自体は検知できます。各バスの応答遅延状況を確認し、対象バスを閉塞することで応答遅延が改善すると判断した場合に、当該バスを閉塞します。外部ボリュームグループにバスを追加する場合も、追加するバスに本機能を設定してください。
- 次に示す点に注意してください。
 - 外部バス閉塞機能は、I/O タイムアウトとなる応答を抑止する機能ではありません。たとえば、I/O タイムアウト値を 15 秒、割合を 90% に設定した場合、しきい値は 13.5 秒（15 秒

×0.9=13.5 秒) になります。13.5 秒を超える応答遅延が 100 回発生すると外部パスが閉塞します。しかし、応答遅延が 100 回に達する前に、I/O タイムアウトとなる応答が発生する可能性はあります。なお、I/O タイムアウトとなる応答も、応答遅延としてカウントされません。

- I/O タイムアウト値に対する割合は、100%または 100%に近い値を推奨します。割合が小さいと、通信障害が発生していない場合、または通信障害が軽度の場合でも、外部パスを閉塞してしまう可能性があります。
- すべてのパスに外部パス閉塞機能を設定していても、次に示す場合はパスが閉塞されません。
 - 対象外部ボリュームグループで、本機能が有効、かつ正常パスが他に存在しない場合。
 - 対象外部ボリュームグループのすべてのパスで応答遅延が発生している場合。
 - 外部ストレージシステムのプロファイル情報のパスモードが、Single モードに設定されている。
 - 外部ボリュームのパスモードが、Multi モードまたは ALUA モード、かつロードバランスマードが無効に設定されている。
- 外部パス閉塞機能は、RAID Manager の `raidcom modify path` コマンドで設定してください^{※2}。設定方法については、『RAID Manager コマンドリファレンス』を参照してください。

注※1

リンクダウンを伴わない、応答遅延だけが頻発する通信障害時に、外部パスを閉塞する機能です。リンクダウンを伴う通信障害が発生すると、この機能が無効でも外部パスが閉塞します。

注※2

この機能は、オープンシステムだけ設定できます。メインフレームシステム用のエミュレーションタイプを設定した外部パスには機能しません。

SIM 21d2xx が報告された場合の対処

SIM 21d2xx が報告された場合は、外部ストレージシステムや通信経路に不具合が発生している可能性があります。外部ストレージシステムや通信経路を確認してください。また、外部ストレージシステムや通信経路に不具合がない場合でも、次に示すようなシステム設計の問題や使用上の問題によって、SIM 21d2xx が報告される可能性があります。これらを確認し、問題がある場合は対策してください。

- 外部ストレージシステムの各種の設定値
- 外部ストレージシステムの性能を超える負荷
- 通信経路の性能を超える負荷

外部パスの I/O タイムアウトの設定に関する注意事項

ホストからの I/O に使用するボリュームの場合は、外部パスの I/O タイムアウト値を 15 秒以内に設定してください（デフォルトは 15 秒です）。ただし、運用上の都合によって、すでに 15 秒より長い時間が設定されていて、I/O タイムアウト値を変更できない場合は、システムオプションモード 1282 を設定してください。システムオプションモード 1282 を設定せずに I/O タイムアウト値に 15 秒より長い値を設定すると、レスポンス遅延が発生しても（レスポンス遅延の多発によってホストからアクセスできない状態になっても）、SIM 21d2xx が報告されないことがあります。

関連概念

- [4.13 外部ストレージシステムのポートの設定を変更する](#)

関連参照

- [付録 F.1 RAID Manager コマンドとアクションの対応表](#)

Universal Volume Manager で外部ストレージシステムのボリュームとの接続に必要な設定

Universal Volume Manager の設定操作を開始する前に、外部ストレージシステムのボリュームとの接続に必要な情報を決定します。

- 3.1 外部ストレージシステムを接続するポートの設定
- 3.2 マッピングする外部ストレージシステムのボリュームを決定するときの制限事項
- 3.3 マッピング時に設定する外部ボリュームグループ
- 3.4 マッピングに必要なボリュームの属性
- 3.5 外部パスの接続と設定
- 3.6 外部パスの冗長化（冗長パスの追加）
- 3.7 パスグループの設定
- 3.8 メインフレームシステム用ボリュームとの接続
- 3.9 オープンシステム用ボリュームとの接続

3.1 外部ストレージシステムを接続するポートの設定

ローカルストレージシステムと外部ストレージシステム間の接続形態に応じて、ローカルストレージシステムのポートにトポロジとデータ転送速度を設定してください。トポロジとデータ転送速度の設定方法については『オープンシステム構築ガイド』を参照してください。外部ストレージシステム側でも接続形態に応じた設定が必要になる可能性があります。必要に応じて外部ストレージシステム側のサポートを確認してください。

ポートに外部ストレージシステムを接続すると、管理ツールの操作端末から外部ストレージシステムの情報を参照できるようになります。外部ストレージシステムへ接続するポート1つに対して複数台の外部ストレージシステム（日立製品以外のストレージシステムを含む）を混在して接続できます。このとき、外部ストレージシステムへ接続しているポートが稼働中でも外部ストレージシステムを追加できます。

外部ストレージシステムを接続するためのポートは、**Bidirectional** ポートに設定する必要があります。Bidirectional ポート以外のポートには、外部ストレージシステムを接続できません。

関連タスク

- [4.1 ローカルストレージシステムのポート属性を設定する](#)

3.2 マッピングする外部ストレージシステムのボリュームを決定するときの制限事項

ポートに外部ストレージシステムを接続すると、外部ストレージシステムのボリュームをローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングできるようになります。どの外部ストレージシステムのどのボリュームをローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングするかを確認しておいてください。

マッピングするボリュームを決定するときの制限事項を次に示します。

- 外部ストレージシステムのボリュームをローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングしている場合、外部ボリュームグループの最大容量を超える領域に記録されているデータにはアクセスできません。
例えば、外部ストレージシステムの 100GB のボリュームを 70GB の外部ボリュームグループとしてマッピングした場合、外部ストレージシステムのボリュームの 30GB はローカルストレージシステム側から使用できません。
- 外部ストレージシステムのボリュームをローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングする場合、外部ボリュームグループの最小容量を満たさないボリュームはマッピングできません。
例えば、外部ストレージシステムの 10GB のボリュームを、最小容量が 30GB 必要な外部ボリュームグループとしてマッピングできません。

関連タスク

- [4.2 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングする](#)

3.3 マッピング時に設定する外部ボリュームグループ

外部ストレージシステムのボリュームをローカルストレージシステムのボリュームとして使用するには、外部ストレージシステムのボリュームを外部ボリュームグループにマッピングする必要があります。この外部ボリュームグループに作成した LDEV が、外部ボリュームになります。1 つの外部ボリュームグループの中に、複数の LDEV を作成できます。

外部ボリュームグループには、番号を付ける必要があります。

関連概念

- [2.1.3 Universal Volume Manager の要件](#)

関連タスク

- [4.2 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングする](#)

3.4 マッピングに必要なボリュームの属性

外部ストレージシステムのボリュームをローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングするときに、ボリュームの属性を設定します。ボリュームの属性は、マッピング時に設定できません。

設定する属性を次に説明します。

エミュレーションタイプ

外部ストレージシステムのボリュームがマッピングされている外部ボリュームグループのエミュレーションタイプを選択して設定できます。

また、外部ストレージシステムのボリューム内のデータをローカルストレージシステムから読み出すためには、エミュレーションタイプを **OPEN-V** に設定する必要があります。例えば、外部ストレージシステムのボリューム内の既存のデータをローカルストレージシステム内のボリュームに移動したい場合は、マッピング時にエミュレーションタイプを **OPEN-V** に設定する必要があります。

OPEN-V 以外のエミュレーションタイプを設定した場合、データの管理情報を格納するための領域が必要になります。そのためマッピング後に使用できる容量は、管理情報を格納する領域の容量の分、外部ストレージシステムのボリュームの実際の容量より少なくなります。

キャッシュモード (有効 または 無効)

ホストからの書き込みデータを、外部ストレージシステムに同期で反映させるか (無効)、非同期で反映させるか (有効) を設定します。ここで設定する有効/無効に関係なく、ローカルストレージシステムへの全 I/O は、常にキャッシュを使用します。また、書き込み処理は 2 つあるキャッシュに常にバックアップされます。

- キャッシュモードを有効に設定すると、ローカルストレージシステムは、ホストからの書き込みデータをすべてローカルストレージシステム自体のキャッシュに受け取った時点で、ホストに処理の終了を報告します。その後書き込みデータは、外部ストレージシステムに非同期で反映されます。
- キャッシュモードを無効に設定すると、ローカルストレージシステムは、ホストからの書き込みデータをすべて外部ストレージシステムに反映させてから、ホストに処理の終了を報告します。

キャッシュモードの設定について、次の点に注意してください。

- ホストから直接書き込まれたデータ以外（ShadowImage などによって書き込まれたデータ）は、キャッシュモードの設定に関係なく非同期で反映されます（有効に設定したときと同じ動作です）。
- エミュレーションタイプがメインフレームボリューム（3390-x など）に設定されている場合、ホストからの **Format Write** コマンドなどによる書き込みデータは、キャッシュモードの設定に関係なく非同期に反映されます。**Update Write** コマンドなどによる書き込みデータは、キャッシュモードの設定どおりに反映されます。
- キャッシュモードを有効に設定する場合は、システムへの負荷を考慮して設定してください。通常、キャッシュモードを有効に設定すると、ローカルストレージシステム自体のキャッシュを使用してホストからの書き込みデータを非同期で外部ストレージシステムに反映するので、ホストからの書き込みに対するレスポンスが速くなったり、ホストからの書き込み処理の性能が向上したりします。
ただし、キャッシュの使用率が 60% を超えるような、システムへの負荷が高い環境では、負荷を下げるためにローカルストレージシステムがホストからの書き込みを抑止します。
このため、キャッシュモードを有効に設定しても、キャッシュモードを無効に設定したときと比べて、ホストからの書き込みに対するレスポンスが遅くなったり、ホストからの書き込み処理の性能が低下したりするおそれがあります。
- **Dynamic Provisioning** 用のプールにプールボリュームとして登録されている **LDEV** があり、かつ、そのプールからデータ削減共有ボリュームが作成されている場合、ホストからその仮想ボリュームへ直接書き込まれたデータは、キャッシュモードの設定に関係なく、非同期で反映されます。

キャッシュ流入制御（有効または無効）

外部ストレージシステムのボリュームへの書き込みができなくなった場合に、キャッシュメモリへの書き込みを制限するか（有効）、書き込みを続けるか（無効）を設定します。デフォルトでは、無効（書き込みを続ける）が設定されています。

- キャッシュ流入制御を有効に設定すると、外部ストレージシステムのボリュームへの書き込みができなくなった場合、キャッシュメモリへの書き込みを制限します。キャッシュメモリへの書き込みを制限することで、キャッシュメモリにデステージできないデータがたまることを防ぎます。
- キャッシュ流入制御を無効に設定すると、外部ストレージシステムのボリュームへの書き込みができなくなったあとでも、リトライ中に発生した外部ボリュームへの I/O はキャッシュメモリに書き込まれます。外部ボリュームへの書き込みができるようになると、キャッシュメモリの内容が外部ストレージシステムのボリュームに書き込まれます（デステージされます）。

ALUA モードの使用（有効または無効）

ローカルストレージシステム側でパスモードに ALUA を使用するかどうかを設定します。デフォルトでは、外部ストレージシステムのプロファイル情報で ALUA をサポートしている場合は有効、ALUA をサポートしていない場合は無効が設定されています。ただし、外部ストレージシステムの装置名称が **(generic)** と表示されるストレージシステムの場合は、デフォルトが選択したボリュームによって異なります。



注意

外部ストレージシステムの装置名称が **(generic)** と表示されるストレージシステムの場合、**Universal Volume Manager** で ALUA モードの使用をサポートしていない外部ストレージシステムであっても ALUA モードのデフォルト値が有効になる可能性があります。その場合、ALUA モードを無効に変更してください。各外部ストレージシステムの ALUA モードのサポート状況についてはお問い合わせください。

ロードバランスモード（標準ラウンドロビン、拡張ラウンドロビン、または無効）

外部ストレージシステムへの I/O の負荷分散方式（ロードバランスモード）を設定します。デフォルトでは、標準ラウンドロビン（推奨値）が設定されています。ただし、外部ストレージシステムの装置名称が(generic)と表示されるストレージシステムの場合は、デフォルトが選択したボリュームによって異なります。選択したボリュームの ALUA 設定が可能な場合は標準ラウンドロビン、不可能な場合は無効が設定されます。

- ロードバランスモードを標準ラウンドロビンに設定すると、外部ストレージシステムに対して、I/O が可能な複数のパスに I/O を振り分けます。連続性がない I/O を多く発行する（シーケンシャルな I/O が少ない）場合に有効です。
- ロードバランスモードを拡張ラウンドロビンに設定すると、外部ストレージシステムに対して、I/O が可能な複数のパスに I/O を振り分けます。ただし、シーケンシャル I/O の場合は、外部ボリュームを一定の間隔で区切ったときに、同じ区間への I/O には同じパスを使用することで、I/O を振り分ける頻度を少なくします。1 つ前の I/O と連続性のある I/O の場合、外部ストレージシステムのキャッシュ機能によって読み込み速度の向上が期待できません。連続性がある I/O を多く発行する（シーケンシャルな I/O が多い）場合に有効です。
- ロードバランスモードを無効にすると、Single モードと同じく、外部ストレージシステムに対して、I/O が可能なパスのうち優先順位が最も高いパスだけを使用して I/O を実行します。ロードバランスモードを無効にすると負荷分散が実施されません。このため、ロードバランスモードを無効にしないことを推奨します。



注意

外部ストレージシステムの種別やシステム構成によって拡張ラウンドロビンを設定しても性能が向上しない場合があります。その場合はデフォルトである標準ラウンドロビンを設定してください。

CLPR

Virtual Partition Manager を使ってキャッシュメモリを分割している場合に、マッピングしたボリュームにアクセスするときに使用する CLPR を設定します。CLPR の詳細については、『Virtual Partition Manager ユーザガイド』を参照してください。

関連タスク

- [4.2 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングする](#)
- [4.9 外部ボリュームグループのキャッシュモードを変更する](#)
- [4.10 外部ボリュームへのキャッシュ書き込みを制御する](#)

3.5 外部パスの接続と設定

ケーブルを使用して、外部ストレージシステムとローカルストレージシステム間を複数の経路で接続しておきます。このとき、ローカルストレージシステムの異なるクラスタのポートから外部ストレージシステムに接続してください。



メモ

ポートの動作モードを NVMe モードに設定したポートは、外部パスに使用できません。

関連概念

- [3.5.1 外部ボリュームのパスモードの種類](#)

関連タスク

- [4.3.2 既存のパスグループに外部パスを追加する](#)
- [4.3.3 外部パスの優先順位を変更する](#)
- [4.3.5 外部パスを削除する](#)

3.5.1 外部ボリュームのパスモードの種類

外部ボリュームのパスモードには、Single モード、Multi モード、および ALUA モードがあります。パスモードがどのモードになるかは、接続する外部ストレージシステムによって決まっています。各外部ストレージシステムのパスモードについては、「[2.1.1 外部ストレージシステムとして接続できるストレージシステムの種類](#)」を参照してください。

パスモードの設定を変更できるのは、ALUA モードだけです。

- Single モードの場合は、優先順位が最も高いパス（プライマリパス）だけが使用され、外部ボリュームへの I/O が実行されます。プライマリパスに障害が起きた場合に、次に優先順位が高いパスを使用します。
- Multi モードの場合は、定義されているすべてのパスが使用されます。複数のパスを使用して負荷を分散しながら外部ボリュームへの I/O が実行されます（ラウンドロビン制御）。
- ALUA モードの場合は、定義されているすべてのパスが使用されます。複数のパスを使用して負荷を分散しながら外部ボリュームへの I/O が実行されます（ラウンドロビン制御）。ただし、Passive 状態のポートに接続されている外部パスは使用しません。



注意

外部ストレージシステムの装置名称が(generic)と表示されるストレージシステムの場合、Universal Volume Manager で ALUA モードの使用をサポートしていない外部ストレージシステムであっても ALUA モードのデフォルト値が有効になる可能性があります。その場合、ALUA モードを無効に変更してください。各外部ストレージシステムの ALUA モードのサポート状況についてはお問い合わせください。

例えば、パスモードが Single モードの外部ストレージシステムのボリュームをマッピングすると、マッピング時に設定されたプライマリパスを使用して I/O を実行します。ストレージシステムの保守作業のときや、チャンネルプロセッサに障害が発生したときなど、マッピング時に設定されたプライマリパスが使用できなくなった場合、パスは自動的に冗長パスに切り替えられます。パスが冗長パスに切り替えられることで、I/O を続行できます。

プライマリパスが使用できない状態が 3 分間継続すると、パスは冗長パスに切り替えられます。

パスモードが Multi モードまたは ALUA モードの場合は、外部ストレージシステムへの I/O の負荷分散方式（ロードバランスモード）を選択できます。

- 標準ラウンドロビン方式
複数のパスの I/O を制御する標準的な方式です。外部ストレージシステムに対して、I/O が可能な複数のパスに I/O を振り分けます。拡張ラウンドロビンを適用して I/O 性能が低下する場合は、この方式を適用してください。
- 拡張ラウンドロビン方式
複数のパスの I/O を制御する拡張方式です。外部ストレージシステムに対して、I/O が可能な複数のパスに I/O を振り分けます。ただし、シーケンシャル I/O の場合は、外部ボリュームを一定の間隔で区切ったときに、同じ区間への I/O には同じパスを使用することで、I/O を振り分ける頻度を少なくします。

ロードバランスモードを無効にした場合は、Single モードと同じく、外部ストレージシステムに対して、I/O が可能なパスのうち優先順位が最も高いパスだけを使用して I/O を実行します。

関連概念

- [3.5 外部パスの接続と設定](#)

関連タスク

- [4.11 外部ボリュームグループのパスモードを変更する](#)
- [4.12 外部ストレージシステムへの I/O の負荷分散方式を変更する](#)

3.6 外部パスの冗長化（冗長パスの追加）

冗長化した外部パスの集まりの中で、優先度が最も高い外部パスをプライマリパスと呼び、プライマリパス以外の外部パスを冗長パスと呼びます。

マッピングしたボリュームの使用を開始するには、外部ボリュームグループから外部ストレージシステムへの外部パスを設定する必要があります。

外部パスの冗長化（冗長パスの追加）は、外部パスの設定と同時にできます。また、ボリュームのマッピングが完了したあとに、冗長パスを追加することもできます。

関連概念

- [3.6.1 冗長パスの設定例](#)
- [3.6.2 冗長パスへの I/O 実行パス切り替えの例（パスモードが Single モードの場合）](#)
- [3.6.3 冗長パスへの I/O 実行パス切り替えの例（パスモードが Multi モードの場合）](#)

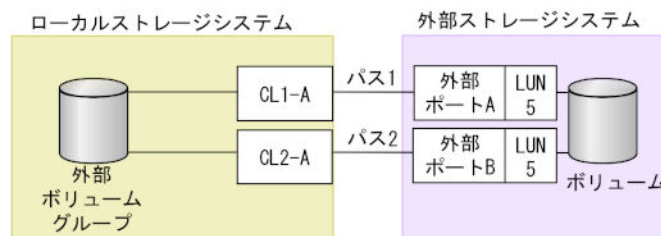
関連タスク

- [4.3.2 既存のパスグループに外部パスを追加する](#)
- [4.3.3 外部パスの優先順位を変更する](#)
- [4.3.5 外部パスを削除する](#)

3.6.1 冗長パスの設定例

冗長パスの設定例（スイッチなし）

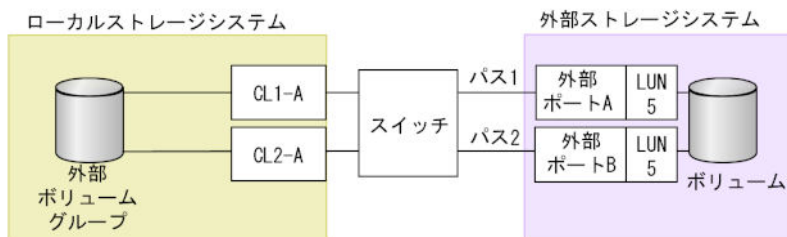
冗長パスの設定例を図に示します。この例では、ローカルストレージシステムで外部ストレージシステムへ接続するポートに設定されている「CL1-A」と「CL2-A」に、それぞれ「外部ポート A」と「外部ポート B」という外部ストレージシステムのポートを接続しています。またこの図で「CL1」のポートと「CL2」のポートを指定しているように、冗長パスにはローカルストレージシステムの異なるクラスタのポートを指定する必要があります。



冗長パスの設定例（スイッチあり）

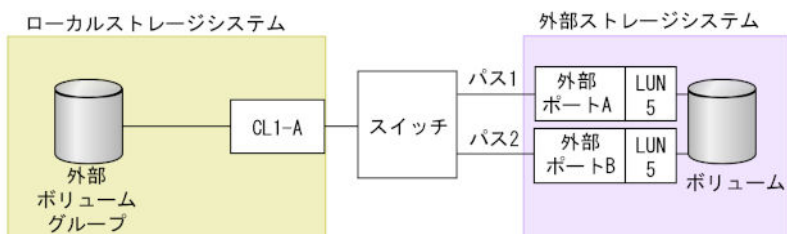
スイッチを使う場合の冗長パスの設定例を図に示します。この例では、ローカルストレージシステムで2つのポートを指定し、スイッチを経由して、外部ストレージシステムのポートに接続してい

ます。この場合、ローカルストレージシステムで2個の異なるクラスタのポートを指定しているため、冗長パスの設定は有効になります。



冗長パスの設定として無効な例

次の例でも、外部ボリュームグループと外部ストレージシステムのボリュームの間に2個のパスが設定されています。しかし、ローカルストレージシステムで指定されているポートは1個で、スイッチを経由して、外部ストレージシステムで2個のポートを指定しています。Universal Volume Managerの冗長パスの設定では、ローカルストレージシステムで2個の異なるクラスタのポートを設定する必要があるため、この例の設定は推奨できません。



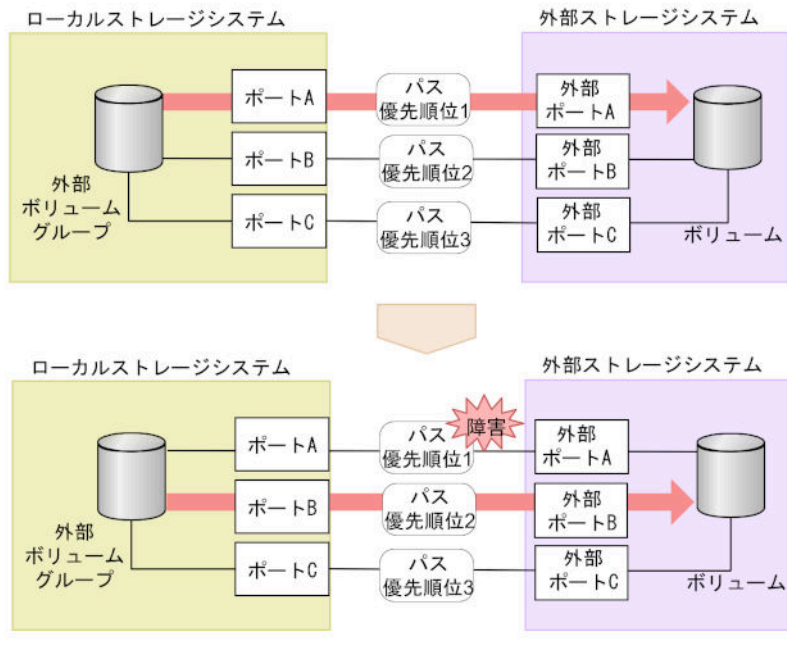
関連概念

- ・ 3.6 外部パスの冗長化 (冗長パスの追加)

3.6.2 冗長パスへの I/O 実行パス切り替えの例 (パスモードが Single モードの場合)

次の図は、パスモードが Single の場合の例を示しています。I/O を実行しているパスに障害が発生すると、次に優先順位の高いパスを使用して I/O が実行されます。

I/O を実行しているパスより優先順位の高いパスを回復すると、I/O を実行するパスは、回復したパスに自動的に切り替えられます。



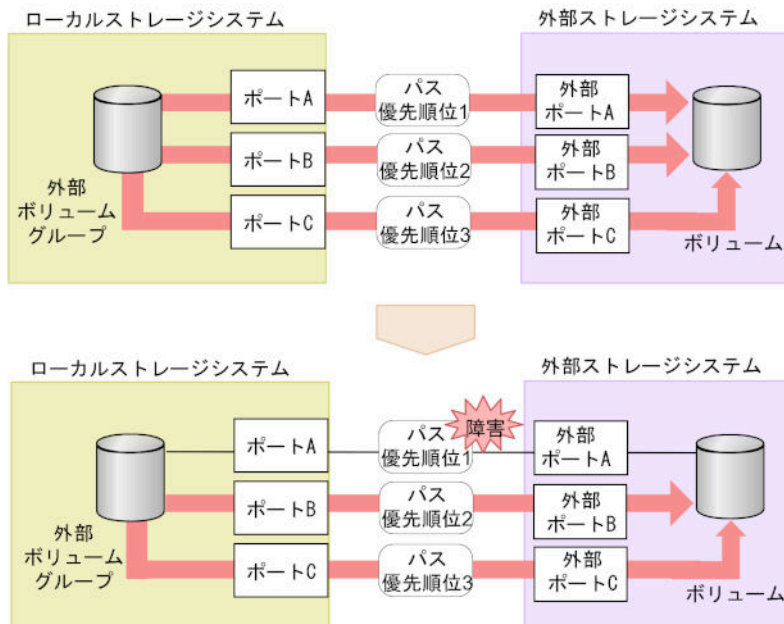
関連概念

- [3.6 外部バスの冗長化 \(冗長バスの追加\)](#)

3.6.3 冗長バスへの I/O 実行パス切り替えの例 (バスモードが Multi モードの場合)

次の図は、バスモードが Multi の場合の例を示しています。1 個のバスに障害が発生すると、障害が発生したバス以外のバスを使用して I/O が実行されます。

障害が発生したバスを回復すると、回復したバスの使用を自動的に再開します。



関連概念

- [3.6 外部バスの冗長化 \(冗長バスの追加\)](#)

3.7 パスグループの設定

経路に含まれるケーブルやスイッチの障害、またはチャンネルプロセッサの障害などに備えて、外部パスの冗長化を推奨します。冗長化によって、外部ストレージシステムの保守時などにも外部ボリュームの使用を継続できます。外部パスは、8本まで冗長化できます。

冗長化した外部パスの集まりを複数の外部ボリュームグループが使用する場合、この外部ボリュームグループをグループ化できます。このグループをパスグループと呼びます。

パスグループは、外部ストレージシステムのボリュームをマッピングするときに自動的に設定されます。パスグループだけを新規に追加できません。

関連タスク

- [4.3.2 既存のパスグループに外部パスを追加する](#)
- [4.3.3 外部パスの優先順位を変更する](#)
- [4.3.5 外部パスを削除する](#)

3.8 メインフレームシステム用ボリュームとの接続

外部ストレージシステムにすでにある、メインフレームシステム用ボリュームは、外部ボリュームとしてローカルストレージシステムに直接接続できません。

外部ストレージシステムのボリュームをメインフレームシステム用ボリュームとして使用するには、次のどちらかの方法があります。

- 外部ストレージシステム側でボリュームをゼロフォーマットし、ローカルストレージシステム側で **Universal Volume Manager** を使ってボリュームをマッピングしたあとに、ローカルストレージシステム側で **VLL** 機能を使用して **Write to Control Blocks** の操作を実行する。
- ローカルストレージシステム側で **Universal Volume Manager** を使って外部ストレージシステムのボリュームをマッピングしたあとに、ローカルストレージシステム側で **VLL** 機能を使用して、マッピングした外部ボリュームをフォーマットする。

マッピング時にボリュームにメインフレームシステム系のエミュレーションタイプを設定した場合、マッピング後にボリュームは閉塞状態になります。ローカルストレージシステム側で **VLL** 機能を使用して **Write to Control Blocks** の操作またはフォーマットを実行することで、メインフレームのホストはローカルストレージシステムの **FICON** チャンネルを使用して、新しいメインフレームシステム用ボリュームにアクセスできるようになります。



注意

外部パスに iSCSI を使用する外部ボリュームは、メインフレームの OS から使用できません (3390-x などのエミュレーションタイプを外部ボリュームに設定できません)。マッピング済みの外部ストレージシステムのボリュームを外部ストレージシステム側でフォーマットした場合、フォーマットする前のデータは保証できません。メインフレームのオペレーティングシステム (OS) で使用する場合には、マッピング済みのボリュームはローカルストレージシステム側でフォーマットしてください。

ボリュームのフォーマットおよび **Write to Control Blocks** の操作手順については、『メインフレームシステム構築ガイド』を参照してください。

関連参照

- ・ [付録 B.1 メインフレームシステムにおける外部ストレージシステムのボリュームに必要な容量の考え方](#)

3.9 オープンシステム用ボリュームとの接続

オープンシステム用ボリュームは、フォーマットをしなくてもローカルストレージシステムでオープンシステム用のボリュームであると認識されます。なお、ボリュームのデータ領域初期化が必要な場合は、VLL 機能を使用してボリュームをフォーマットしてください。ボリュームをフォーマットする手順については、『オープンシステム構築ガイド』を参照してください。

Universal Volume Manager の操作

Universal Volume Manager を使用すると、外部ストレージシステムのボリュームをローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングするなど、外部ボリュームを使用するために必要な設定操作を実行できます。

この章では、RAID Manager による、Universal Volume Manager を使った外部ボリュームの設定操作の流れ、前提条件、および注意事項を説明します。RAID Manager の詳細な操作方法については、『RAID Manager コマンドリファレンス』を参照してください。

- 4.1 ローカルストレージシステムのポート属性を設定する
- 4.2 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングする
- 4.3 外部パスの設定と変更
- 4.4 外部ボリュームの詳細情報を確認する
- 4.5 外部ストレージシステムのボリュームへの接続を切断する
- 4.6 外部ストレージシステムのボリュームに再接続する
- 4.7 外部ストレージシステムのボリュームへの外部パスの接続を切断する
- 4.8 外部ストレージシステムのボリュームへの外部パスを再接続する
- 4.9 外部ボリュームグループのキャッシュモードを変更する
- 4.10 外部ボリュームへのキャッシュ書き込みを制御する
- 4.11 外部ボリュームグループのパスモードを変更する
- 4.12 外部ストレージシステムへの I/O の負荷分散方式を変更する
- 4.13 外部ストレージシステムのポートの設定を変更する
- 4.14 外部ストレージシステムのボリュームのマッピングを解除する
- 4.15 外部ボリュームグループに割り当てられた MP ユニットを変更する

□ 4.16 ストレージシステムの電源操作

4.1 ローカルストレージシステムのポート属性を設定する

外部ストレージシステムを接続するローカルストレージシステムのポートの属性は、Bidirectionalポートに設定する必要があります。外部ストレージシステムのポートを設定する手順については、ご使用の外部ストレージシステムのマニュアルを参照してください。

操作で使用するコマンド

- ローカルストレージシステムのポート属性の設定 (raidcom modify port コマンド)

4.2 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングする

外部ストレージシステムのボリュームをローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングします。

操作で使用するコマンド

- 外部ストレージシステムのポート一覧の取得 (raidcom discover external_storage コマンド)
- 外部ストレージシステム側のポートの LU 一覧の取得 (raidcom discover lun コマンド)
- 外部パスグループ情報の取得 (raidcom get path コマンド)
- 外部ストレージシステムのボリュームのマッピング (raidcom add external_grp コマンド)
- ボリュームの作成 (raidcom add ldev コマンド)

次のコマンドは、iSCSI 接続の場合だけ使用します。

- 外部ストレージシステム側ポートの iSCSI ターゲット情報の取得 (raidcom discover external_iscsi_name コマンド)
- 外部ストレージシステム側ポートの iSCSI 名の登録 (raidcom add external_iscsi_name コマンド)
- 外部ストレージシステムの iSCSI 名の取得 (raidcom get external_iscsi_name コマンド)
- 外部ストレージシステムの iSCSI ターゲットへのログインテスト (raidcom check external_iscsi_name コマンド)

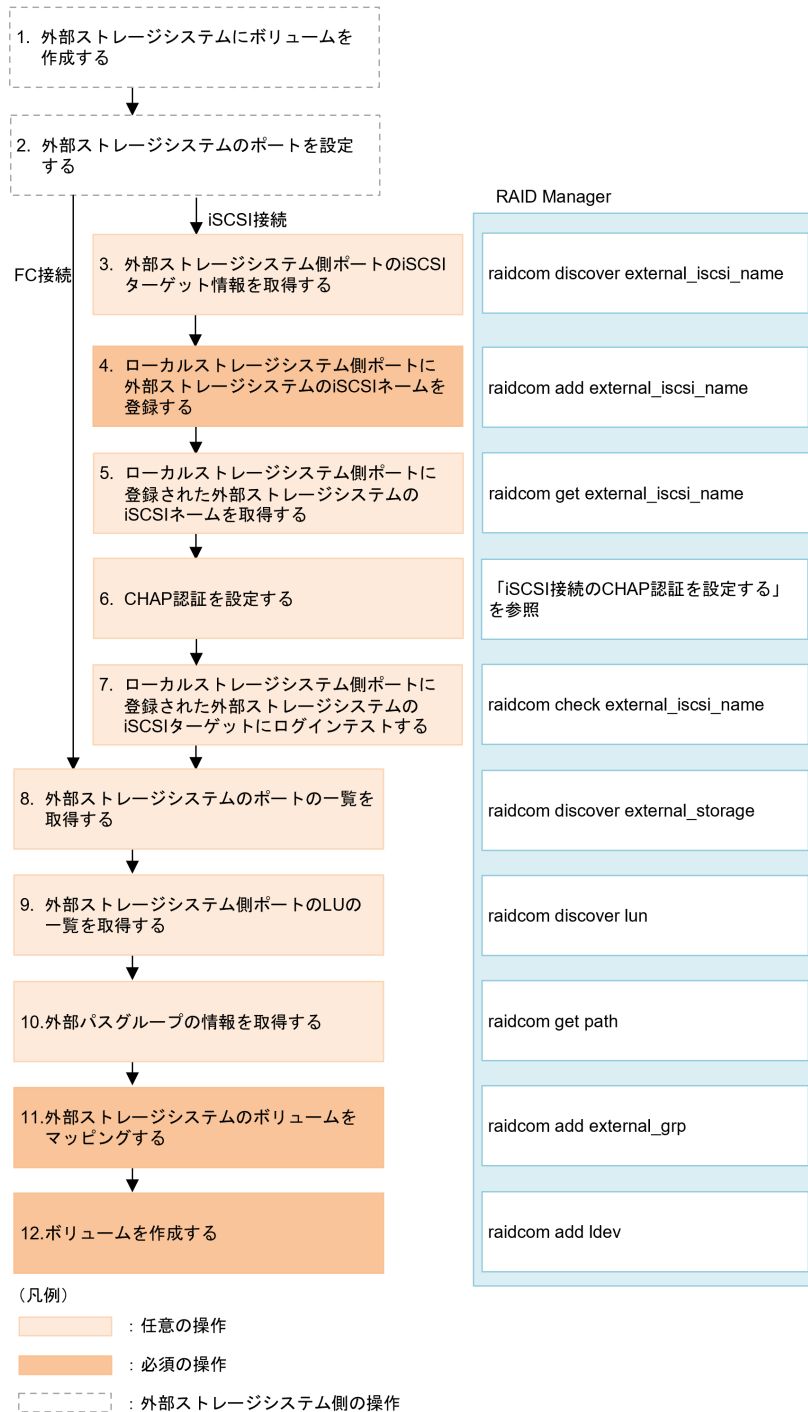


注意

raidcom check external_iscsi_name コマンドを実行するには、コマンドを実行するホストが IPv6 をサポートしている必要があります。ホストが IPv6 をサポートしていない場合は、EX_ENOSUP で拒否されます。

操作の流れ

ローカルストレージシステムのポートに接続した外部ストレージシステムのボリュームをマッピングして、外部ボリュームを作成します。操作の流れを次に示します。



- 外部ストレージシステムにボリュームを作成する
外部ストレージシステムにボリュームを作成します。操作方法は、ご使用の外部ストレージシステムのマニュアルを参照してください。
- 外部ストレージシステムのポートを設定する
外部ストレージシステムのポートとシステムオプションを設定します。操作方法は、ご使用の外部ストレージシステムのマニュアルを参照してください。
- 外部ストレージシステム側ポートの iSCSI ターゲット情報を取得する (iSCSI 接続の場合)
外部ストレージシステムと iSCSI 接続している場合に、外部ストレージシステム側ポートの iSCSI ターゲットを探索し、情報を取得します。

4. ローカルストレージシステム側ポートに外部ストレージシステム側ポートの iSCSI 名を登録する (iSCSI 接続の場合)
外部ストレージシステムと iSCSI 接続している場合に、取得した外部ストレージシステム側ポートの iSCSI 名を、ローカルストレージシステム側ポートに登録します。
5. ローカルストレージシステム側ポートに登録された外部ストレージシステムの iSCSI 名を取得する (iSCSI 接続の場合)
外部ストレージシステムと iSCSI 接続している場合に、ローカルストレージシステム側ポートに登録されている外部ストレージシステム側ポートの iSCSI 名を取得します。
6. CHAP 認証を設定する (iSCSI 接続の場合)
詳細は、「[4.3.4 iSCSI 接続の CHAP 認証を設定する](#)」を参照してください。
7. ローカルストレージシステム側ポートに登録された外部ストレージシステムの iSCSI ターゲットにログインテストする (iSCSI 接続の場合)
外部ストレージシステムと iSCSI 接続している場合に、取得した iSCSI 名で外部ストレージシステムの iSCSI ターゲットにログインできるかどうかをテストします。
8. 外部ストレージシステムのポートの一覧を取得する
接続した外部ストレージシステムのポートの情報を取得します。取得した情報は、ボリュームをマッピングする際に使用します。
9. 外部ストレージシステム側ポートの LU の一覧を取得する
接続した外部ストレージシステムのポートに定義された LU の情報を取得します。取得した情報は、ボリュームをマッピングする際に使用します。
10. 外部パスグループの情報を取得する
既存の外部パスグループを利用してマッピングするときは、外部パスグループの情報を取得してパスグループ ID を確認します。
11. 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングする
外部ボリュームグループを作成して、マッピングしたい外部ストレージシステムのボリュームの情報を登録します。既存のパスグループを利用しない場合、マッピングと同時にパスグループが作成されます。
12. ボリュームを作成する
ローカルストレージシステムに作成した外部ボリュームグループにボリュームを作成します。

注意事項

- 各外部ボリュームグループに作成できる各 LDEV の最大容量は 4TB です。データ移行などの目的で、外部ストレージシステムの 4TB 以上のボリュームをローカルストレージシステムの 1 つのボリュームにマッピングする必要がある場合、データダイレクトマップを使用します。データダイレクトマップについては、『オープンシステム構築ガイド』を参照してください。
- ファイバチャネル接続の場合、マッピングに使用する通信経路に制限があります。制限に該当する経路を使用してマッピングした場合、通信の切断が発生する可能性があります。詳細は「[2.2.4 外部パスに関する注意事項](#)」を参照してください。
- パスグループだけを作成することはできません。必ず同時に外部ボリュームグループを作成する必要があります。
- 外部ボリュームグループ番号に設定できる値については、「[F.2 RAID Manager のオプションのパラメータの設定範囲](#)」で確認してください。ただし、設定範囲内の値を指定していても、外部ボリュームグループの最大数までしか作成できません。

関連概念

- [2.2.1 マッピング時の注意事項](#)

- [2.2.3 外部ボリュームの属性に関する注意事項](#)
- [2.2.6 外部ストレージシステムの保守に関する注意事項（再マッピング）](#)
- [3.2 マッピングする外部ストレージシステムのボリュームを決定するときの制限事項](#)
- [3.3 マッピング時に設定する外部ボリュームグループ](#)
- [3.4 マッピングに必要なボリュームの属性](#)
- [4.2.1 接続する外部ストレージシステムのポートに管理 LU が設定されている場合の注意事項](#)
- [付録 E.2 リモートコマンドデバイスとしてマッピングできるコマンドデバイス](#)
- [付録 E.3 リモートコマンドデバイスの注意事項](#)

関連タスク

- [付録 C.1 Universal Volume Manager と Volume Migration の外部ボリューム運用の流れ](#)
- [付録 C.2 Universal Volume Manager と TrueCopy の外部ボリューム運用の流れ](#)
- [付録 C.3 Universal Volume Manager と Universal Replicator の外部ボリューム運用の流れ](#)
- [付録 C.4 Universal Volume Manager と ShadowImage の外部ボリューム運用の流れ](#)

4.2.1 接続する外部ストレージシステムのポートに管理 LU が設定されている場合の注意事項

ローカルストレージシステムと接続する外部ストレージシステムのポートに管理 LU（例：Universal Xport LU）が設定されている場合、特定の操作が必要です。管理 LU とは、特定のアプリケーションが発行するコマンドを受け取り、アプリケーションを制御および管理するための LU のことです。管理 LU は特定のアプリケーションからの制御情報を格納するため、外部ボリュームとしては使用できません。コマンドデバイスは管理 LU ではありません。

ポート探索およびボリューム探索を実行する前には、外部ストレージシステムで次のどれかの操作をしてください。

次の操作をしなかった場合、ポート探索時およびボリューム探索時に、管理 LU を持つ外部ストレージシステムを認識できないおそれがあります。

- ローカルストレージシステムと接続するポートから、管理 LU を削除する。
- ローカルストレージシステムと接続するポートに、管理 LU の LUN よりも小さい LUN を持つデータ格納用 LU を最低 1 つ設定する。
- セキュリティ機能を使用して、管理 LU のアクセス属性を読み書き禁止に設定する。

関連タスク

- [4.2 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングする](#)

4.3 外部パスの設定と変更

外部パスの設定と変更について説明します。

関連概念

- [4.3.1 外部パスを設定するときの注意事項](#)
- [4.3.7 外部パスの変更](#)

関連タスク

- 4.3.2 既存のパスグループに外部パスを追加する
- 4.3.3 外部パスの優先順位を変更する
- 4.3.4 iSCSI 接続の CHAP 認証を設定する
- 4.3.5 外部パスを削除する
- 4.3.6 iSCSI ターゲットの iSCSI 名を削除する
- 4.3.8 既存のすべての外部パスを入れ替える場合の設定の流れ

4.3.1 外部パスを設定するときの注意事項

外部パスを設定するときの注意事項を次に示します。

- 既存の外部パスをすべて削除して新しく追加した外部パスと入れ替えることは、1回の操作ではできません。外部パスの入れ替え時には2回以上の操作に分け、1回目の設定時に既存の外部パスの設定を少なくとも1個は残すようにしてください。
- 外部パスがあるチャンネルボードを減設する際には、減設前にあらかじめその外部パスをすべて削除しておく必要があります。その外部パスを削除せずにチャンネルボードを減設した場合、チャンネルボードの減設に失敗します。

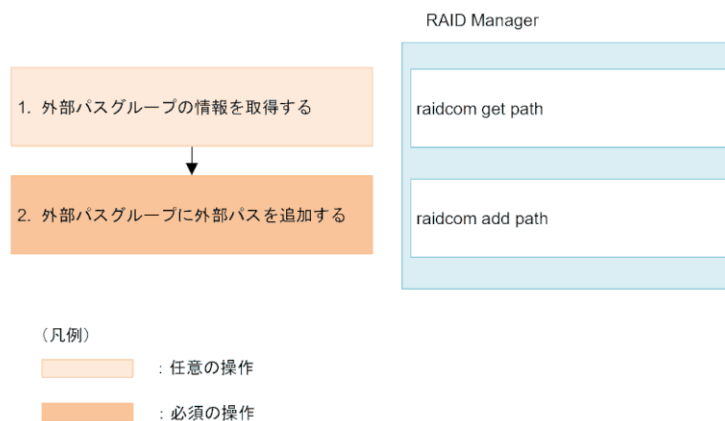
4.3.2 既存のパスグループに外部パスを追加する

操作で使用するコマンド

- 外部パスグループの情報の取得 (raidcom get path コマンド)
- 外部パスの追加 (raidcom add path コマンド)

操作の流れ

ローカルストレージシステムと外部ストレージシステム間の外部パスを複数設定することで、外部ストレージシステムのボリュームへのアクセス経路を冗長化できます。複数の外部パスを設定するには、パスグループにパスを追加します。パスグループは、ボリュームをマッピングするときに自動的に作成されます。操作の流れを次に示します。



1. 外部パスグループの情報を取得する
操作対象の外部パスグループの情報を取得して、パスグループ ID を確認します。
2. 外部パスグループに外部パスを追加する

外部パスグループを指定して外部パスを追加します。

注意事項

- ファイバチャネル接続の場合、外部パスとして使用する通信経路に制限があります。制限に該当する経路を外部パスとして使用した場合、通信の切断が発生する可能性があります。詳細は「[2.2.4 外部パスに関する注意事項](#)」を参照してください。
- パスを追加した順番に従って、パスの優先順位が決まります。パスの優先度の変更方法については「[4.3.3 外部パスの優先順位を変更する](#)」を参照してください。

関連概念

- [3.5 外部パスの接続と設定](#)
- [3.6 外部パスの冗長化（冗長パスの追加）](#)
- [3.7 パスグループの設定](#)
- [4.3.7 外部パスの変更](#)

関連タスク

- [4.3.8 既存のすべての外部パスを入れ替える場合の設定の流れ](#)

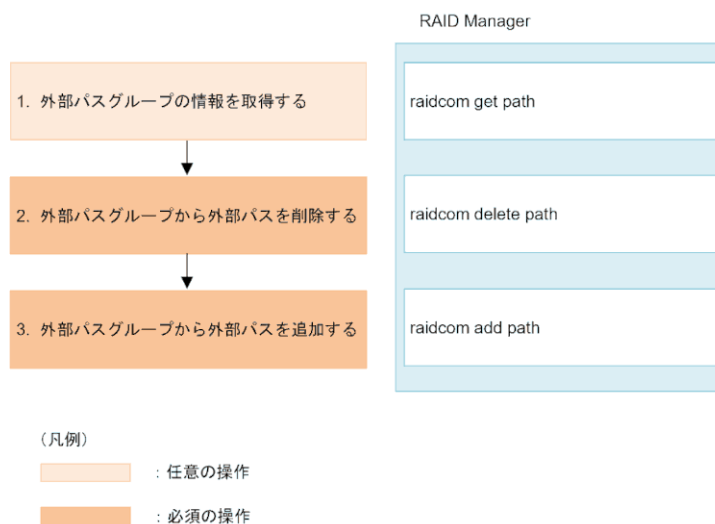
4.3.3 外部パスの優先順位を変更する

操作で使用するコマンド

- 外部パスグループ情報の取得 (`raidcom get path` コマンド)
- 外部パスの削除 (`raidcom delete path` コマンド)
- 外部パスの追加 (`raidcom add path` コマンド)

操作の流れ

外部パスの優先順位は、外部パスグループに登録された順に高くなります。パスの優先度を変更したい場合は、優先度を上げたいパスより先に登録されたパスを削除してから、再度パスを登録してください。外部パス操作の流れを次に説明します。



- 外部パスグループの情報を取得する

操作対象の外部パスグループの情報を取得して、外部パスの優先順位やパスグループ ID を確認します。

2. 外部パスグループから外部パスを削除する
外部パスグループから外部パスを削除する優先順位を下げる外部パスをパスグループから削除します。
3. 外部パスグループに外部パスを追加する
削除した外部パスを外部パスグループに再度追加します。複数のパスを追加する場合は、優先度の高い順に追加します。

注意事項

- ロードバランスモードが標準ラウンドロビンまたは拡張ラウンドロビンの場合、外部パスの優先度は参照しないため、外部パスの優先度を意識する必要はありません。
- パスの優先度変更に伴い一時的にパスを削除することで、外部パスの冗長性が一時的に低下します。業務影響の少ない時間帯に実施してください。

関連概念

- [3.5 外部パスの接続と設定](#)
- [3.6 外部パスの冗長化（冗長パスの追加）](#)
- [3.7 パスグループの設定](#)

4.3.4 iSCSI 接続の CHAP 認証を設定する

外部ストレージシステムとの接続に CHAP 認証を用いる場合、CHAP 認証の方法（単方向認証／双方向認証）に合わせて CHAP ユーザ名と CHAP ユーザのシークレットパスワードを設定します。

操作で使用するコマンド

- CHAP 認証モードと CHAP 認証方向の編集（`raidcom add external_iscsi_name` コマンド）
- ローカルストレージシステム側ポート（イニシエータ）の CHAP ユーザ名と CHAP ユーザのシークレットパスワードの編集（`raidcom modify initiator_chap_user` コマンド）
- 外部ストレージシステム側ポート（ターゲット）の CHAP ユーザ名と CHAP ユーザのシークレットパスワードの編集（`raidcom modify external_chap_user` コマンド）

前提条件

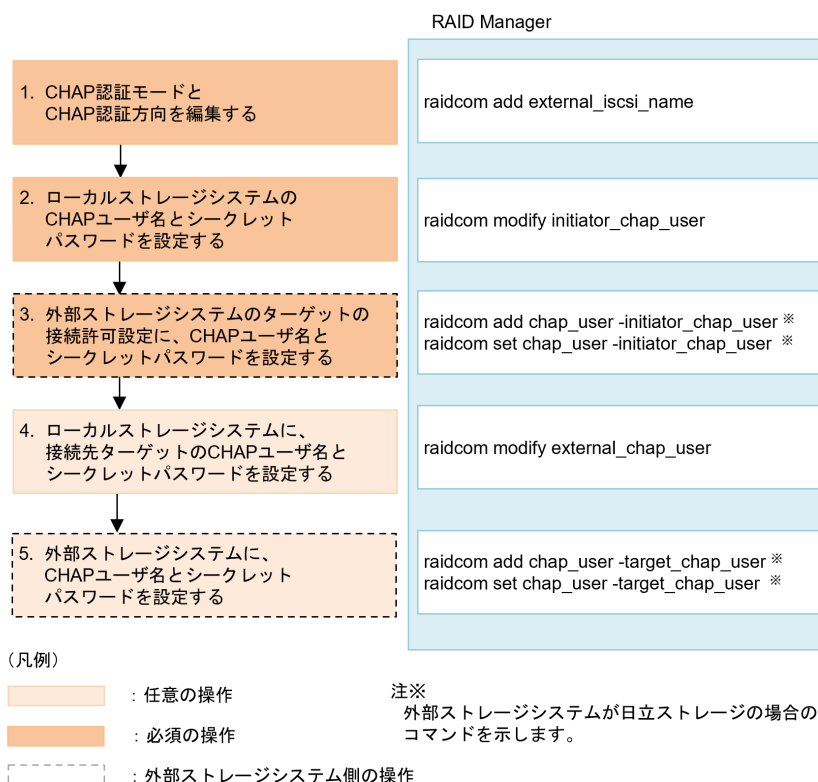
- ホストが I/O 処理を実行していないこと。
- ローカルストレージシステム側のポートが、外部パス等で操作対象の iSCSI ターゲットを使用していないこと。

操作の流れ

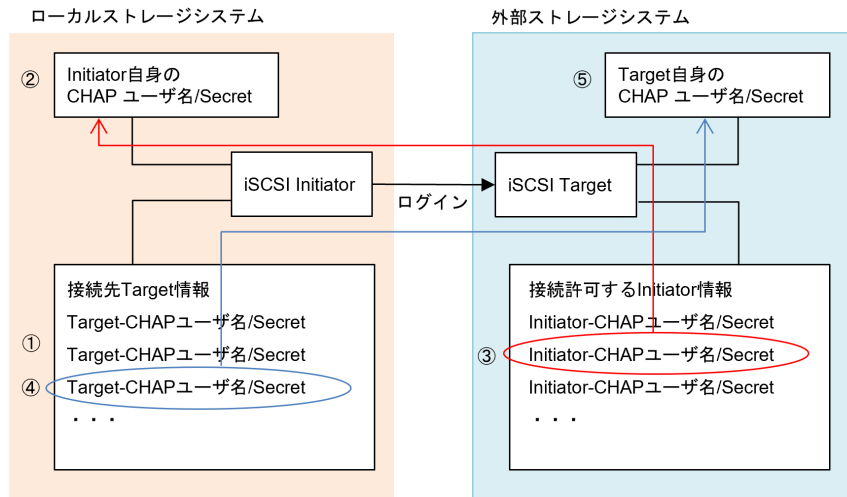
CHAP 認証を用いた接続の設定は、外部ストレージシステムのターゲット単位に設定できます。単方向認証／双方向認証の設定手順について以下に説明します。

- 単方向認証：
iSCSI ターゲットが iSCSI イニシエータを認証します。
手順 1～3 の設定が必要です。
- 双方向認証：

iSCSI ターゲットが iSCSI イニシエータを認証する単方向認証に加え、iSCSI イニシエータが iSCSI ターゲットを認証します。
手順 1～5 の設定が必要です。



1. CHAP 認証を用いる接続先ターゲットについて、CHAP 認証の有効と単方向認証／双方向認証を設定してください。
2. iSCSI イニシエータであるローカルストレージシステムの iSCSI ポートに CHAP ユーザ名とシークレットパスワードを設定します。
3. iSCSI ターゲットである外部ストレージシステムの接続許可設定に CHAP ユーザ名とシークレットパスワードを設定します。外部ストレージシステム側の設定です。外部ストレージシステム側の操作方法については、各ストレージ製品のマニュアルを参照してください。
4. iSCSI イニシエータであるローカルストレージシステムに、外部ストレージシステムのターゲットを認証するための情報として、CHAP ユーザ名と CHAP ユーザのシークレットパスワードを設定します。
5. iSCSI ターゲットである外部ストレージシステムに、CHAP ユーザ名とシークレットパスワードを設定します。外部ストレージシステム側の設定です。外部ストレージシステム側の操作方法については、各ストレージ製品のマニュアルを参照してください。



- : 単方向認証。iSCSIターゲットがiSCSIイニシエータを認証する。ターゲットである外部ストレージシステムに登録されたInitiator情報と、ローカルストレージシステムのCHAP情報が一致するか照合する。
- : 双方向認証。単方向認証に加えてiSCSIイニシエータがiSCSIターゲットを認証する。イニシエータであるローカルストレージシステムに登録されたターゲット情報と、外部ストレージシステムのCHAP情報が一致するか照合する。

4.3.5 外部パスを削除する

操作で使用するコマンド

- 外部パスの削除 (`raidcom delete path` コマンド)

関連概念

- [3.5 外部パスの接続と設定](#)
- [3.6 外部パスの冗長化 \(冗長パスの追加\)](#)
- [3.7 パスグループの設定](#)
- [4.3.7 外部パスの変更](#)

関連タスク

- [4.3.8 既存のすべての外部パスを入れ替える場合の設定の流れ](#)

4.3.6 iSCSI ターゲットの iSCSI 名を削除する

ローカルストレージシステム側のポートに登録されている、外部ストレージシステム側の iSCSI 名の情報を削除します。

操作で使用するコマンド

- iSCSI ターゲットの iSCSI 名の削除 (`raidcom delete external_iscsi_name` コマンド)

前提条件

指定した iSCSI ターゲットを Universal Volume Manager の外部パスで使用していないこと。

4.3.7 外部パスの変更

外部パスを変更するには、変更したい外部パスを削除し、別の外部パスを新たに外部パスとして定義します。

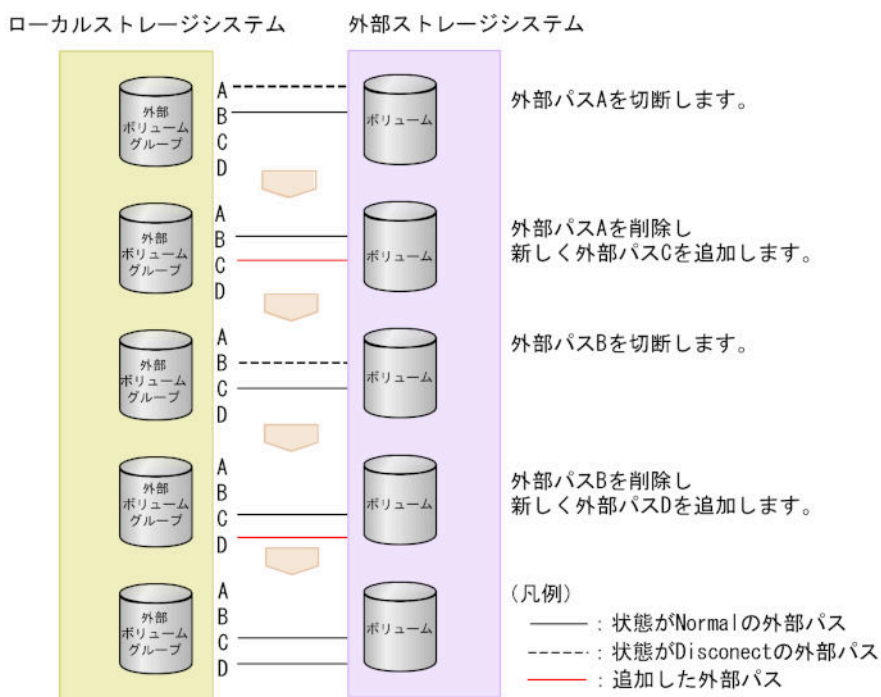
関連タスク

- 4.3.2 既存のパスグループに外部パスを追加する
- 4.3.5 外部パスを削除する
- 4.3.8 既存のすべての外部パスを入れ替える場合の設定の流れ

4.3.8 既存のすべての外部パスを入れ替える場合の設定の流れ

既存のすべての外部パスを新しく追加した外部パスと入れ替える方法について、例を挙げて説明します。

次の図は、設定の流れと外部パスの状態を示しています。既存の外部パス A および B を削除し、新しく追加した外部パス C および D を追加する場合、既存の外部パス A および B を両方とも一度に削除できません。正常に動作する既存の外部パスが少なくとも 1 本設定されている必要があるからです。この場合、まず外部パス A を削除して新しく外部パス C を追加し、設定を適用します。そのあと、外部パス B を削除して新しく外部パス D を追加します。



既存のすべての外部パス (A および B) を新しく追加した外部パス (C および D) と入れ替える流れを次に示します。

操作手順

1. 外部パス A を切断します。
2. 外部パス A が使用しているケーブルを抜き、外部パス C が使用するケーブルを接続します。
3. 外部パス A の定義を解除して、外部パス C を追加します。

4. 外部パス C の状態が正常であることを確認します。
この時点では、正常なパスとして外部パス B および C が設定されています。
以降の手順に従って、外部パス B を削除し、新しい外部パス D を追加します。
5. 外部パス B を切断します。
6. 外部パス B が使用しているケーブルを抜き、外部パス D が使用するケーブルを接続します。
7. 外部パス B の定義を解除して、外部パス D を追加します。
8. 外部パス D の状態が正常であることを確認します。

関連概念

- [4.3.7 外部パスの変更](#)

関連タスク

- [4.3.2 既存のパスグループに外部パスを追加する](#)
- [4.3.5 外部パスを削除する](#)
- [4.7 外部ストレージシステムのボリュームへの外部パスの接続を切断する](#)

4.4 外部ボリュームの詳細情報を確認する

操作で使用するコマンド

- 外部ボリュームグループ情報の取得 (`raidcom get external_grp` コマンド)
- 外部パスグループ情報の取得 (`raidcom get path` コマンド)
- ローカルストレージシステム側ポートに登録された外部ストレージシステムの iSCSI 名 (`raidcom get external_iscsi_name` コマンド)

関連参照

- [5.2 外部パスのトラブルシューティング](#)

4.5 外部ストレージシステムのボリュームへの接続を切断する

メンテナンスのために外部ストレージシステムの電源をオフにしたり、ボリュームのマッピング設定を解除したりする場合、事前に外部ストレージシステムのボリュームへの接続を切断する必要があります。また、マッピングされているボリュームに外部ストレージシステムからアクセスする場合も、事前にローカルストレージシステムから外部ストレージシステムのボリュームへの接続を切断してください。外部ストレージシステムからのアクセスが終了し、ローカルストレージシステムからアクセスするには、関連項目を参照し外部ボリュームの使用を再開してください。

外部ストレージシステムのボリュームへの接続を切断すると、外部ボリュームへのホスト I/O の受け付けが停止され、すでにキャッシュメモリに蓄えられているデータがすべて外部ストレージシステムのボリュームに書き込まれます (デステージされます)。

外部ストレージシステムのボリュームへの接続を切断しても、マッピング時の設定は保持されます。そのため、一度外部ストレージシステムのボリュームへの接続を切断しても、切断したときの設定で再接続できます。

**注意**

データダイレクトマップ属性の仮想ボリュームを削除する場合、事前にデータダイレクトマップ属性のボリュームへの接続を切断する必要があります。データダイレクトマップ属性のボリュームへの接続を切断することによって、プールボリューム閉塞を示す SIM RC=627xxx (xxx はプール ID) が出力される可能性があります。データダイレクトマップ属性の仮想ボリュームの削除については、『オープンシステム構築ガイド』を参照してください。

外部ストレージシステムのボリュームへの接続を切断する前に必要な操作

外部ストレージシステムのボリュームへの接続を切断する前に必要な操作を次に示します。

外部ボリュームの使用状況	必要な操作
オープンシステム用ホストから外部ボリュームに I/O を実行中である	ホストからボリュームへの I/O を停止して、アンマウントしてください。 オープンシステム用ホストから I/O を実行中に接続を切断すると、ボリュームへのホスト I/O は強制的に停止されます。
メインフレームシステム用ホストから外部ボリュームがオンライン状態である	ホストからボリュームへの I/O を停止して、Vary Offline 操作をしてください。
コピー系プログラムプロダクト※を使用してペアに設定されている LDEV がある	ペアを解除してください。 ただし、ShadowImage ペアの状態が PSUE の場合、または ShadowImage for Mainframe ペアの状態が Suspend/SUSPER の場合は、ペアを解除しなくても外部ストレージシステムのボリュームへの接続を切断できます。
Dynamic Provisioning 用のプールにプールボリュームとして登録されている LDEV がある	外部ボリュームが登録されているプールと関連づけられているすべての DP-VOL に対して、次のすべての操作をしてください。 <ul style="list-style-type: none"> Dynamic Provisioning のボリュームの運用を停止する。 Dynamic Provisioning のボリュームを閉塞させる。 データダイレクトマップ属性が有効な外部ボリュームの場合は、そのボリュームと関連づけられたデータダイレクトマップ属性が有効な Dynamic Provisioning のボリュームだけを閉塞させる。 Dynamic Provisioning 用のプールから、データ削減共有ボリュームが作成されており、かつ、そのプールに登録されているプールボリュームに障害が発生している場合は、そのプールボリュームの障害を回復させる。また、重複排除用システムデータボリュームが作成されている場合は閉塞させる。
Volume Migration で移動中の LDEV がある	Volume Migration ペアを削除してください。
global-active device の Quorum ディスクで使用している	Quorum ディスクの設定を解除してください。

注※

ShadowImage、ShadowImage for Mainframe、Universal Replicator、Universal Replicator for Mainframe、TrueCopy、TrueCopy for Mainframe、または global-active device を指します。

操作で使用するコマンド

- 外部ストレージシステムのボリュームへの接続の切断 (raidcom disconnect external_grp コマンド)

前提条件

外部ストレージシステムのボリュームへの接続を切断する前に必要な操作をすべて完了していること。



ヒント

一度、外部ストレージシステムのボリュームへの接続を切断したあと、再度外部ストレージシステムを操作したい場合は、操作したいボリュームを再接続します。

関連概念

- [2.2.1 マッピング時の注意事項](#)

関連タスク

- (2) [外部ストレージシステムの電源をオフにする \(計画停止する\)](#)
- [4.14 外部ストレージシステムのボリュームのマッピングを解除する](#)
- [4.6 外部ストレージシステムのボリュームに再接続する](#)

4.6 外部ストレージシステムのボリュームに再接続する

次に示す場合には、外部ストレージシステムのボリュームを再接続することで、外部ボリュームの使用を再開できます。

- 切断した外部ストレージシステムのボリュームへの接続を再開する場合
- 外部ボリュームの状態が閉塞状態になっている場合
すべての外部パスに障害が発生すると、ローカルストレージシステムは外部ボリュームの状態を閉塞状態にします。この場合、まずは外部ストレージシステムのボリュームを再接続してください。
再接続しても外部ボリュームの状態が回復しない場合は、関連項目を参照し、トラブルシューティングの手順に従って外部パスを回復してください。外部パスの回復後、閉塞状態になった外部ボリュームを使用可能な状態に回復するために、外部ストレージシステムのボリュームを再接続してください。
- 停止していた外部ボリュームの使用を再開する場合
マッピングの設定を保持したまま使用を停止しているボリュームを再接続する場合、ローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングしているボリュームの定義済みの構成情報と、実際の外部ストレージシステムのボリュームの状態が一致していることを確認してください。また、パスの状態やその他のマッピング構成定義をすべて確認してください。確認の結果、マッピングしたボリュームとして使用を再開できる場合は、外部ボリュームへの I/O を可能な状態に設定してください。

外部ストレージシステムのボリュームを再接続した場合、外部ボリュームの使用を再開できる状態にあるときは、外部ボリュームへの I/O が許可され、ボリュームの使用を再開できます。しかし、外部ボリュームの使用を再開できる状態にない場合は、外部ボリュームは閉塞状態のままになります。

操作で使用するコマンド

- 外部ストレージシステムのボリュームへの再接続 (`raidcom check_ext_storage external_grp` コマンド)

関連概念

- [5.1 Universal Volume Manager の一般的なトラブルシューティング](#)

関連タスク

- ・ (3) [計画停止後、外部ストレージシステムを再接続する](#)

4.7 外部ストレージシステムのボリュームへの外部パスの接続を切断する

外部ストレージシステムのボリュームとの接続は保ったまま、外部パスをメンテナンスする場合に、外部パスを切断します。外部パスを切断すると、外部パスの使用を停止して、ストレージシステムから外すための準備を整えます。外部パスの使用を再開するには、外部パスを再接続します。



注意

外部パスの切断は、外部ストレージシステムのボリュームへの接続を停止する操作ではありません。外部パスを切断するには、操作対象にする外部パスを使用している外部ストレージシステムのボリュームに対して、操作対象にする外部パス以外に、正常な状態の外部パスが設定されている必要があります。

操作で使用するコマンド

- ・ 外部ストレージシステムのボリュームへの外部パスの切断 (`raidcom disconnect path` コマンド)

関連タスク

- ・ [4.3.8 既存のすべての外部パスを入れ替える場合の設定の流れ](#)
- ・ [4.8 外部ストレージシステムのボリュームへの外部パスを再接続する](#)

4.8 外部ストレージシステムのボリュームへの外部パスを再接続する

切断によって停止していた外部パスの使用を再開する（回復する）場合に、外部パスを再接続します。

操作で使用するコマンド

- ・ 外部ストレージシステムのボリュームへの外部パスの再接続 (`raidcom check_ext_storage path` コマンド)

前提条件

パスの接続状態が回復可能な状態であること。

関連タスク

- ・ [4.7 外部ストレージシステムのボリュームへの外部パスの接続を切断する](#)

4.9 外部ボリュームグループのキャッシュモードを変更する

キャッシュモードの設定では、ホストからの書き込みデータを、外部ストレージシステムに同期で反映させるか（無効）、非同期で反映させるか（有効）を設定します。

操作で使用するコマンド

- 外部ボリュームグループのキャッシュモードの変更
(`raidcom modify external_grp` コマンド)

関連概念

- [3.4 マッピングに必要なボリュームの属性](#)

4.10 外部ボリュームへのキャッシュ書き込みを制御する

キャッシュ流入制御の設定では、外部ストレージシステムのボリュームとの通信ができなくなった場合に、キャッシュへの書き込みを制限するか（有効）、書き込みを続けるか（無効）を設定します。キャッシュ流入制御の設定は、デフォルトでは無効（書き込みを続ける）です。

操作で使用するコマンド

- 外部ボリュームのキャッシュ書き込み制御 (`raidcom modify external_grp` コマンド)

4.11 外部ボリュームグループのパスモードを変更する

外部ボリュームグループのパスモードを、ALUA モード有効または無効に変更できます。

操作で使用するコマンド

- 外部ボリュームグループのパスモード変更 (`raidcom modify external_grp` コマンド)

前提条件

外部ストレージシステムが ALUA をサポートしていること

ALUA モードが使用できる外部ボリュームグループに対して ALUA モードを有効にした場合に、パスモードが ALUA モードになります。ALUA モードが使用できない外部ボリュームグループに対して ALUA モードを有効にした場合は、外部ストレージシステムのプロファイル情報のパスモードになります。

外部ストレージシステムのプロファイル情報のパスモードは、`raidcom get path` コマンドで参照できます。



注意

外部ストレージシステムの装置名称が `(generic)` と表示されるストレージシステムの場合、Universal Volume Manager で ALUA モードの使用をサポートしていない外部ストレージシステムであっても ALUA モードのデフォルト値が有効になる可能性があります。その場合、ALUA モードを無効に変更してください。各外部ストレージシステムの ALUA モードのサポート状況についてはお問い合わせください。

関連概念

- [3.5.1 外部ボリュームのパスモードの種類](#)

4.12 外部ストレージシステムへの I/O の負荷分散方式を変更する

外部ボリュームグループごとに、外部ストレージシステムへの I/O の負荷分散方式（ロードバランスマード）を変更できます。

操作で使用するコマンド

- 外部ストレージシステムへの I/O 負荷分散方式の変更 (raidcom modify external_grp コマンド)

前提条件

パスモードが Multi モードまたは ALUA モードであること

関連概念

- [3.5.1 外部ボリュームのパスモードの種類](#)

4.13 外部ストレージシステムのポートの設定を変更する

外部パスの設定（Q depth、I/O タイムアウト時間、パス閉塞監視時間）を変更します。



注意

外部ストレージシステムのポートの設定を変更するときの注意事項を次に示します。

- デフォルトの設定で問題がない場合は、デフォルトの設定のまま使用してください。
- ホストからの I/O に使用するボリュームの場合は、I/O タイムアウト時間を 15 秒以内に設定してください（タイムアウトに関する詳細は「[2.2.10 外部ストレージシステムからの応答遅延の検知と対処](#)」を参照）。
- ホストからの I/O に使用しないボリュームの場合は、外部ストレージシステムの推奨値に合わせて設定を変更できます。



メモ

I/O タイムアウト時間およびパス閉塞監視時間に設定できる値については、「[F.2 RAID Manager のオプションのパラメータの設定範囲](#)」で確認してください。

I/O タイムアウト時間およびパス閉塞監視時間の初期値は次のとおりです。

- I/O タイムアウト時間：15 秒
- パス閉塞監視時間：10 秒

操作で使用するコマンド

- 外部ストレージシステムのポート設定の変更 (raidcom modify path コマンド)

4.14 外部ストレージシステムのボリュームのマッピングを解除する

外部ストレージシステムのボリュームのマッピングを解除するには、外部ボリュームグループを削除します。外部ボリュームグループを削除すると、外部ボリュームグループと外部ストレージシステムのボリュームのマッピングを解除できますが、マッピングを解除したボリューム内のデータは削除されません。

パスグループは、パスグループに属する最後の外部ボリュームグループを削除したときに削除されます。

操作で使用するコマンド

- 外部ストレージシステムのボリュームのマッピング解除 (raidcom delete external_grp コマンド)

前提条件

外部ストレージシステムのボリュームを切断して、キャッシュ内のデータをすべてボリュームに書き込んでおくこと。

注意事項

- 外部ボリュームグループの強制削除を実行した場合、外部ストレージシステム側に書き込まれていないローカルストレージシステム側のキャッシュ上のデータは保証されません。
- ローカルストレージシステムに閉塞部位がある場合は、操作できないことがあります。ローカルストレージシステムの閉塞部位を回復させてから、再度操作してください。

関連概念

- [2.2.1 マッピング時の注意事項](#)
- [2.2.6 外部ストレージシステムの保守に関する注意事項 \(再マッピング\)](#)
- [\(1\) 外部ストレージシステムの電源操作](#)

関連参照

- [4.5 外部ストレージシステムのボリュームへの接続を切断する](#)

4.15 外部ボリュームグループに割り当てられた MP ユニットを変更する



注意

- 外部ボリュームグループの MP ユニット ID の変更は、できるだけ I/O 負荷の低い時間帯に実施してください。また、I/O 負荷の高い操作中には実施しないでください。I/O 負荷が高い操作の例として、ShadowImage、TrueCopy、global-active device、Universal Replicator の初期コピー中があります。
- 外部ボリュームグループの MP ユニット ID を変更後、同じ外部ボリュームグループに対して MP ユニット ID を再度変更する場合は、30 分以上経過してから実施してください。
- 外部ボリュームグループの MP ユニット ID を変更する場合は、VSP One Block Administrator の System Monitor を併用することを推奨します。変更の前後で性能モニタリングを利用して、装置の負荷状況を確認してください。
- 外部ボリュームグループの MP ユニット ID の変更は、変更前および変更後ともに MP ユニットのキャッシュのライトペンディング率 (%) ができるだけ低い時間帯に実施してください。全 CLPR のライトペンディング率 (%) が 50% 未満のときに実施することを推奨します。
- 一度に多数の外部ボリュームグループに対して MP ユニット ID を変更しないでください。MP ユニット ID を一度に変更する外部ボリュームグループ数、および変更される外部ボリュームグループに掛かる負荷は、同じ MP ユニット ID が割り当てられた全外部ボリュームグループの 10% 以下を目安として設定してください。

操作で使用するコマンド

- 外部ボリュームグループに割り当てられた MP ユニットの変更
(`raidcom modify external_grp` コマンド)

4.16 ストレージシステムの電源操作

Universal Volume Manager の使用を開始してから、ローカルストレージシステムや外部ストレージシステムの電源をオフにしたり、再度オンにしたりする手順を説明します。

外部ストレージシステムの電源だけをオフ、オンにする場合、Universal Volume Manager の操作を実行する必要があります。

関連概念

- [4.16.1 ローカルストレージシステムだけの電源操作](#)
- [4.16.2 外部ストレージシステムだけの電源操作](#)
- [4.16.3 ローカルストレージシステムと外部ストレージシステムの電源操作](#)

4.16.1 ローカルストレージシステムだけの電源操作

ローカルストレージシステムの電源だけをオフ、オンにする手順を説明します。

関連概念

- [4.16 ストレージシステムの電源操作](#)

関連タスク

- (1) ローカルストレージシステムの電源をオフにする (計画停止する)
- (2) 計画停止後、ローカルストレージシステムを再接続する

(1) ローカルストレージシステムの電源をオフにする (計画停止する)

ローカルストレージシステムの電源をオフにすると、ローカルストレージシステムのキャッシュメモリ内のデータのうち、外部ボリュームのデータがすべて外部ストレージシステムのボリュームに書き込まれます (デステージされます)。

操作手順

1. ローカルストレージシステムに対する I/O を停止します。
2. 外部ボリュームを使用したペアをすべて分割します。
ペア分割操作については、ペア分割に使用するプログラム製品のマニュアルを参照してください。
3. すべての外部ボリュームが正常な状態であるか、または切断されていることを確認します。
4. そのほかにローカルストレージシステムの電源をオフにするために必要な操作があれば、実行します。
5. ローカルストレージシステムの電源をオフにします。

関連概念

- [4.16.1 ローカルストレージシステムだけの電源操作](#)

(2) 計画停止後、ローカルストレージシステムを再接続する

外部ストレージシステムへの接続を切断してからローカルストレージシステムの電源がオフにされている場合、再度電源をオンにしても、ローカルストレージシステムから外部ストレージシステムのボリュームにはアクセスできません。外部ボリュームの使用を再開する場合は、切断したすべてのボリュームを再接続（外部ストレージシステムを再接続）してください。外部ストレージシステムを再接続すると、ローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングしているボリュームの定義済みの構成情報と、実際の外部ストレージシステムのボリュームの状態が一致していることが確認されます。確認の結果、マッピングしたボリュームとして使用できる場合は、外部ボリュームへの I/O が許可され、ボリュームの使用を再開できます。

なお、外部ストレージシステムへの接続を切断するには、マッピングしたすべてのボリュームを切断する操作をします。

外部ボリュームグループの切断操作によって、キャッシュメモリに蓄えられているデータが外部ストレージシステムのボリュームに書き込まれます。すべてのデータが書き込まれると、外部ボリュームは切断された状態になります。

操作手順

1. ローカルストレージシステムの電源をオンにします。
2. 外部ストレージシステムへの接続を切断してからローカルストレージシステムの電源をオフにした場合は、外部ストレージシステムを再接続します。
3. ペアをすべて再同期させます。
ペア再同期操作については、ペア分割に使用するプログラムプロダクトのマニュアルを参照してください。
4. ローカルストレージシステムに対する I/O を開始します。

関連概念

- [4.16.1 ローカルストレージシステムだけの電源操作](#)

4.16.2 外部ストレージシステムだけの電源操作

外部ストレージシステムだけの電源操作について説明します。

関連概念

- [4.16 ストレージシステムの電源操作](#)
- [\(1\) 外部ストレージシステムの電源操作](#)

関連タスク

- [\(2\) 外部ストレージシステムの電源をオフにする（計画停止する）](#)
- [\(3\) 計画停止後、外部ストレージシステムを再接続する](#)

(1) 外部ストレージシステムの電源操作

ローカルストレージシステムの電源がオンのままで、外部ストレージシステムの電源をオン、オフする場合は、Universal Volume Manager の次の操作を実行する必要があります。

外部ストレージシステムの切断

外部ストレージシステムをメンテナンスしたり、計画的に停止したりする場合に実行します。切断対象の外部ストレージシステムの、マッピングしたすべてのボリュームを切断することで、外部ストレージシステムを切断します。外部ストレージシステムのボリュームを切断すると、まず、ローカルストレージシステムの外部ボリュームに対して、ホストからの I/O の受け付けが停止されます。そして、ローカルストレージシステムのキャッシュメモリに蓄えられているデータのうち、外部ボリュームに書き込みが必要なデータがすべて外部ストレージシステムのボリュームに書き込まれます (デステージされます)。

外部ストレージシステムの再接続

切断したすべてのボリュームを再接続することで、外部ストレージシステムを再接続します。外部ストレージシステムのボリュームを再接続すると、ローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングしているボリュームの定義済みの構成情報と、実際の外部ストレージシステムのボリュームの状態が一致していることが確認されます。確認の結果、マッピングしたボリュームとして使用できる場合は、外部ボリュームへの I/O が許可され、ボリュームの使用を再開できます。外部ストレージシステムの再接続は、外部ストレージシステムの切断によって、一度 I/O が不可になった状態から回復する場合に使用します。パスに障害が発生している場合は、パス障害の原因を取り除いて回復できる状態にしてから外部ストレージシステムを再接続してください。

関連概念

- [4.16.2 外部ストレージシステムだけの電源操作](#)

関連タスク

- [4.14 外部ストレージシステムのボリュームのマッピングを解除する](#)

(2) 外部ストレージシステムの電源をオフにする (計画停止する)

操作手順

1. 電源をオフにしたい外部ストレージシステムのボリュームのうち、ローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングしているボリュームに対して、I/O を停止します。
2. 外部ストレージシステムのボリュームを、ローカルストレージシステムの DP プールのプールボリュームとして定義している場合は、すべての Dynamic Provisioning の仮想ボリューム (DP-VOL) を閉塞させてください。DP-VOL の閉塞方法は『RAID Manager コマンドリファレンス』を参照してください。
3. 電源をオフにしたい外部ストレージシステムのすべてのボリュームへの接続を切断します。外部ボリュームに対する I/O が不可になり、ローカルストレージシステムのキャッシュメモリ内のデータがすべて外部ストレージシステムのボリュームに書き込まれます (デステージされます)。
4. そのほかに外部ストレージシステムの電源をオフにするために必要な操作があれば、実行します。
5. 外部ストレージシステムの電源をオフにします。



ヒント

外部ストレージシステムを切断したあと、マッピングしていたボリュームを再度ローカルストレージシステムのボリュームとして使用したい場合には、外部ストレージシステムを再接続します。

関連概念

- [4.16.2 外部ストレージシステムだけの電源操作](#)

関連参照

- [4.5 外部ストレージシステムのボリュームへの接続を切断する](#)

(3) 計画停止後、外部ストレージシステムを再接続する

外部ストレージシステムを切断してから外部ストレージシステムの電源がオフにされている場合、再度外部ストレージシステムの電源をオンにしても、ローカルストレージシステムから外部ボリュームにはアクセスできません。外部ボリュームの使用を再開する場合は、外部ストレージシステムを再接続してください。外部ストレージシステムを再接続すると、ローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングしているボリュームの定義済みの情報と、実際の外部ストレージシステムのボリュームの状態が一致していることが確認されます。確認の結果、マッピングしたボリュームとして使用できる場合は、外部ボリュームへの I/O が許可され、ボリュームの使用を再開できます。

操作手順

1. マッピングしているボリュームが存在している外部ストレージシステムの電源をオンにします。
2. 外部ストレージシステムのボリュームに再接続します。
3. 外部ストレージシステムのボリュームを、ローカルストレージシステムの DP プールのプールボリュームとして定義している場合は、閉塞させたすべての DP-VOL を回復させます。DP-VOL の回復方法は『RAID Manager コマンドリファレンス』を参照してください。

関連概念

- [4.16.2 外部ストレージシステムだけの電源操作](#)
- [4.6 外部ストレージシステムのボリュームに再接続する](#)

4.16.3 ローカルストレージシステムと外部ストレージシステムの電源操作

ローカルストレージシステムと外部ストレージシステムの両方の電源をオフ、オンにする手順を説明します。

関連概念

- [4.16 ストレージシステムの電源操作](#)

関連タスク

- (1) ローカルストレージシステムと外部ストレージシステムの電源をオフにする
- (2) ローカルストレージシステムと外部ストレージシステムの電源をオンにする

(1) ローカルストレージシステムと外部ストレージシステムの電源をオフにする



注意

ローカルストレージシステムと外部ストレージシステムの両方の電源をオフにする場合は、先にローカルストレージシステムの電源をオフにしてから、外部ストレージシステムの電源をオフにしてください。

操作手順

1. ローカルストレージシステムに対する I/O を停止します。
2. 外部ボリュームを使用したペアをすべて分割します。
ペア分割操作については、ペア分割に使用するプログラム製品のマニュアルを参照してください。

3. すべての外部ボリュームが正常な状態であるか、または切断されていることを確認します。
4. ローカルストレージシステムの電源をオフにします。
完全にローカルストレージシステムの電源がオフになったことを確認してから、次の操作に進んでください。
5. 外部ストレージシステムの電源をオフにします。
完全に外部ストレージシステムの電源がオフになったことを確認してください。

関連概念

- [4.16.3 ローカルストレージシステムと外部ストレージシステムの電源操作](#)

(2) ローカルストレージシステムと外部ストレージシステムの電源をオンにする



注意

ローカルストレージシステムと外部ストレージシステムの両方の電源をオンにする場合は、先に外部ストレージシステムの電源をオンにしてから、ローカルストレージシステムの電源をオンにしてください。

操作手順

1. 外部ストレージシステムの電源をオンにします。
完全に外部ストレージシステムの電源がオンになったことを確認してから、次の操作に進んでください。
2. ローカルストレージシステムの電源をオンにします。
完全にローカルストレージシステムの電源がオンになったことを確認してから、次の操作に進んでください。
3. ペアをすべて再同期させます。
ペア再同期操作については、ペア分割に使用するプログラムプロダクトのマニュアルを参照してください。
4. ローカルストレージシステムに対する I/O を開始します。

関連概念

- [4.16.3 ローカルストレージシステムと外部ストレージシステムの電源操作](#)

Universal Volume Manager のトラブルシューティング

この章では、RAID Manager による、Universal Volume Manager のトラブルシューティング情報と対処方法を記載しています。管理ツールの操作端末の操作および通常の保守点検は、ユーザの責任で行ってください。管理ツールの一般的なエラーと対処については、各管理ツールのマニュアルを参照してください。

- 5.1 Universal Volume Manager の一般的なトラブルシューティング
- 5.2 外部パスのトラブルシューティング
- 5.3 ボリューム探索のトラブルシューティング
- 5.4 お問い合わせ先

5.1 Universal Volume Manager の一般的なトラブルシューティング

Universal Volume Manager の一般的なエラーと対処を次の表に示します。

エラー	対処
外部ボリュームに接続できない※。	<p>次の原因が考えられます。確認してエラーを取り除き、再度実行してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • スイッチの電源が OFF になっている。 • スイッチで障害が発生した。 • ケーブルが正しく接続されていない。 • 外部ストレージシステム内で構成が変更され、該当するボリュームが削除された。 • 外部ストレージシステム内で該当するボリュームに障害が発生した。 • 外部ストレージシステム内でパスが変更された。 • ローカルストレージシステムのポート属性が変更された。 • トポロジ情報が正しく設定されていない。 • ローカルストレージシステムと外部ストレージシステム間のリンクアップ処理が完了していない（結線から 35 秒以上経過してから操作を再実施してください）。
外部ストレージシステムのボリュームを外部ボリュームグループとしてマッピングできない。	<p>次の原因が考えられます。確認してエラーを取り除き、再度実行してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ローカルストレージシステムの最大外部ボリュームグループ数を超えている。 • ローカルストレージシステムの最大外部ボリューム数を超えている。 <p>ローカルストレージシステムの最大外部ボリュームグループ数と最大外部ボリューム数については「2.1.3 Universal Volume Manager の要件」を参照してください。</p>
外部ボリュームを削除できない。	<p>外部ボリュームを削除する前に外部ストレージシステムを撤去してしまったなどの原因で、外部ストレージシステムのボリュームを切断できない場合は、外部ボリュームを強制削除（接続を切断していない外部ボリュームグループを削除）してください。</p>
外部パスが閉塞している。	<p>エラー項目「外部ストレージシステムのボリュームに接続できない」に示す原因が考えられますので、確認してエラーを取り除き、再度実行してください。エラー項目「外部ストレージシステムのボリュームに接続できない」に該当しないときは、次を実施してください。</p> <p>次に示す 2 点のどちらを確認してもパスが回復しない場合は、サポートセンタに連絡してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ローカルストレージシステムと外部ストレージシステム間のケーブルが接続されているかを確認してください。接続されていない場合は接続してください。 • ローカルストレージシステムと外部ストレージシステム間のケーブルが接続されている場合は、ケーブルをいったん抜き、再度差ししてください。30 秒経過後、管理ツールの操作端末からパス状態を確認してください。

エラー	対処
対処が必要な状態の外部パスが存在する。	raidcom get path コマンドの「PHS」が、「NML」または「DSC」以外の場合、外部パスへの対処が必要です。 上記に該当する場合は、「 5.2 外部パスのトラブルシューティング 」を参照して、必要な対処を実施してください。
ポート探索やボリューム探索の結果、外部ストレージシステムのボリュームが認識できない。	「 5.3 ボリューム探索のトラブルシューティング 」に示す原因が考えられます。対処を実施して、再度実行してください。
ポート探索の結果、Unknown と表示される外部ストレージシステムが追加され、外部ストレージシステムを認識しない。	外部パスとして使用できない経路を使用して外部ストレージシステムを接続しています。「 5.3 ボリューム探索のトラブルシューティング 」を参照して、対処してください。
外部ボリュームが閉塞している。	次の原因が考えられます。確認してエラーを取り除き、再度実行してください。 <ul style="list-style-type: none"> 設定したすべての外部パスが閉塞している (抜かれている)。 外部ボリュームの属性が、Read/Write 属性ではない。 外部ボリュームが障害のため閉塞している。
外部ストレージシステムのボリューム、または外部パスを再接続した後、10 分以上経過してもボリュームおよび外部パスの状態が CHK (チェック中) のまま変わらない。	外部ストレージシステムのボリューム、または外部パスを再接続してください。繰り返し操作しても同じ結果のときは、サポートセンタに連絡してください。
外部ストレージシステムのボリュームを切断後、デステージ処理が進まず外部ボリュームの状態が切断にならない。	キャッシュ内のデータをボリュームに書き込む処理 (デステージ処理) は、ボリュームの容量が大きくなるほど時間が掛かります。接続している外部ストレージシステムの性能や状態などによって、処理速度は変化します。 外部ストレージシステムがデータ書き込み処理を実施可能な状態であること、および、外部ストレージシステムのデータ書き込み処理状況を確認してください。外部ストレージシステムに問題がなく、ローカルストレージシステムから外部ストレージシステムにデータが送信されていない場合、サポートセンタに連絡してください。
メインフレームホストに、デバイス状態として「介入要求」メッセージが報告された。	デバイス状態が遷移しているところです。しばらく時間を置いてから、デバイス状態を再度確認してください。 デバイス状態が正常に遷移した場合は、そのままデバイスを使用できます。 デバイス状態がデバイス閉塞に遷移した場合は、エラー項目「外部ボリュームが閉塞している」に示す原因が考えられますので、対処を参照してください。
メインフレームホストに、デバイス状態として「デバイス閉塞」メッセージが報告された。	エラー項目「外部ボリュームが閉塞している」に示す原因が考えられますので、対処を参照してください。
<ul style="list-style-type: none"> 以下の RAID Manager コマンドに、-safety_check enable オプションを設定して実行したが、「VENDOR_ID」と「PRODUCT_ID」に「Unknown」と表示される。 raidcom discover external_storage 以下の RAID Manager コマンドに、-safety_check enable オプションを設定して実行したが、外部ストレージシステムのボリュームが表示されない。 raidcom discover lun 以下の RAID Manager コマンドに、-safety_check enable オプションを設定して実行したが、コマンドが失敗する。 raidcom add external_grp raidcom add path 	左記 3 つのトラブルは、以下のどちらかで対処してください。 <ul style="list-style-type: none"> 外部ストレージシステムが他社製の場合： 「(1) 外部パスとして使用できない経路」に示す、外部パスとして使用できる経路に変更してください。 外部ストレージシステムが日立製の場合： 以下の経路を使用して外部ストレージシステムを接続している可能性があります。「5.3 ボリューム探索のトラブルシューティング」を参照して、対処してください。 <ul style="list-style-type: none"> 外部パス (日立製ストレージシステムがローカルストレージシステムを外部ストレージシステムとして接続) として使用中の経路 リモートパスとして使用中の経路

注※

外部ボリュームに接続できない場合、以下の現象が発生する可能性があります。

- ・ ポート探索で外部ストレージシステムのポート情報が出力されない。
- ・ ボリューム探索で外部ストレージシステムのボリューム情報が出力されない。
- ・ 外部ストレージシステムのボリュームのマッピングに失敗する。
- ・ 外部パスを追加できない。
- ・ 外部パスの再接続を実施しても外部パスが閉塞したままになる。
- ・ 外部ストレージシステムのボリュームへの再接続をしても、外部ボリュームが閉塞したままになる。
- ・ 外部ストレージシステムのボリュームの切断に失敗する。

関連概念

- ・ 4.6 外部ストレージシステムのボリュームに再接続する

5.2 外部パスのトラブルシューティング

外部ボリュームグループが閉塞または警告状態の場合、該当する外部ボリュームグループが属するパスグループに正常でない外部パスがあります。外部パスの状態と必要な対処を次の表に示します。RAID Manager の `raidcom get path` コマンドで `-key opt` オプションを指定して実行し、「PHS」に表示される 16 進数の値を確認して、対処してください。なお、どの状態にも該当しない場合、サポートセンタに連絡してください。

値	状態	説明	対処
0x01	Unknown	状態が不確定です。	パスの状態を特定できません。サポートセンタに連絡してください。
0x02	Cannot detect port	<p>パスが解除されています。または、外部ストレージシステムのポートを検出できません。外部ストレージシステムとの接続状況に問題があります。例えば、次に示すような原因が考えられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 物理的に、ケーブルが正しく接続されていない。 ・ 外部ストレージシステムへ接続しているポートと Target ポートとで、トポロジの設定が合っていない。 ・ ポートにセキュリティが設定されているため、ローカルストレージシステムからは外部ストレージシステムのボリュームを認識できない。 ・ スイッチを経由して接続している場合、スイッチの設定が適切ではない。 	外部ストレージシステムとの接続状況を確認してください。回復できない場合は、サポートセンタに連絡してください。
0x03	Blockade	外部ストレージシステムへ接続しているポートが閉塞状態です。	ファームウェア交換、パッケージ交換などによって、外部ストレージシステムへ接続しているポートが閉塞

値	状態	説明	対処
			しています。ローカルストレージシステムの状態を確認してください。回復できない場合は、サポートセンタに連絡してください。
0x04	External device setting changed	外部ストレージシステムの設定が変更されました（パス定義が削除されました。または、ストレージシステムが変更されました）。	外部ストレージシステムのポートは認識できています。外部ストレージシステムのマニュアルを参照し、マッピングしている外部ストレージシステムのボリュームの設定情報が変更されるような操作が実行されていないかどうか、確認してください。
0x05	LDEV size reduced	外部ストレージシステムの容量の定義が変更されました（容量が減らされました）。	外部ストレージシステムのボリューム容量を確認してください。一度外部ボリュームグループを削除してから、再度マッピングしてください。
0x06	Not ready	外部ストレージシステムから「NOTREADY」と応答がありました。外部ストレージシステムのドライブがスピニング中、またはボリュームがフォーマット中のおそれがあります。	該当するパスを使って外部ストレージシステムにアクセスできない状態です。外部ストレージシステムの状態を確認してください。回復できない場合は、サポートセンタに連絡してください。
0x07	Illegal request	外部ストレージシステムから「ILLEGALREQUEST」と応答がありました。外部ストレージシステムのボリュームに対してコマンドを実行できません。外部ストレージシステムのボリュームに、データ保護が設定されているおそれがあります。	外部ストレージシステムのポートは認識できています。外部ストレージシステムの設定を確認してください。回復できない場合は、サポートセンタに連絡してください。
0x08	Command aborted	外部ストレージシステムから「ABORTEDCOMMAND」と応答がありました。外部ストレージシステム側で障害が発生しているおそれがあります。	外部ストレージシステムのポートは認識できています。外部ストレージシステムの設定と、外部ストレージシステムとの接続状況（ケーブルやスイッチは故障していないか、など）を確認してください。回復できない場合は、サポートセンタに連絡してください。
0x09	Busy	外部ストレージシステムは BUSY 状態です。	外部ストレージシステムのポートは認識できています。外部ストレージシステムの設定と、外部ストレージシステムの負荷状態（極端に負荷のかかる構成になっていないか、など）を確認してください。回復できない場合は、サポートセンタに連絡してください。
0x0a	LDEV reserved	外部ストレージシステムのボリュームに SCSI Reserve が設定されています。	外部ストレージシステムのボリュームの SCSI Reserve を解除してください。
0x0b	Response error	異常な応答による閉塞状態です。外部ストレージシステムのボリュームにアクセスできないおそれがあります。また、外部ストレージシステム	外部ストレージシステムのポートは認識できています。外部ストレージシステムの設定と状態を確認してください。回復できない場合は、サポートセンタに連絡してください。

値	状態	説明	対処
		のボリュームに、データ保護が設定されているおそれがあります。	
0x0c	Timeout	異常応答のため再実行しましたが、タイムアウトになりました。次の2つのケースが考えられます。 <ul style="list-style-type: none"> 異常応答 (Response) のため再実行したが、タイムアウトした。 外部パス閉塞機能が有効の場合、応答遅延を検出して、閉塞した。 	外部ストレージシステムのポートは認識できています。外部ストレージシステムとの接続状況 (ケーブルやスイッチは故障していないか、など) を確認してください。回復できない場合は、サポートセンタに連絡してください。
0x0d	Initiator port	外部ストレージシステムのポート属性が Initiator ポートに変更されました。	外部ストレージシステムのポート属性を Target ポートに設定してください。回復できない場合は、サポートセンタに連絡してください。
0x0f	Unknown port	外部ストレージシステムのポート属性が不明です。	外部ストレージシステムのポートは認識できています。外部ストレージシステムとの接続状況 (ケーブルやスイッチは故障していないか、など) を確認してください。 また、外部ストレージシステムが冗長パス構成の場合に、次の原因で外部パスの状態が「Unknown」になるおそれがあります。パス構成を見直し、必要な外部パスを追加してください。 <ul style="list-style-type: none"> 外部パスグループのパス数に対して外部ボリュームグループのパス数が不足している 外部パスグループと外部ボリュームグループのパス構成が一致していない 回復できない場合は、サポートセンタに連絡してください。
0x10	Internal error	プログラムエラーです。または、論理的な矛盾が発生しています。	サポートセンタに連絡してください。
0x11	Target error	外部ストレージシステム側でコントローラ閉塞などによるポートの障害を検出した状態です。	外部ストレージシステムの状態を確認し、正常な状態に回復してください。回復できない場合は、サポートセンタに連絡してください。
0x12	Unavailable	外部ストレージシステムから「Unavailable」と応答がありました。外部ストレージシステムから、接続しているポートの切り替えを要求されている状態です。	冗長パスのうち Standby 状態のパスがプライマリパスに自動で切り替わります。プライマリパスに切り替わると、パスの状態は正常になります。
0x13	Backoff	外部ストレージシステムから「Backoff」と応答がありました。外部ストレージシステムのボリュームに一時的な障害が発生したため、その障害の回復を待っている状態です。	プライマリパスがこの状態になっても、すぐには冗長パスに切り替わりません。障害が回復したあとは、正常になります。回復しない場合は、パスの状態は別の状態に移行します。

値	状態	説明	対処
0x14	Device check error	外部ストレージシステムのボリュームをマッピングしましたが、対象ボリュームにアクセスできません。	外部ストレージシステムの対象ボリュームの状態を確認してください。正常でない場合は、正常な状態に回復してください。フォーマットされていない場合は、フォーマットを実施してください。
0x15	Medium error	外部ストレージシステムの対象ボリュームにアクセスできなくなりました。	外部ストレージシステムの対象ボリュームの状態を確認してください。正常でない場合は、正常な状態に回復してください。フォーマットされていない場合は、フォーマットを実施してください。
0x1b	Destage Failed	キャッシュ内のデータをボリュームに書き込む処理に失敗しました。	外部ストレージシステムのボリュームを再接続して外部パスの状態を正常に回復させたあと、再度外部ストレージシステムのボリュームへの接続を切断してください。この操作を数回繰り返してもマッピングパスの状態が「Destage Failed」となる場合は、サポートセンタに連絡してください。
0x40 0x44	Normal	正常な状態です。	ポートの状態は正常です。対処は不要です。
0x41	Standby	外部ストレージシステムのポートが待機状態です。	ポートの状態は正常ですが、待機状態のため、I/Oは受け付けできません。対処は不要です。
0x42 0x45	Passive	外部ストレージシステムのポートが不活性状態です。	ポートの状態は正常ですが、I/Oに使用されていません。対処は不要です。
0x43	Adding	LDEVの追加処理中です。	ポートの状態は正常ですが、I/Oは受け付けできません。一時的な状態のため、対処は不要です。しばらく待ってから、再度確認してください。
0x80	Disconnect	外部パスが保守閉塞状態です。	ユーザ操作によってマッピングパスが切断され、保守閉塞している状態です。本状態による対処は不要です。
0xc0	Checking	外部パスのチェック中です。	一時的な状態のため、対処は不要です。しばらく待ってから、再度確認してください。

関連タスク

- [4.4 外部ボリュームの詳細情報を確認する](#)

5.3 ボリューム探索のトラブルシューティング

ポート探索やボリューム探索に失敗する要因と、必要な対処を次に示します。

要因	対処
ローカルストレージシステムと外部ストレージシステムのポートが接続されていない。	ローカルストレージシステムのポートと外部ストレージシステムのポートを接続してください。
スイッチのケーブルが正しく接続されていない。または、スイッチのポートが閉塞している。	ケーブルをスイッチの正しいポートに接続してください。または、スイッチのポートの状態を正常にしてください。
スイッチのゾーニングが正しく設定されていない。	スイッチのゾーニング設定を見直し、ローカルストレージシステムの外部ストレージシステムへ接続しているポートと外部ストレージシステムのポートが通信できるようにしてください。
ローカルストレージシステムの Bidirectional ポートに接続されていない。	ローカルストレージシステムの Bidirectional ポートに接続してください。または、接続しているポートを Bidirectional に変更してください。
外部ストレージシステムのボリュームが、RESERVATION CONFLICT を返却した。	外部ストレージシステムのボリュームのリザーブ状態を解除してください。
外部ストレージシステムのポートセキュリティが設定されている。	ローカルストレージシステムが外部ストレージシステムのポートにアクセスできるように、ポートセキュリティの設定を解除するか、外部ストレージシステムのセキュリティ設定を変更してください。
外部ストレージシステムのポートに、LU が定義されていない。	外部ストレージシステムのポートに、LU を定義してください。
外部ストレージシステムのボリュームの容量が、Universal Volume Manager のサポート容量未満である。	次のどちらかを実施してください。 <ul style="list-style-type: none"> 外部ストレージシステムのボリュームの容量を、Universal Volume Manager のサポート容量以上に増やす。 セキュリティの機能を使用するか、または接続している外部ストレージシステムのポートからその LU 設定を削除して、容量が足りないボリュームをローカルストレージシステムから認識できないように設定する。
外部ストレージシステムのボリュームが、管理 LU として定義されている。	外部ストレージシステムのポートに管理 LU（例：Universal Xport LU）が設定されている場合、次のどれかを実施してください。 <ul style="list-style-type: none"> ローカルストレージシステムと接続するポートに、管理 LU の LUN よりも小さい LUN を持つデータ格納用 LU を最低 1 つ設定する。 ローカルストレージシステムと接続するポートから、管理 LU を削除する。 セキュリティ機能を使用して、管理 LU のアクセス属性を読み書き禁止に設定する。
外部ストレージシステムのリモートコマンドデバイスをカスケード接続した。	次のどちらかを実施してください。 <ul style="list-style-type: none"> リモートコマンドデバイスをカスケード接続しないようにする。 セキュリティの機能を使用するか、または接続している外部ストレージシステムのポートからその LU 設定を削除して、リモートコマンドデバイスをローカルストレージシステムから認識できないように設定する。
ポート探索で取得された外部ストレージシステムの情報が、プロファイル情報にない。	次のどちらかを実施してください。 <ul style="list-style-type: none"> Universal Volume Manager がサポートする外部ストレージシステムを接続する。

要因	対処
	<ul style="list-style-type: none"> その外部ストレージシステムが Universal Volume Manager でサポートされているかをサポートセンタに確認する。サポートされている場合、外部ストレージシステムをサポートする DKCMAIN ファームウェアのバージョンをインストールするか、外部ストレージシステムのプロファイル情報をインストールすると、外部ストレージシステムと接続できるようになります。
外部ストレージシステムへのログインに失敗した。	<p>次のどちらかを実施してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> 外部ストレージシステムのポートの状態を確認し、正常な状態にする。 ローカルストレージシステムからログインできるように、外部ストレージシステムで WWN などを登録する。
外部ストレージシステムのボリュームが正常な状態でない。また、外部ストレージシステムからの情報取得に失敗した、またはエラーが返ってきた。	外部ストレージシステムやボリュームの状態を確認し、正常な状態にしてください。
外部バスとして使用できない経路で外部ストレージシステムと接続している。	<p>他社製の外部ストレージシステムへの接続では、次の経路を外部バスに使用できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> 外部ストレージシステムのポートを起点とし、ローカルストレージシステムのポートを終点とする I/O バスで使用中の経路 <p>上記以外の経路を使用して外部ストレージシステムを接続してください。</p>
外部バス（2台の日立製ストレージシステムが、相互に外部ストレージシステムとして接続）またはリモートバスで使用中の経路で外部ストレージシステムと接続している。	<p>RAID Manager から <code>-safety_check enable</code> オプションを指定せずに、コマンドを実行してください。</p> <p>注意： 上記操作をすると、当該経路を使用する外部ボリュームのホスト I/O 性能またはリモートコピー性能が一時的に低下する可能性があります。外部バスまたはリモートバスとして使用中でない経路に変更するか、一時的な性能低下が問題ないことを確認してから操作してください。</p>

5.4 お問い合わせ先

- 保守契約をされているお客様は、以下の連絡先にお問い合わせください。
日立サポートサービス：<http://www.hitachi-support.com/>
- 保守契約をされていないお客様は、担当営業窓口にお問い合わせください。

外部ストレージシステム接続時の設定と注意事項

外部ストレージシステム接続時の設定と注意事項について説明します。

- A.1 VSP One B20 および VSP One B80 のストレージシステム接続時の設定
- A.2 VSP 5000 シリーズストレージシステム接続時の設定
- A.3 VSP G1000, G1500 および VSP F1500 ストレージシステム接続時の設定
- A.4 VSP G130, G150, G350, G370, G700, G900、VSP F350, F370, F700, F900 および VSP E シリーズのストレージシステム接続時の設定
- A.5 VSP G100, G200, G400, G600, G800 および VSP F400, F600, F800 のストレージシステム接続時の設定
- A.6 VSP One SDS Block ストレージシステム接続時の注意事項
- A.7 HPE EVA ストレージシステム接続時のファームウェアバージョン
- A.8 HPE Nimble Storage/Alletra 接続時の注意事項
- A.9 HPE Primera A630/A650/A670/C630/C650/C670 接続時の注意事項
- A.10 Oracle (旧 SUN) StorEdge 6120/6320 ストレージシステム接続時の設定
- A.11 Oracle (旧 SUN) StorageTek V2X2 ストレージシステム接続時の注意事項
- A.12 Dell EMC VNX シリーズ接続時の設定
- A.13 Dell EMC Symmetrix シリーズ/DMX シリーズ/VMAX シリーズ/PowerMax シリーズ接続時の設定と注意事項
- A.14 IBM DS3000/DS4000/DS5000 シリーズのシステムオプションパラメータ
- A.15 IBM SVC シリーズのシステムオプションパラメータ

- A.16 IBM V840/V3000/V5000/V7000/V9000 接続時の設定と注意事項
- A.17 IBM XIV シリーズ接続時のシリアル番号表示の差異
- A.18 Fujitsu FibreCAT CX シリーズ接続時の設定と注意事項
- A.19 Fujitsu ETERNUS DX60 S2/DX80 S2/DX90 S2 または Fujitsu ETERNUS DX400 S2 シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ設定
- A.20 Fujitsu ETERNUS DX8900 S4/DX8900 S3/DX8700 S3/DX60 S5/DX100 S5/DX200 S5/DX500 S5/DX600 S5/DX900 S5/AF150 S3/AF250 S3/AF650 S3 接続時のシステムオプションパラメータ設定
- A.21 HPE (旧 SGI) IS4600 シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ
- A.22 3PAR T400、T800、F400、V800、V400、StoreServ シリーズ接続時の注意事項
- A.23 Seagate Exos X シリーズ接続時の設定と注意事項
- A.24 日立製品以外のストレージシステム接続時の設定

A.1 VSP One B20 および VSP One B80 のストレージシステム接続時の設定

外部ストレージシステムとして VSP One B20 または VSP One B80 のストレージシステムを接続する場合は、ローカルストレージシステムと接続する外部ストレージシステムのポートに、ホストモード 2C (Windows Extension) または 0C ((Deprecated) Windows) (※) を設定してください。

注※

ホストモード 2C と 0C に機能的な差異はありません。ホストモード 2C の設定を推奨します。

A.1.1 VSP One B20 または VSP One B80 のストレージシステム側で回復が必要となるパス障害の例

パス状態が正常でない場合、外部ストレージシステム側に要因がある可能性があります。外部ストレージシステム側で、次の表に記載する確認方法の例に従って要因の有無を確認してください。要因があった場合、回復方法の例に従って回復してください。パスの状態が回復できない場合はお問い合わせください。

要因	確認方法と回復方法の例
ボリュームのパス設定を変更した。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームのパスの設定を確認してください。パスの設定が変更されていた場合は、マッピングしたときの設定に戻してください。その後、ローカルストレージシステム側からボリュームの再接続を実施してください。
ボリュームのアクセス属性を変更した。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームのアクセス属性を確認してください。アクセス属性によってボリュームが保護されている場合は、保護を解除してください。その後、ローカルストレージシステム側からボリュームの再接続を実施してください。
ボリュームがデータコピーのペアに設定されている。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームが ShadowImage、TrueCopy、Universal Replicator、または global-active device などのペアに設定されていないかを確認してください。ペアに設定されている場合、ペアの状態によってボリュームが保護されることがあります。ボリュームが保護されている場合は、ペアの状態を変更するか、またはペアを削除してください。
外部ストレージシステムとの接続状況に問題がある。	例えば、次のような要因によって外部パスが閉塞する可能性があります。 <ul style="list-style-type: none">ケーブルが正しく接続されていない。外部ストレージシステムへ接続しているポートと外部ストレージシステムのポートとで、トポロジの設定が合っていない。スイッチを経由して接続している場合、スイッチの設定が適切ではない。 ケーブルが正しく接続されているかを確認し、ポートを正しく設定してください。
LUN セキュリティが有効になっている。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームの LUN セキュリティの状態を確認してください。LUN セキュリティが有効になっている場合は、LUN セキュリティの設定に誤りがないかどうか確認してください。

A.1.2 VSP One B20 接続時の注意事項

- 外部ストレージシステム側で global storage virtualization の機能を使って、異なる装置製番に仮想化した複数の LDEV に対し、外部ストレージシステムの同じポートを使用して LU パスを定義している場合、これらの LU をローカルストレージシステムの外部ボリュームグループにマッピングすることはできません。仮想装置製番が異なる LDEV の LU パスは、外部ストレージシステムの別々のポートに設定してください。
- 外部ストレージシステム側で global storage virtualization の機能を使って仮想化した LDEV を、ローカルストレージシステムから認識する場合、仮想化された状態の LDEV として認識します。

A.1.3 VSP One B80 接続時の注意事項

- 外部ストレージシステム側で global storage virtualization の機能を使って仮想化した LDEV を、ローカルストレージシステムから認識する場合、仮想化されていない状態の LDEV として認識します。

A.2 VSP 5000 シリーズストレージシステム接続時の設定

外部ストレージシステムとして VSP 5000 シリーズストレージシステムを接続する場合は、ローカルストレージシステムと接続する VSP 5000 シリーズストレージシステムのポートに、ホストモード 0C ((Deprecated) Windows) または 2C (Windows Extension) を設定し、ローカルストレージシステムと接続する VSP 5000 シリーズストレージシステムのポートのポート属性を Target または Bidirectional にしてください。

関連参照

- [付録 A.2.1 VSP 5000 シリーズストレージシステム側で回復が必要となるパス障害の例](#)

A.2.1 VSP 5000 シリーズストレージシステム側で回復が必要となるパス障害の例

パス状態が正常でない場合、外部ストレージシステム側に要因がある可能性があります。外部ストレージシステム側で、次の表に記載する確認方法の例に従って要因の有無を確認してください。要因があった場合、回復方法の例に従って回復してください。パスの状態が回復できない場合はお問い合わせください。

要因	確認方法と回復方法の例
ボリュームのパス設定を変更した。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームのパスの設定を確認してください。パスの設定が変更されていた場合は、マッピングしたときの設定に戻してください。その後、ローカルストレージシステム側からボリュームの再接続を実施してください。
ボリュームのアクセス属性を変更した。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームのアクセス属性を確認してください。アクセス属性によってボリュームが保護されている場合は、保護を解除してください。その後、ローカルストレージシステム側からボリュームの再接続を実施してください。
ボリュームがデータコピーのペアに設定されている。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームが ShadowImage、TrueCopy、Universal Replicator、または global-active device などのペアに設定されていないかを確認してください。ペアに設定されている場合、ペアの状態によってボリュームが保護されることが

要因	確認方法と回復方法の例
	あります。ボリュームが保護されている場合は、ペアの状態を変更するか、またはペアを削除してください。
外部ストレージシステムとの接続状況に問題がある。	例えば、次のような要因によって外部パスが閉塞する可能性があります。 <ul style="list-style-type: none"> ケーブルが正しく接続されていない。 外部ストレージシステムへ接続しているポートと外部ストレージシステムのポートとで、トポロジの設定が合っていない。 スイッチを経由して接続している場合、スイッチの設定が適切ではない。 ケーブルが正しく接続されているかを確認し、ポートを正しく設定してください。
LUNセキュリティが有効になっている。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームのLUNセキュリティの状態を確認してください。LUNセキュリティが有効になっている場合は、LUNセキュリティの設定に誤りがないかどうか確認してください。

関連概念

- 付録 A.2 VSP 5000 シリーズストレージシステム接続時の設定

A.2.2 VSP 5000 シリーズストレージシステム接続時の注意事項

- 外部ストレージシステム側で global storage virtualization の機能を使って、異なる装置製番に仮想化した複数の LDEV に対し、外部ストレージシステムの同じポートを使用して LU パスを定義している場合、これらの LU をローカルストレージシステムの外部ボリュームグループにマッピングすることはできません。仮想装置製番が異なる LDEV の LU パスは、外部ストレージシステムの別々のポートに設定してください。
- 外部ストレージシステム側で global storage virtualization の機能を使って仮想化した LDEV を、ローカルストレージシステムから認識する場合、仮想化された状態の LDEV として認識します。

A.3 VSP G1000, G1500 および VSP F1500 ストレージシステム接続時の設定

外部ストレージシステムとして VSP G1000, G1500 および VSP F1500 ストレージシステムを接続する場合は、ローカルストレージシステムと接続する VSP G1000, G1500 および VSP F1500 ストレージシステムのポートに、ホストモード 0C ((Deprecated) Windows) または 2C (Windows Extension) を設定し、ローカルストレージシステムと接続する VSP G1000, G1500 および VSP F1500 ストレージシステムのポートのポート属性を Target にしてください。

関連参照

- 付録 A.3.1 VSP G1000, G1500 および VSP F1500 ストレージシステム側で回復が必要となるパス障害の例

A.3.1 VSP G1000, G1500 および VSP F1500 ストレージシステム側で回復が必要となるパス障害の例

パス状態が正常でない場合、外部ストレージシステム側に要因がある可能性があります。外部ストレージシステム側で、次の表に記載する確認方法の例に従って要因の有無を確認してください。要

因があった場合、回復方法の例に従って回復してください。パスの状態が回復できない場合はお問い合わせください。

要因	確認方法と回復方法の例
ボリュームのパス設定を変更した。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームのパスの設定を確認してください。パスの設定が変更されていた場合は、マッピングしたときの設定に戻してください。その後、ローカルストレージシステム側からボリュームの再接続を実施してください。
ボリュームのアクセス属性を変更した。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームのアクセス属性を確認してください。アクセス属性によってボリュームが保護されている場合は、保護を解除してください。その後、ローカルストレージシステム側からボリュームの再接続を実施してください。
ボリュームがデータコピーのペアに設定されている。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームが ShadowImage、TrueCopy、Universal Replicator、または global-active device などのペアに設定されていないかを確認してください。ペアに設定されている場合、ペアの状態によってボリュームが保護されることがあります。ボリュームが保護されている場合は、ペアの状態を変更するか、またはペアを削除してください。
外部ストレージシステムとの接続状況に問題がある。	例えば、次のような要因によって外部パスが閉塞する可能性があります。 <ul style="list-style-type: none"> ケーブルが正しく接続されていない。 外部ストレージシステムへ接続しているポートと外部ストレージシステムのポートとで、トポロジの設定が合っていない。 スイッチを経由して接続している場合、スイッチの設定が適切ではない。 ケーブルが正しく接続されているかを確認し、ポートを正しく設定してください。
LUN セキュリティが有効になっている。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームの LUN セキュリティの状態を確認してください。LUN セキュリティが有効になっている場合は、LUN セキュリティの設定に誤りがないかどうか確認してください。

関連概念

- 付録 A.3 VSP G1000, G1500 および VSP F1500 ストレージシステム接続時の設定

A.3.2 VSP G1000, G1500 および VSP F1500 ストレージシステム接続時の注意事項

- 外部ストレージシステム側で global storage virtualization の機能を使って、異なる装置製番に仮想化した複数の LDEV に対し、外部ストレージシステムの同じポートを使用して LU パスを定義している場合、これらの LU をローカルストレージシステムの外部ボリュームグループにマッピングすることはできません。仮想装置製番が異なる LDEV の LU パスは、外部ストレージシステムの別々のポートに設定してください。
- 外部ストレージシステム側で global storage virtualization の機能を使って仮想化した LDEV を、ローカルストレージシステムから認識する場合、仮想化された状態の LDEV として認識します。

A.4 VSP G130, G150, G350, G370, G700, G900、VSP F350, F370, F700, F900 および VSP E シリーズのストレージシステム接続時の設定

外部ストレージシステムとして VSP G130, G150, G350, G370, G700, G900、VSP F350, F370, F700, F900 および VSP E シリーズのストレージシステムを接続する場合は、ローカルストレージシステムと接続する VSP G130, G150, G350, G370, G700, G900、VSP F350, F370, F700, F900 および VSP E シリーズのストレージシステムのポートに、ホストモード 2C (Windows Extension) または 0C ((Deprecated) Windows) (※) を設定してください。

注※

ホストモード 2C と 0C に機能的な差異はありません。ホストモード 2C の設定を推奨します。

関連参照

- ・ 付録 A.4.1 VSP G130, G150, G350, G370, G700, G900、VSP F350, F370, F700, F900 および VSP E シリーズのストレージシステム側で回復が必要となるパス障害の例

A.4.1 VSP G130, G150, G350, G370, G700, G900、VSP F350, F370, F700, F900 および VSP E シリーズのストレージシステム側で回復が必要となるパス障害の例

パス状態が正常でない場合、外部ストレージシステム側に要因がある可能性があります。外部ストレージシステム側で、次の表に記載する確認方法の例に従って要因の有無を確認してください。要因があった場合、回復方法の例に従って回復してください。パスの状態が回復できない場合はお問い合わせください。

要因	確認方法と回復方法の例
ボリュームのパス設定を変更した。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームのパスの設定を確認してください。パスの設定が変更されていた場合は、マッピングしたときの設定に戻してください。その後、ローカルストレージシステム側からボリュームの再接続を実施してください。
ボリュームのアクセス属性を変更した。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームのアクセス属性を確認してください。アクセス属性によってボリュームが保護されている場合は、保護を解除してください。その後、ローカルストレージシステム側からボリュームの再接続を実施してください。
ボリュームがデータコピーのペアに設定されている。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームが ShadowImage、TrueCopy、Universal Replicator、または global-active device などのペアに設定されていないかを確認してください。ペアに設定されている場合、ペアの状態によってボリュームが保護されることがあります。ボリュームが保護されている場合は、ペアの状態を変更するか、またはペアを削除してください。
外部ストレージシステムとの接続状況に問題がある。	例えば、次のような要因によって外部パスが閉塞する可能性があります。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ケーブルが正しく接続されていない。 ・ 外部ストレージシステムへ接続しているポートと外部ストレージシステムのポートとで、トポロジの設定が合っていない。 ・ スイッチを経由して接続している場合、スイッチの設定が適切ではない。

要因	確認方法と回復方法の例
	ケーブルが正しく接続されているかを確認し、ポートを正しく設定してください。
LUN セキュリティが有効になっている。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームの LUN セキュリティの状態を確認してください。LUN セキュリティが有効になっている場合は、LUN セキュリティの設定に誤りがないかどうか確認してください。

関連概念

- 付録 A.4 VSP G130, G150, G350, G370, G700, G900、VSP F350, F370, F700, F900 および VSP E シリーズのストレージシステム接続時の設定

A.4.2 Power Saving または Power Saving Plus を使用する VSP G800 接続時の注意事項

Power Saving または Power Saving Plus を使用する VSP G800 は、外部ストレージシステムとして使用できません。

A.4.3 VSP G130, G150, G350, G370, G700, G900、VSP F350, F370, F700, F900 および VSP E シリーズのストレージシステム接続時の注意事項

- 外部ストレージシステム側で global storage virtualization の機能を使って、異なる装置製番に仮想化した複数の LDEV に対し、外部ストレージシステムの同じポートを使用して LU パスを定義している場合、これらの LU をローカルストレージシステムの外部ボリュームグループにマッピングすることはできません。仮想装置製番が異なる LDEV の LU パスは、外部ストレージシステムの別々のポートに設定してください。
- 外部ストレージシステム側で global storage virtualization の機能を使って仮想化した LDEV を、ローカルストレージシステムから認識する場合、仮想化された状態の LDEV として認識します。

A.5 VSP G100, G200, G400, G600, G800 および VSP F400, F600, F800 のストレージシステム接続時の設定

外部ストレージシステムとして VSP G100, G200, G400, G600, G800 および VSP F400, F600, F800 ストレージシステムを接続する場合は、ローカルストレージシステムと接続する VSP G100, G200, G400, G600, G800 および VSP F400, F600, F800 ストレージシステムのポートに、ホストモード 0C ((Deprecated) Windows) または 2C (Windows Extension) を設定してください。

関連参照

- 付録 A.5.1 VSP G100, G200, G400, G600, G800 および VSP F400, F600, F800 のストレージシステム側で回復が必要となるパス障害の例

A.5.1 VSP G100, G200, G400, G600, G800 および VSP F400, F600, F800 のストレージシステム側で回復が必要となるパス障害の例

パス状態が正常でない場合、外部ストレージシステム側に要因がある可能性があります。外部ストレージシステム側で、次の表に記載する確認方法の例に従って要因の有無を確認してください。要

因があった場合、回復方法の例に従って回復してください。パスの状態が回復できない場合はお問い合わせください。

要因	確認方法と回復方法の例
ボリュームのパス設定を変更した。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームのパスの設定を確認してください。パスの設定が変更されていた場合は、マッピングしたときの設定に戻してください。その後、ローカルストレージシステム側からボリュームの再接続を実施してください。
ボリュームのアクセス属性を変更した。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームのアクセス属性を確認してください。アクセス属性によってボリュームが保護されている場合は、保護を解除してください。その後、ローカルストレージシステム側からボリュームの再接続を実施してください。
ボリュームがデータコピーのペアに設定されている。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームが ShadowImage、TrueCopy、Universal Replicator、または global-active device などのペアに設定されていないかを確認してください。ペアに設定されている場合、ペアの状態によってボリュームが保護されることがあります。ボリュームが保護されている場合は、ペアの状態を変更するか、またはペアを削除してください。
外部ストレージシステムとの接続状況に問題がある。	例えば、次のような要因によって外部パスが閉塞する可能性があります。 <ul style="list-style-type: none"> ケーブルが正しく接続されていない。 外部ストレージシステムへ接続しているポートと外部ストレージシステムのポートとで、トポロジの設定が合っていない。 スイッチを経由して接続している場合、スイッチの設定が適切ではない。 ケーブルが正しく接続されているかを確認し、ポートを正しく設定してください。
LUN セキュリティが有効になっている。	ローカルストレージシステムからマッピングしているボリュームの LUN セキュリティの状態を確認してください。LUN セキュリティが有効になっている場合は、LUN セキュリティの設定に誤りがないかどうか確認してください。

関連概念

- 付録 A.5 VSP G100, G200, G400, G600, G800 および VSP F400, F600, F800 のストレージシステム接続時の設定

A.5.2 VSP G100, G200, G400, G600, G800 および VSP F400, F600, F800 接続時の注意事項

- 外部ストレージシステム側で global storage virtualization の機能を使って、異なる装置製番に仮想化した複数の LDEV に対し、外部ストレージシステムの同じポートを使用して LU パスを定義している場合、これらの LU をローカルストレージシステムの外部ボリュームグループにマッピングすることはできません。仮想装置製番が異なる LDEV の LU パスは、外部ストレージシステムの別々のポートに設定してください。
- 外部ストレージシステム側で global storage virtualization の機能を使って仮想化した LDEV を、ローカルストレージシステムから認識する場合、仮想化された状態の LDEV として認識します。

A.6 VSP One SDS Block ストレージシステム接続時の注意事項

- VSP One SDS Block は ALUA 接続だけをサポートしています。ALUA モードを無効に設定しないでください。
VSP One SDS Block のボリュームをマッピングした際の ALUA モードのデフォルト値は有効です。
ALUA モードを無効に設定した場合、VSP One SDS Block 側のポート状態が Active/Non-Optimized である外部パスを使用して I/O が発行されることによって、性能低下が発生するおそれがあります。
- ロードバランスモードはデフォルトの標準ラウンドロビン（推奨値）で使用してください。
ALUA モードを有効、かつロードバランスモードを無効に設定した状態で、VSP One SDS Block のソフトウェア更新などによってノードが再起動されると、元の I/O 実行状態に戻るまでに、1 時間程度かかる場合があります。
- VSP One SDS Block のノード（物理サーバ）数を 8 以下にし、外部パスを VSP One SDS Block の各ノードに均等に定義してください。
VSP One SDS Block では、LU ごとに 1 つのノードのポートだけが Active/Optimize、その他のノードのポートは Active/Non-Optimize に設定されます。
一方、ローカルストレージシステムの外部パスの最大数は LU ごとに 8 です。このため、VSP One SDS Block のノード数が 9 以上の場合、すべて外部パスのポート状態が Non-Optimized に設定される可能性があります。この結果、VSP One SDS Block のノード数が 9 以上の場合、VSP One SDS Block 側のポート状態が Active/Non-Optimized である外部パスを使用して I/O が発行されることによって、性能低下が発生するおそれがあります。
- VSP One SDS Block の外部ボリュームを ShadowImage のセカンダリボリュームとして使用する場合、外部パスの I/O タイムアウト値を 120 秒に設定してください（デフォルトのタイムアウト値は 15 秒です）。もし VSP One SDS Block のノードに障害が発生すると、パスの交替に最大 120 秒程度かかります。
- VSP One SDS Block に iSCSI 接続する場合、VSP One SDS Block のコンピュータノードにローカルストレージシステムの iSCSI イニシエータ名を登録してください。iSCSI イニシエータ名の確認方法については、『RAID Manager コマンドリファレンス』を参照してください。

A.7 HPE EVA ストレージシステム接続時のファームウェアバージョン

EVA ストレージシステムはファームウェアバージョン 4.000 以降だけ接続できます。EVA ストレージシステムを接続する場合は、4.000 以降のバージョンにファームウェアバージョンを交換してください。サポートしている外部ストレージシステムの具体的なモデルについては、お問い合わせください。

関連概念

- [付録 A.7.2 EVA ストレージシステム接続時のボリュームの識別方法（デバイス ID の利用）](#)

関連参照

- [付録 A.7.1 EVA ストレージシステム接続時のシステムオプションパラメータ](#)

A.7.1 EVA ストレージシステム接続時のシステムオプションパラメータ

EVA ストレージシステムを接続する場合は、EVA ストレージシステムのシステムオプションパラメータを次の表に従って設定してください。次の表に記載されていないシステムオプションパラメータについては、EVA ストレージシステムのマニュアルを参照し、接続構成に合わせて適切に設定してください。

設定項目		設定内容
Add a Host	Host OS	Windows

また、EVA ストレージシステムと接続するローカルストレージシステムの各ポートの WWN を、EVA ストレージシステムに登録する必要があります。WWN の登録方法については、EVA ストレージシステムのマニュアルを参照してください。

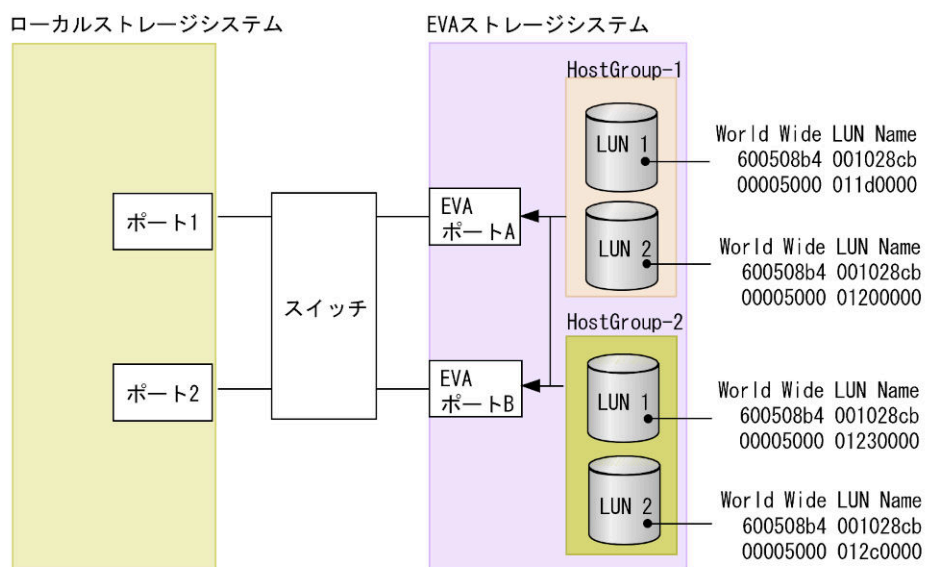
関連概念

- 付録 A.7 HPE EVA ストレージシステム接続時のファームウェアバージョン

A.7.2 EVA ストレージシステム接続時のボリュームの識別方法（デバイス ID の利用）

次の図のような構成で、EVA ポート A を示す WWN を指定してボリュームを検索すると、HostGroup-1 の LUN 1 と LUN 2、および HostGroup-2 の LUN 1 と LUN 2 がそれぞれ検出されます。この場合、LUN だけではこれらのボリュームを識別できません。

ボリュームが LUN だけでは識別できない構成の例を次の図に示します。



上の図のような構成の場合には、デバイス識別子を参照してボリュームを識別できます。デバイス識別子の最初から 32 文字は、EVA ストレージシステムから参照できる World Wide LUN Name を表示しています。この World Wide LUN Name によって、ボリュームを識別できます。

デバイス識別子は以下の方法で確認できます。

- RAID Manager の場合：以下のコマンドを使用します。
 - raidcom get ldev : 出力項目の「E_VOLID」で確認できます。
 - raidcom discover lun : 出力項目の「E_VOL_ID_C」を ASCII から 16 進数に変換することで確認できます。
- 詳細 API の場合：以下のコマンドを使用します。
 - GET <ベース URL >/v1/objects/ldevs : 出力項目の「externalVolumeId」で確認できます。

-GET <ベース URL >/v1/objects/external-storage-luns : 出力項目の「externalVolumeInfo」のデバイス識別情報を ASCII から 16 進数に変換することで確認できます。

関連概念

- ・ [付録 A.7 HPE EVA ストレージシステム接続時のファームウェアバージョン](#)

A.8 HPE Nimble Storage/Alletra 接続時の注意事項

HPE Nimble Storage/Alletra は ALUA をサポートしていますが、ローカルストレージシステムは、これを“Active/Standby”として扱います。また、ローカルストレージシステムは、Standby パスを閉塞パスとして扱います。一部のパスが閉塞していても、Active なコントローラに接続されているパスが正常であれば、問題ありません。サポートしている外部ストレージシステムの具体的なモデルについては、お問い合わせください。

A.9 HPE Primera A630/A650/A670/C630/C650/C670 接続時の注意事項

関連概念

- ・ [付録 A.9.2 HPE Primera A630/A650/A670/C630/C650/C670 接続時のその他の注意事項](#)

関連参照

- ・ [付録 A.9.1 HPE Primera A630/A650/A670/C630/C650/C670 接続時のシステムオプションパラメータ](#)

A.9.1 HPE Primera A630/A650/A670/C630/C650/C670 接続時のシステムオプションパラメータ

HPE Primera A630/A650/A670/C630/C650/C670 を接続する場合は、HPE Primera A630/A650/A670/C630/C650/C670 のシステムオプションパラメータを次の表に従って設定してください。次の表に記載されていないシステムオプションパラメータについては、HPE Primera A630/A650/A670/C630/C650/C670 のマニュアルを参照し、接続構成に合わせて適切に設定してください。

設定項目	設定内容
host mode	Generic-ALUA (Generic または Generic-legacy も可)

関連概念

- ・ [付録 A.9 HPE Primera A630/A650/A670/C630/C650/C670 接続時の注意事項](#)

A.9.2 HPE Primera A630/A650/A670/C630/C650/C670 接続時のその他の注意事項

HPE Primera A630/A650/A670/C630/C650/C670 で、Dynamic optimization または Adaptive optimization が適用されたボリュームを本ストレージシステムの外部ボリュームとして使用しないでください。これらのボリュームを使用した場合、使用した外部ボリュームの性能が低下するおそれがあり、動作を保証できません。

関連概念

- 付録 A.9 HPE Primera A630/A650/A670/C630/C650/C670 接続時の注意事項

A.10 Oracle (旧 SUN) StorEdge 6120/6320 ストレージシステム接続時の設定

Sun StorEdge 6120/6320 ストレージシステム接続時の設定についての詳細は、各関連項目を参照してください。

関連概念

- 付録 A.10.1 Oracle (旧 SUN) StorEdge 6120/6320 ストレージシステム接続時のシステムオプションモード

関連参照

- 付録 A.10.2 Oracle (旧 SUN) StorEdge 6120/6320 ストレージシステム接続時のシステムオプションパラメータ

A.10.1 Oracle (旧 SUN) StorEdge 6120/6320 ストレージシステム接続時のシステムオプションモード

Sun StorEdge 6120/6320 を接続する場合は、ローカルストレージシステムのシステムオプションモード 725 を設定してください。システムオプションモード 725 を設定しなかった場合、外部ストレージシステムのファームアップデートなど、コントローラの再起動を伴う保守作業のときに外部ボリュームが閉塞することがあります。システムオプションモード 725 の設定については、お問い合わせください。

関連概念

- 付録 A.10 Oracle (旧 SUN) StorEdge 6120/6320 ストレージシステム接続時の設定

A.10.2 Oracle (旧 SUN) StorEdge 6120/6320 ストレージシステム接続時のシステムオプションパラメータ

Sun StorEdge 6120/6320 を接続する場合は、Sun StorEdge 6120/6320 のシステムオプションパラメータを次の表に従って設定してください。次の表に記載されていないシステムオプションパラメータについては、Sun StorEdge 6120/6320 のマニュアルを参照し、接続構成に合わせて適切に設定してください。

設定項目	設定内容
port host	SUN

関連概念

- 付録 A.10 Oracle (旧 SUN) StorEdge 6120/6320 ストレージシステム接続時の設定

A.11 Oracle（旧 SUN） StorageTek V2X2 ストレージシステム接続時の注意事項

Sun StorageTek V2X2 を接続する場合は、外部ストレージシステムのボリュームをマッピングするときに設定する外部パスは、1 本だけにしてください。また、マッピング後に、冗長パスを追加しないでください。

A.12 Dell EMC VNX シリーズ接続時の設定

Dell EMC VNX シリーズ接続時の設定についての詳細は、各関連項目を参照してください。サポートしている外部ストレージシステムの具体的なモデルについては、お問い合わせください。

関連概念

- [付録 A.12.3 Dell EMC VNX シリーズ接続時のその他の注意事項](#)

関連参照

- [付録 A.12.1 Dell EMC VNX シリーズ接続時のシステムオプションモード](#)
- [付録 A.12.2 Dell EMC VNX シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ](#)

A.12.1 Dell EMC VNX シリーズ接続時のシステムオプションモード

Dell EMC VNX シリーズを接続する場合は、ローカルストレージシステムのシステムオプションモード 725 を設定してください。システムオプションモード 725 を設定しなかった場合、外部ストレージシステムのファームアップデートなど、コントローラの再起動を伴う保守作業のときに外部ボリュームが閉塞することがあります。システムオプションモード 725 の設定については、お問い合わせください。

外部ストレージシステムにアクセスできない状態になると、外部ボリュームが閉塞することがあります。閉塞している外部ボリュームを正常な状態に回復するには、手動回復と自動回復のどちらかを選択できます。外部ストレージシステムが不安定な状態（障害状態、障害回復中など）のときに、閉塞している外部ボリュームを正常状態に回復させると、外部ボリュームがすぐに閉塞状態に遷移することがあるので、自動回復を抑制しています。Dell EMC VNX シリーズを接続している場合、ローカルストレージシステムのシステムオプションモード 1021 を設定することで、閉塞している外部ボリュームが自動回復します。システムオプションモード 1021 の設定については、お問い合わせください。

関連概念

- [付録 A.12 Dell EMC VNX シリーズ接続時の設定](#)

A.12.2 Dell EMC VNX シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ

Dell EMC VNX シリーズを接続する場合は、Dell EMC VNX シリーズのシステムオプションパラメータを次の表に従って設定してください。次の表に記載されていないシステムオプションパラメータについては、Dell EMC VNX シリーズのマニュアルを参照し、接続構成に合わせて適切に設定してください。

設定項目	設定内容
Initiator Type	CLARiiON Open

設定項目	設定内容
Failover Mode	2
ArrayCommPath	Disabled

関連概念

- [付録 A.12 Dell EMC VNX シリーズ接続時の設定](#)

A.12.3 Dell EMC VNX シリーズ接続時のその他の注意事項

- Dell EMC VNX シリーズの RAID-0 および individual disk unit (JBOD) で作成されているボリュームは、未サポートです。
- Dell EMC VNX シリーズ側で、各ポートに LUN0 を定義してください。LUN0 を定義しなかった場合、ローカルストレージシステム側で外部ストレージシステムのシリアル番号が表示されない可能性があります。

関連概念

- [付録 A.12 Dell EMC VNX シリーズ接続時の設定](#)

A.13 Dell EMC Symmetrix シリーズ/DMX シリーズ/VMAX シリーズ/PowerMax シリーズ接続時の設定と注意事項

Universal Volume Manager では、Dell EMC Symmetrix シリーズ、DMX シリーズ、VMAX シリーズおよび PowerMax シリーズをすべて同じシリーズとして扱います。Dell EMC Symmetrix シリーズなどを接続する際の、外部ストレージ側の設定の詳細は、各関連項目を参照してください。サポートしている外部ストレージシステムの具体的なモデルについては、お問い合わせください。

関連概念

- [付録 A.13.2 Dell EMC Symmetrix シリーズ/DMX シリーズ/VMAX シリーズ/PowerMax シリーズの同一ポート配下に装置製番が異なるボリュームが混在する場合の注意事項](#)

関連参照

- [付録 A.13.1 Dell EMC Symmetrix シリーズ/DMX シリーズ/VMAX シリーズ/PowerMax シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ](#)

A.13.1 Dell EMC Symmetrix シリーズ/DMX シリーズ/VMAX シリーズ/PowerMax シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ

Dell EMC Symmetrix シリーズなどを接続する場合は、Dell EMC Symmetrix シリーズなどのシステムオプションパラメータを次の表に従って設定してください。次の表に記載されていないシステムオプションパラメータについては、Dell EMC Symmetrix シリーズなど各ストレージ製品のマニュアルを参照し、接続構成に合わせて適切に設定してください。

設定項目	設定内容
SC3 flag または SCSI3 flag	有効
SPC2 flag または SPC2 Protocol Version flag	無効

A.13.2 Dell EMC Symmetrix シリーズ/DMX シリーズ/VMAX シリーズ/ PowerMax シリーズの同一ポート配下に装置製番が異なるボリュームが混 在する場合の注意事項

Dell EMC Symmetrix シリーズなどの外部ストレージ側の同一ポート配下に、装置製番が異なるボリュームが、LU パス定義されている場合、これらのボリュームをローカルストレージシステムからマッピングできません。

Dell EMC Symmetrix シリーズなどの外部ストレージ側の同一ポート配下の装置製番が異なるボリュームをマッピングする場合、次に示すどちらかの方法で同一ポート配下のボリュームの装置製番を一致させてください。Dell EMC Symmetrix シリーズなどの操作方法については、Dell EMC Symmetrix シリーズなど各ストレージ製品のマニュアルを参照してください。

- Dell EMC Symmetrix シリーズなどの外部ストレージ側で、ボリュームの仮想化を解除する。
- Dell EMC Symmetrix シリーズなどの外部ストレージ側で、装置製番ごとに LU パスを定義するポートを分ける。

前述のどちらの方法も実施せずに、これらのボリュームをローカルストレージシステムからマッピングした場合、次のどちらかの現象が発生する可能性があります。

- ローカルストレージシステムのポートに、新規にマッピングするケース：
Dell EMC Symmetrix シリーズなどの外部ストレージ側のポートに定義されている先頭ボリュームとは異なる装置製番情報のボリュームをマッピングした場合、先頭ボリュームとは異なる装置製番情報のボリュームをマッピングしたボリュームが装置製番不一致によって閉塞します。
- ローカルストレージシステムのポートに、マッピングしたボリュームがすでに存在するケース：
マッピング済みのボリュームと同じ Dell EMC Symmetrix シリーズなどの外部ストレージ側のポートに定義された、マッピング済みのボリュームとは異なる装置製番情報のボリュームをマッピングした場合、後からマッピングしたボリュームが装置製番不一致によって閉塞します。

A.13.3 PowerMax8000 接続時のシステムオプションモード

PowerMax8000 を接続する場合、接続する前に、ローカルストレージシステムのシステムオプションモード 745 を設定してください。システムオプションモード 745 を設定しなかった場合、外部ストレージシステムのシリアル番号が正しく表示されないことがあります。

A.14 IBM DS3000/DS4000/DS5000 シリーズのシステムオプションパラメータ

IBM DS3000/DS4000/DS5000 シリーズを接続する場合は、IBM DS3000/DS4000/DS5000 シリーズのシステムオプションパラメータを次の表に従って設定してください。次の表に記載されていないシステムオプションパラメータについては、IBM DS3000/DS4000/DS5000 シリーズのマニュアルを参照し、接続構成に合わせて適切に設定してください。サポートしている外部ストレージシステムの具体的なモデルについては、お問い合わせください。

設定項目	設定内容
host type	DS3000/DS4000/DS5000 シリーズ側の異なるクラスタに冗長バスを接続する場合：Linux

A.15 IBM SVC シリーズのシステムオプションパラメータ

IBM SVC シリーズを接続する場合は、IBM SVC シリーズのシステムオプションパラメータを次の表に従って設定してください。次の表に記載されていないシステムオプションパラメータについては、IBM SVC シリーズのマニュアルを参照し、接続構成に合わせて適切に設定してください。サポートしている外部ストレージシステムの具体的なモデルについては、お問い合わせください。

設定項目	設定内容
host type	Generic

A.16 IBM V840/V3000/V5000/V7000/V9000 接続時の設定と注意事項

IBM V840/V3000/V5000/V7000/V9000 接続時の設定についての詳細は、各関連項目を参照してください。サポートしている外部ストレージシステムの具体的なモデルについては、お問い合わせください。

関連概念

- ・ [付録 A.16.2 IBM V840/V3000/V5000/V7000/V9000 接続時のその他の注意事項](#)

関連参照

- ・ [付録 A.16.1 IBM V840/V3000/V5000/V7000/V9000 接続時のシステムオプションパラメータ](#)

A.16.1 IBM V840/V3000/V5000/V7000/V9000 接続時のシステムオプションパラメータ

IBM V840/V3000/V5000/V7000/V9000 を接続する場合は、IBM V840/V3000/V5000/V7000/V9000 のシステムオプションパラメータを次の表に従って設定してください。次の表に記載されていないシステムオプションパラメータについては、IBM V840/V3000/V5000/V7000/V9000 のマニュアルを参照し、接続構成に合わせて適切に設定してください。

設定項目	設定内容
host type	Generic

関連概念

- ・ [付録 A.16 IBM V840/V3000/V5000/V7000/V9000 接続時の設定と注意事項](#)

A.16.2 IBM V840/V3000/V5000/V7000/V9000 接続時のその他の注意事項

管理ツール上では、IBM V840/V3000/V5000/V7000/V9000 シリーズの装置名称は「SVC」と表示されます。

関連概念

- ・ [付録 A.16 IBM V840/V3000/V5000/V7000/V9000 接続時の設定と注意事項](#)

A.17 IBM XIV シリーズ接続時のシリアル番号表示の差異

IBM XIV シリーズを接続する場合は、IBM XIV シリーズ側の装置およびデバイスのシリアル番号の表示が、次の表に示すとおり管理ツール上の表示と形式が異なることに注意してください。サポートしている外部ストレージシステムの具体的なモデルについては、お問い合わせください。

ストレージシステムの管理ツール上の表示		IBM XIV シリーズ画面上の表示	
項目	形式	項目	形式
シリアル番号の上位 2 桁	10 進数	(System) Serial number の上位 2 桁	10 進数
シリアル番号の下位 5 桁	16 進数	(System) Serial number の下位 5 桁	10 進数
ボリュームプロパティ	16 進数	Device serial number	10 進数

A.18 Fujitsu FibreCAT CX シリーズ接続時の設定と注意事項

Fujitsu FibreCAT CX シリーズ接続時の設定についての詳細は、各関連項目を参照してください。サポートしている外部ストレージシステムの具体的なモデルについては、お問い合わせください。

関連概念

- 付録 A.18.3 Fujitsu FibreCAT CX シリーズ接続時のその他の注意事項

関連参照

- 付録 A.18.1 Fujitsu FibreCAT CX シリーズ接続時のシステムオプションモード
- 付録 A.18.2 Fujitsu FibreCAT CX シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ

A.18.1 Fujitsu FibreCAT CX シリーズ接続時のシステムオプションモード

Fujitsu FibreCAT CX シリーズを接続する場合は、ローカルストレージシステムのシステムオプションモード 725 を設定してください。システムオプションモード 725 を設定しなかった場合、外部ストレージシステムのファームアップデートなど、コントローラの再起動を伴う保守作業のときに外部ボリュームが閉塞することがあります。システムオプションモード 725 の設定については、お問い合わせください。

関連概念

- 付録 A.18 Fujitsu FibreCAT CX シリーズ接続時の設定と注意事項

A.18.2 Fujitsu FibreCAT CX シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ

Fujitsu FibreCAT CX シリーズを接続する場合は、Fujitsu FibreCAT CX シリーズのシステムオプションパラメータを次の表に従って設定してください。次の表に記載されていないシステムオプションパラメータについては、Fujitsu FibreCAT CX シリーズのマニュアルを参照し、接続構成に合わせて適切に設定してください。

設定項目	設定内容
Initiator Type	CLARiON Open

設定項目	設定内容
Failover Mode	2

関連概念

- ・ [付録 A.18 Fujitsu FibreCAT CX シリーズ接続時の設定と注意事項](#)

A.18.3 Fujitsu FibreCAT CX シリーズ接続時のその他の注意事項

Fujitsu FibreCAT CX シリーズの RAID-0 および individual disk unit (JBOD) で作成されているボリュームは、未サポートです。

関連概念

- ・ [付録 A.18 Fujitsu FibreCAT CX シリーズ接続時の設定と注意事項](#)

A.19 Fujitsu ETERNUS DX60 S2/DX80 S2/DX90 S2 または Fujitsu ETERNUS DX400 S2 シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ設定

Fujitsu ETERNUS DX60 S2/DX80 S2/DX90 S2 または Fujitsu ETERNUS DX400 S2 シリーズを接続する場合は、Fujitsu ETERNUS DX60 S2/DX80 S2/DX90 S2 または Fujitsu ETERNUS DX400 S2 シリーズのシステムオプションパラメータを次の表に従って設定してください。サポートしている外部ストレージシステムの具体的なモデルについては、お問い合わせください。

次の表に記載されていないシステムオプションパラメータについては、Fujitsu ETERNUS DX60 S2/DX80 S2/DX90 S2 または Fujitsu ETERNUS DX400 S2 シリーズのマニュアルを参照し、接続構成に合わせて適切に設定してください。

設定項目	設定内容
ホストレスポンス設定画面上の Inquiry VPD ID Type	Type1 + Type3
ホストレスポンス設定画面上の過負荷時応答ステータス	Busy

A.20 Fujitsu ETERNUS DX8900 S4/DX8900 S3/DX8700 S3/DX60 S5/DX100 S5/DX200 S5/DX500 S5/DX600 S5/DX900 S5/AF150 S3/AF250 S3/AF650 S3 接続時のシステムオプションパラメータ設定

Fujitsu ETERNUS DX8900 S4/DX8900 S3/DX8700 S3/DX60 S5/DX100 S5/DX200 S5/DX500 S5/DX600 S5/DX900 S5/AF150 S3/AF250 S3/AF650 S3 を接続する場合は、次の表に示すシステムオプションパラメータに従って設定してください。

次の表に記載されていないシステムオプションパラメータについては、Fujitsu ETERNUS DX8900 S4/DX8900 S3/DX8700 S3/DX60 S5/DX100 S5/DX200 S5/DX500 S5/DX600 S5/DX900 S5/AF150 S3/AF250 S3/AF650 S3 のマニュアルを参照し、接続構成に合わせて適切に設定してください。

設定項目	設定内容
ホストレスポンス設定	Default

A.21 HPE（旧 SGI） IS4600 シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ

SGI IS4600 シリーズを接続する場合は、SGI IS4600 シリーズのシステムオプションパラメータを次の表に従って設定してください。次の表に記載されていないシステムオプションパラメータについては、SGI IS4600 シリーズのマニュアルを参照し、接続構成に合わせて適切に設定してください。サポートしている外部ストレージシステムの具体的なモデルについては、お問い合わせください。

設定項目	設定内容
host type	SGI IS4600 側の異なるクラスタに冗長パスを接続する場合：Linux

A.22 3PAR T400、T800、F400、V800、V400、StoreServ シリーズ接続時の注意事項

関連概念

- ・ [付録 A.22.2 3PAR T400、T800、F400、V800、V400、StoreServ シリーズ接続時のその他の注意事項](#)

関連参照

- ・ [付録 A.22.1 3PAR T400、T800、F400、V800、V400、StoreServ シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ](#)

A.22.1 3PAR T400、T800、F400、V800、V400、StoreServ シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ

3PAR T400、T800、F400、V800、V400、StoreServ シリーズを接続する場合は、3PAR T400、T800、F400、V800、V400、StoreServ シリーズのシステムオプションパラメータを次の表に従って設定してください。次の表に記載されていないシステムオプションパラメータについては、3PAR T400、T800、F400、V800、V400、StoreServ シリーズのマニュアルを参照し、接続構成に合わせて適切に設定してください。サポートしている外部ストレージシステムの具体的なモデルについては、お問い合わせください。

3PAR T400、T800、F400、V800、V400、StoreServ シリーズ接続時のシステムオプションパラメータ

設定項目	設定内容
host mode	Generic-ALUA

3PAR 9450 接続時のシステムオプションパラメータ

設定項目	設定内容
Host OS : OE Linux UEK 7.x	Persona : Generic-ALUA

関連概念

- 付録 A.22 3PAR T400、T800、F400、V800、V400、StoreServ シリーズ接続時の注意事項

A.22.2 3PAR T400、T800、F400、V800、V400、StoreServ シリーズ接続時のその他の注意事項

3PAR T800、F400、V800、V400、StoreServ シリーズで、Dynamic optimization または Adaptive optimization が適用されたボリュームを本ストレージシステムの外部ボリュームとして使用しないでください。これらのボリュームを使用した場合、使用した外部ボリュームの性能が低下するおそれがあり、動作を保証できません。

関連概念

- 付録 A.22 3PAR T400、T800、F400、V800、V400、StoreServ シリーズ接続時の注意事項

A.23 Seagate Exos X シリーズ接続時の設定と注意事項

Seagate Exos X シリーズ接続時の設定についての詳細は、各関連項目を参照してください。サポートしている外部ストレージシステムの具体的なモデルについては、お問い合わせください。

関連参照

- 付録 A.23.1 Exos X シリーズ側でホストにボリュームをマッピングする際の注意事項
- 付録 A.23.2 Exos X シリーズ側のデフォルトで定義された LUN0 に関する注意事項

A.23.1 Exos X シリーズ側でホストにボリュームをマッピングする際の注意事項

- ローカルストレージシステムと Exos X シリーズを結線しただけでは、Exos X シリーズ側のイニシエーター一覧画面に、ローカルストレージシステムのポートが表示されない可能性があります。その場合、以下の操作を実施してください。

1. iSCSI 接続の場合：

ローカルストレージシステム側で、外部ストレージシステム側ポートの iSCSI 名の登録 (RAID Manager の場合は `raidcom add external_iscsi_name` コマンド) を実行し、Exos X シリーズの iSCSI ターゲットをローカルストレージシステムのポートに登録します。

iSCSI 接続以外の場合：

手順 2 へ進んでください。

2. ローカルストレージシステム側で、外部ストレージシステムのポート一覧の取得 (RAID Manager の場合は `raidcom discover external_storage` コマンド) を実行します。

3. Exos X 側で、ホストを作成します。ホスト作成ウィザードでイニシエータを選択する際に、イニシエーター一覧画面からローカルストレージシステムのポートを選択します (手順 2 によって、イニシエーター一覧画面にローカルストレージシステムのポートが表示される)。

4. Exos X 側で、手順 3 で作成したホストにボリュームをマッピングします。

- Exos X 側で、ホスト（ローカルストレージシステム）にボリュームをマッピングすると、ローカルストレージシステムが Exos X シリーズのボリュームを認識できるようになります。
- Exos X シリーズの具体的な操作手順については、Exos X シリーズのマニュアルを参照してください。

A.23.2 Exos X シリーズ側のデフォルトで定義された LUN0 に関する注意事項

- Exos X シリーズの各ポートには、デフォルトで LUN0 が定義されていますが、外部ボリュームとして使用できません。デフォルトの LUN0 が定義された状態でも、LUN1 以降の LU は、外部ボリュームとして問題なく使用できます。
- Exos X シリーズ側で LUN0 にボリュームを割り当てると、LUN0 以外の LU と同様に外部ボリュームとして使用できるようになります。
- Exos X シリーズの具体的な操作手順については、Exos X シリーズのマニュアルを参照してください。

A.24 日立製品以外のストレージシステム接続時の設定

外部ストレージシステムとして日立製品以外のストレージシステムを接続する場合、通常、そのストレージシステムのポートは Windows ホストに接続される Target ポートとして設定する必要があります。また、外部ストレージシステムに、ローカルストレージシステムからのアクセスを禁止する設定が存在することがあります。そのような場合は、ローカルストレージシステムからのアクセスを許可するように設定する必要があります。設定するための技術的な詳細については、必要に応じてサードパーティーベンダにお問い合わせください。

メインフレームシステムで必要な外部ストレージシステムのボリュームの容量

メインフレームシステムで外部ボリュームを使用する場合、外部ストレージシステムのボリュームに必要な容量はエミュレーションタイプによって異なります。ここでは、エミュレーションタイプごとに必要となる、外部ストレージシステムのボリュームの容量の考え方について説明します。

- B.1 メインフレームシステムにおける外部ストレージシステムのボリュームに必要な容量の考え方

- B.2 メインフレームシステム用のエミュレーションタイプごとの容量一覧

B.1 メインフレームシステムにおける外部ストレージシステムのボリュームに必要な容量の考え方

メインフレームシステムにおいて LDEV に必要な容量は、実際にユーザデータを格納するデータ領域の容量と制御情報を格納する制御情報領域の容量の合計になります。データ領域の容量（基本データ領域容量と呼びます）と制御情報領域の容量（制御情報領域容量と呼びます）は、エミュレーションタイプごとに決まっています。また、Custom-sized Volume (CV) のデータ領域容量の最小値（最小データ領域容量と呼びます）も、エミュレーションタイプごとに決まっています。

それぞれのエミュレーションタイプに最小限必要な LDEV の容量（LDEV 最小容量）は、次の計算式を使って算出できます。

LDEV 最小容量 = 最小データ領域容量 + 制御情報領域容量

それぞれのエミュレーションタイプの LDEV 基本容量は、次の計算式を使って算出できます。

LDEV 基本容量 = 基本データ領域容量 + 制御情報領域容量

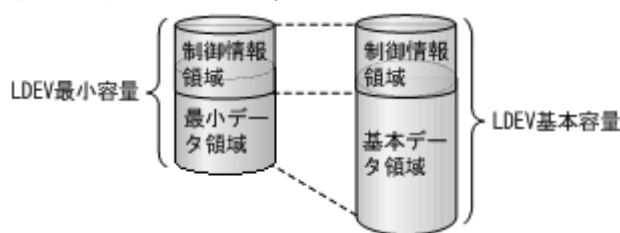
3390-V を除く、メインフレームシステム用ボリュームの場合は、さらに拡張制御情報領域および補正領域の容量が必要となります。

外部ストレージシステムのボリュームの容量がエミュレーションタイプの LDEV 最小容量よりも小さい場合は、そのエミュレーションタイプは指定できません。

外部ストレージシステムのボリュームの容量がエミュレーションタイプの LDEV 基本容量より小さい場合は、マッピング時に外部ボリュームグループに作成できる最大容量の CV を 1 個作成できます。外部ストレージシステムのボリュームの容量がエミュレーションタイプの LDEV 基本容量より大きい場合は、マッピング時に外部ボリュームグループに基本容量の LDEV を複数個作成できます。

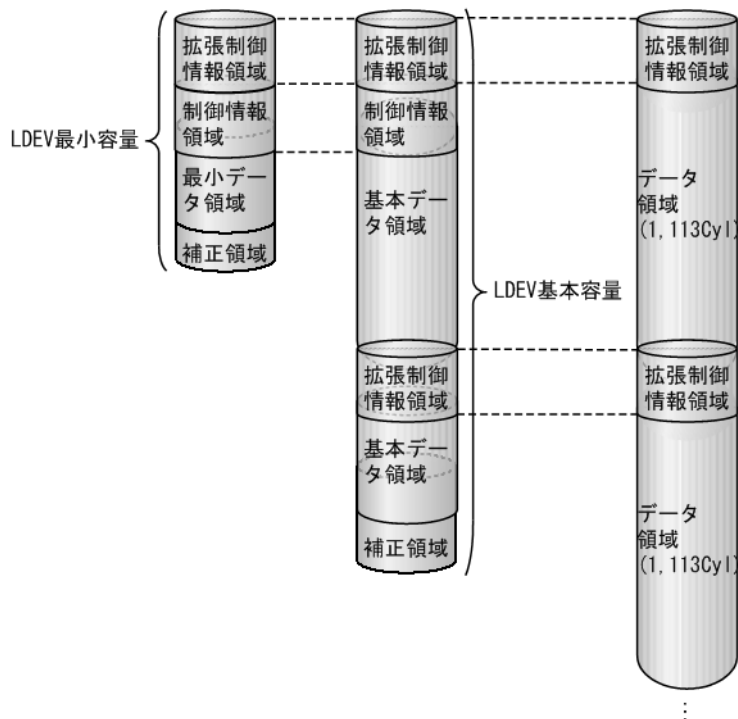
また、VLL 機能を使用することで、マッピング後に外部ボリュームグループに最大 2,048 個の CV を作成できます。

LDEV 最小容量、LDEV 基本容量、最小データ領域容量、基本データ領域容量、および制御情報領域容量の関係を示します。



3390-V を除く、メインフレームシステム用ボリュームの場合

3390-V を除く、メインフレームシステム用ボリュームの場合、データ領域（最小データ領域または基本データ領域）と制御情報領域の合計に対して 1,113Cyl(1,936,620block)ごとに拡張制御情報領域が 7Cyl(12,180block)必要となります。さらに、LDEV 容量全体が 77,952block で割り切れるように補正領域が必要となります。



LDEVに必要な容量は、次の計算式を使って算出できます。なお、「↑(計算式)↑」は、()に囲まれた計算式の答えを小数点第一位で切り上げることを意味します。

3390-V 以外の計算式

LDEV 最小容量 (単位 : block) = ↑ ({ ↑ ((最小データ領域容量 + 制御情報領域容量) ÷ 1,936,620) ↑ × 12,180 + (最小データ領域容量 + 制御情報領域容量) } ÷ 77,952) ↑ × 77,952

LDEV 基本容量 (単位 : block) = ↑ ({ ↑ ((基本データ領域容量 + 制御情報領域容量) ÷ 1,936,620) ↑ × 12,180 + (基本データ領域容量 + 制御情報領域容量) } ÷ 77,952) ↑ × 77,952

3390-V の計算式

LDEV 最小容量 (単位 : block) = ↑ (最小データ領域容量) ÷ 77,952 ↑ × 77,952

LDEV 基本容量 (単位 : block) = ↑ (基本データ領域容量) ÷ 77,952 ↑ × 77,952

エミュレーションタイプごとの、LDEV 最小容量および LDEV 基本容量を次の表に示します。

エミュレーションタイプ	LDEV 最小容量 (block)	LDEV 基本容量 (block)
3380-3	155,904	5,923,452
6586-G	155,904	3,140,015
6586-J	155,904	1,570,008
6586-K	155,904	4,710,022
3390-1	155,904	2,026,752
3390-2	155,904	3,975,552
3390-3	155,904	5,924,352
3390-9	155,904	17,617,152
3390-L	155,904	57,450,624

エミュレーションタイプ	LDEV 最小容量 (block)	LDEV 基本容量 (block)
3390-M	233,856	114,823,296
3390-A	1,948,800	459,916,800
3390-V	155,904	1,944,902,400
6588-1	155,904	2,026,752
6588-3	155,904	5,923,452
6588-9	155,904	17,617,152
6588-L	155,904	57,450,624
6588-M	155,904	114,823,296

B.2 メインフレームシステム用のエミュレーションタイプごとの容量一覧

エミュレーションタイプごとに決められている LDEV 容量を、ブロック単位およびシリンダ単位で示します。

この節のシリンダ数は、次の計算式で換算して求めています。

$$1\text{Cyl}=1,740\text{block}$$

次に、エミュレーションタイプごとの最小データ領域容量、基本データ領域容量、および制御情報領域容量を示します。なお、メインフレームシステム用のエミュレーションタイプの場合、外部ストレージシステムのボリュームをマッピングするときに作成できる LDEV 容量はシリンダに換算して整数値となる容量です。

メインフレームシステム用ボリュームのエミュレーションタイプごとの LDEV 容量を次に示します。

エミュレーションタイプ	最小データ領域容量		基本データ領域容量		制御情報領域容量	
	(block)	(Cyl)	(block)	(Cyl)	(block)	(Cyl)
3380-3	87,000	50	5,809,860	3,339	12,180	7
3380-A*	1,936,620	1,113	5,809,860	3,339	12,180	7
6586-G	87,000	50	3,079,800	1,770	8,700	5
6586-J	87,000	50	1,539,900	885	6,960	4
6586-K	87,000	50	4,619,700	2,655	12,180	7
6586-A	87,000	50	1,539,900	885	6,960	4
	1,541,640	886	3,079,800	1,770	8,700	5
	3,081,540	1,771	4,619,700	2,655	12,180	7
3390-1	87,000	50	1,936,620	1,113	8,700	5
3390-2	87,000	50	3,873,240	2,226	10,440	6
3390-3	87,000	50	5,809,860	3,339	10,440	6
3390-9	87,000	50	17,429,580	10,017	43,500	25
3390-L	87,000	50	57,002,400	32,760	40,020	23

エミュレーションタイプ	最小データ領域容量		基本データ領域容量		制御情報領域容量	
	(block)	(Cyl)	(block)	(Cyl)	(block)	(Cyl)
3390-M	87,000	50	114,004,800	65,520	92,220	53
3390-A*	1,936,620	1,113	457,042,320	262,668	0	0
3390-V	87,000	50	1,944,902,400	1,117,760	0	0
6588-1	87,000	50	1,936,620	1,113	8,700	5
6588-3	87,000	50	5,978,640	3,436	27,840	16
6588-9	87,000	50	17,429,580	10,017	43,500	25
6588-L	87,000	50	57,002,400	32,760	40,020	23
6588-M	87,000	50	114,004,800	65,520	92,220	53
6588-A	87,000	50	5,978,640	3,436	27,840	16
	5,980,380	3,437	17,429,580	10,017	43,500	25
	17,431,320	10,018	57,002,400	32,760	40,020	23
	57,004,140	32,761	114,004,800	65,520	92,220	53

注※

3380-A および 3390-A は、1,113Cyl ごとに制御情報領域が必要になります。

中間ボリュームのエミュレーションタイプごとの LDEV 容量を次に示します。

エミュレーションタイプ	最小データ領域容量		基本データ領域容量		制御情報領域容量	
	(block)	(Cyl)	(block)	(Cyl)	(block)	(Cyl)
3380-3A	87,000	50	5,809,860	3,339	12,180	7
3380-3B	87,000	50	5,809,860	3,339	12,180	7
3380-3C	87,000	50	5,809,860	3,339	12,180	7
6586-KA	87,000	50	4,619,700	2,655	12,180	7
6586-KB	87,000	50	4,619,700	2,655	12,180	7
6586-KC	87,000	50	4,619,700	2,655	12,180	7
3390-3A	87,000	50	5,809,860	3,339	10,440	6
3390-3B	87,000	50	5,809,860	3,339	10,440	6
3390-3C	87,000	50	5,809,860	3,339	10,440	6
3390-9A	87,000	50	17,429,580	10,017	43,500	25
3390-9B	87,000	50	17,429,580	10,017	43,500	25
3390-9C	87,000	50	17,429,580	10,017	43,500	25
3390-LA	87,000	50	57,002,400	32,760	40,020	23
3390-LB	87,000	50	57,002,400	32,760	40,020	23
3390-LC	87,000	50	57,002,400	32,760	40,020	23
3390-MA	87,000	50	114,004,800	65,520	92,220	53
3390-MB	87,000	50	114,004,800	65,520	92,220	53
3390-MC	87,000	50	114,004,800	65,520	92,220	53
6588-3A	87,000	50	5,809,860	3,339	10,440	6

エミュレーションタイプ	最小データ領域容量		基本データ領域容量		制御情報領域容量	
	(block)	(Cyl)	(block)	(Cyl)	(block)	(Cyl)
6588-3B	87,000	50	5,809,860	3,339	10,440	6
6588-3C	87,000	50	5,809,860	3,339	10,440	6
6588-9A	87,000	50	17,429,580	10,017	43,500	25
6588-9B	87,000	50	17,429,580	10,017	43,500	25
6588-9C	87,000	50	17,429,580	10,017	43,500	25
6588-LA	87,000	50	57,002,400	32,760	40,020	23
6588-LB	87,000	50	57,002,400	32,760	40,020	23
6588-LC	87,000	50	57,002,400	32,760	40,020	23
6588-MA	87,000	50	114,004,800	65,520	92,220	53
6588-MB	87,000	50	114,004,800	65,520	92,220	53
6588-MC	87,000	50	114,004,800	65,520	92,220	53

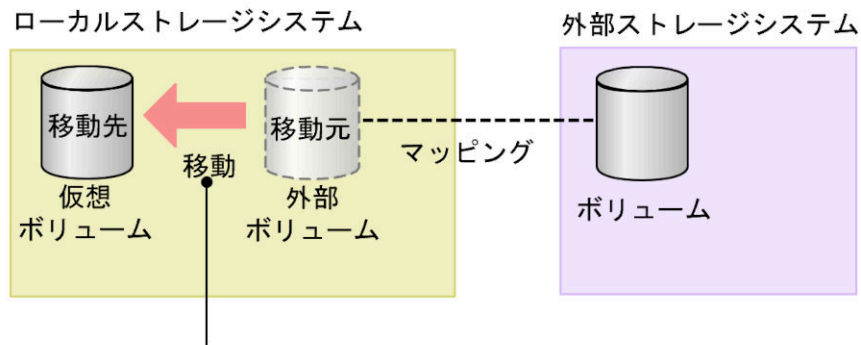
他のプログラムプロダクトとの外部ボリュームの運用例

次に示すプログラムプロダクトについて、外部ボリュームを運用する例を示します。

- C.1 Universal Volume Manager と Volume Migration の外部ボリューム運用の流れ
- C.2 Universal Volume Manager と TrueCopy の外部ボリューム運用の流れ
- C.3 Universal Volume Manager と Universal Replicator の外部ボリューム運用の流れ
- C.4 Universal Volume Manager と ShadowImage の外部ボリューム運用の流れ
- C.5 Universal Volume Manager と仮想ボリュームを併用してボリュームコピーする場合の注意事項

C.1 Universal Volume Manager と Volume Migration の外部ボリューム運用の流れ

Volume Migration で外部ボリュームを使用する場合の運用例を、次の図に示します。この図では、ローカルストレージシステムの外部ボリュームを移動元に、ローカルストレージシステムの Dynamic Provisioning の仮想ボリュームを移動先に、それぞれ設定しています。また、この図では、外部ストレージシステムのボリューム内の既存のデータをローカルストレージシステムの Dynamic Provisioning の仮想ボリュームに移動させています。



移動元の外部ストレージシステムのボリュームのデータを移動先（ローカルストレージシステム）のボリュームに移動する。

図で示した運用の流れを次に説明します。

操作手順

1. Universal Volume Manager を使って、外部ストレージシステムのボリュームをローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングします。
この図の例では、マッピング時に外部ボリュームのエミュレーションタイプを OPEN-V に設定する必要があります。
Volume Migration を使って外部ストレージシステムのボリューム内の既存のデータを、Dynamic Provisioning の仮想ボリュームに移動するには、外部ストレージシステムのボリュームをマッピングするときにエミュレーションタイプを OPEN-V に設定する必要があります。外部ストレージシステムのボリューム内のデータをローカルストレージシステムから読み出すには、マッピングされたボリュームのエミュレーションタイプは OPEN-V でなければいけませんからです。
TrueCopy や ShadowImage などのペアのプライマリボリュームに外部ボリュームを設定する場合も、外部ストレージシステムのボリュームをマッピングするときにエミュレーションタイプを OPEN-V に設定する必要があります。
2. 外部ボリュームと同じ容量の Dynamic Provisioning の仮想ボリュームを用意します。
必要に応じて VLL 機能を使用し、ボリュームの容量を調整してください。VLL 機能については『オープンシステム構築ガイド』および『メインフレームシステム構築ガイド』を参照してください。
3. 外部ボリュームを移動元（ソースボリューム）に、ローカルストレージシステムの Dynamic Provisioning の仮想ボリュームを移動先（ターゲットボリューム）に設定します。
4. Volume Migration の移動機能を使って、外部ボリュームのデータをローカルストレージシステムの Dynamic Provisioning の仮想ボリュームに移動させます。



メモ

移動先プールのプール容量に注意してください。詳細は、「[C.5 Universal Volume Manager と仮想ボリュームを併用してボリュームコピーする場合の注意事項](#)」を参照してください。

関連概念

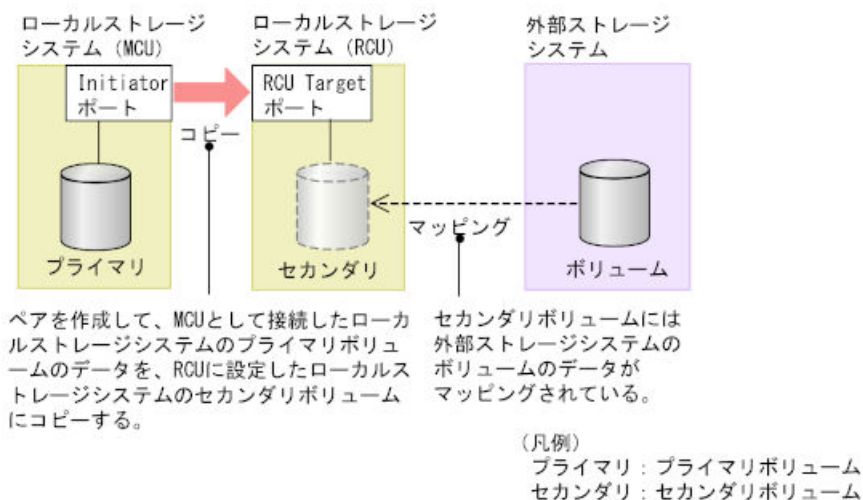
- [1.5 Universal Volume Manager と併用できるプログラムプロダクト](#)

関連タスク

- [4.2 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングする](#)

C.2 Universal Volume Manager と TrueCopy の外部ボリューム運用の流れ

TrueCopy で外部ボリュームを使用する場合の運用例を、次の図に示します。この図では、外部ボリュームを TrueCopy ペアのセカンダリボリュームに、MCU として接続したローカルストレージシステムのボリュームをプライマリボリュームに、それぞれ設定しています。



図で示した運用の流れを次に説明します。

操作手順

1. Universal Volume Manager を使って、外部ストレージシステムのボリュームをローカルストレージシステム (RCU) のボリュームとしてマッピングします。マッピング時に設定するエミュレーションタイプは、使用目的に応じて選択してください。オープンシステム用のエミュレーションタイプ (OPEN-V) を選択した場合は、手順 2 に進んでください。メインフレームシステム用のエミュレーションタイプ (3390-3 など) を選択した場合は、手順 3 に進んでください。
2. マッピング時にオープンシステム用のエミュレーションタイプを設定した場合、マッピングされたボリュームの状態は自動的に正常になります。しかし、ボリュームのフォーマットは自動で実行されません。ボリュームのフォーマットが必要な場合は、VLL 機能を使ってボリュームをフォーマットしてください。ボリュームをフォーマットする手順については、『オープンシステム構築ガイド』を参照してください。
手順 4 に進んでください。

3. マッピング時にメインフレームシステム用のエミュレーションタイプを設定した場合、マッピングされたボリュームの状態は閉塞状態になります。VLL 機能を使ってボリュームをフォーマットしてください。また、外部ストレージシステム側ですでにデータ領域がゼロフォーマットされているボリュームをマッピングした場合は、VLL 機能の Write to Control Blocks の操作を実行してボリュームを回復できます。ボリュームのフォーマットおよび Write to Control Blocks の操作方法は『RAID Manager コマンドリファレンス』を参照してください。
4. TrueCopy ペアのプライマリボリュームとセカンダリボリュームを設定します。

TrueCopy の詳細については、『TrueCopy ユーザガイド』を参照してください。



メモ

コピー先プールのプール容量に注意してください。詳細は、「[C.5 Universal Volume Manager と仮想ボリュームを併用してボリュームコピーする場合の注意事項](#)」を参照してください。

関連概念

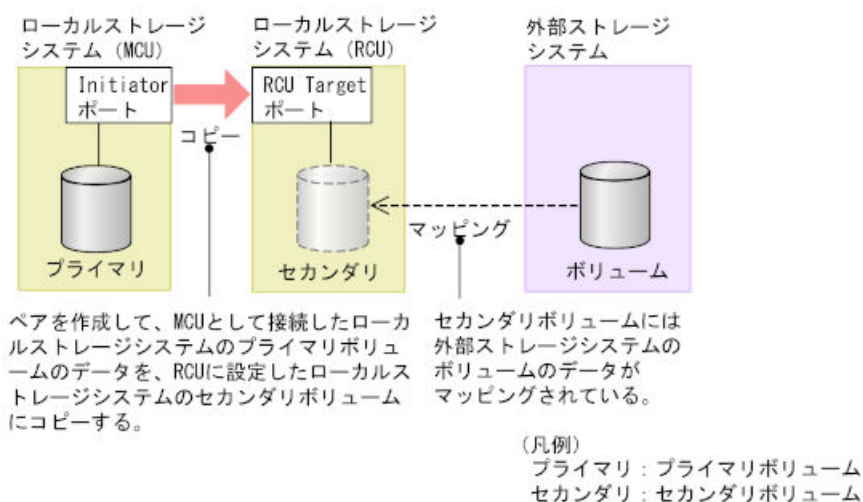
- [1.5 Universal Volume Manager と併用できるプログラムプロダクト](#)

関連タスク

- [4.2 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングする](#)

C.3 Universal Volume Manager と Universal Replicator の外部ボリューム運用の流れ

Universal Replicator で外部ボリュームを使用する場合の運用例を、次の図に示します。この図では、外部ボリュームを Universal Replicator ペアのセカンダリボリュームに、MCU として接続したローカルストレージシステムのボリュームをプライマリボリュームに、それぞれ設定しています。



図で示した運用の流れを次に説明します。

操作手順

1. Universal Volume Manager を使って、外部ストレージシステムのボリュームをローカルストレージシステム (RCU) のボリュームとしてマッピングします。マッピング時に設定するエミュレーションタイプは、使用目的に応じて選択してください。オープンシステム用のエミュレーションタイプ (OPEN-V) を選択した場合は、手順 2 に進んでください。メインフレームシ

システム用のエミュレーションタイプ（3390-3 など）を選択した場合は、手順 3 に進んでください。

- マッピング時にオープンシステム用のエミュレーションタイプを設定した場合、マッピングされたボリュームの状態は自動的に正常になります。しかし、ボリュームのフォーマットは自動で実行されません。ボリュームのフォーマットが必要な場合は、VLL 機能を使ってボリュームをフォーマットしてください。ボリュームをフォーマットする方法は『RAID Manager コマンドリファレンス』を参照してください。
手順 4 に進んでください。
- マッピング時にメインフレームシステム用のエミュレーションタイプを設定した場合、マッピングされたボリュームの状態は閉塞状態になります。VLL 機能を使ってボリュームをフォーマットしてください。また、外部ストレージシステム側ですでにデータ領域がゼロフォーマットされているボリュームをマッピングした場合は、VLL 機能の Write to Control Blocks の操作を実行してボリュームを回復できます。ボリュームのフォーマットおよび Write to Control Blocks の操作手順については、『メインフレームシステム構築ガイド』を参照してください。
手順 4 に進んでください。
- Universal Replicator ペアのプライマリボリュームとセカンダリボリュームを設定します。

Universal Replicator の詳細については、『Universal Replicator ユーザガイド』を参照してください。



メモ

コピー先プールのプール容量に注意してください。詳細は、「[C.5 Universal Volume Manager と仮想ボリュームを併用してボリュームコピーする場合の注意事項](#)」を参照してください。

関連概念

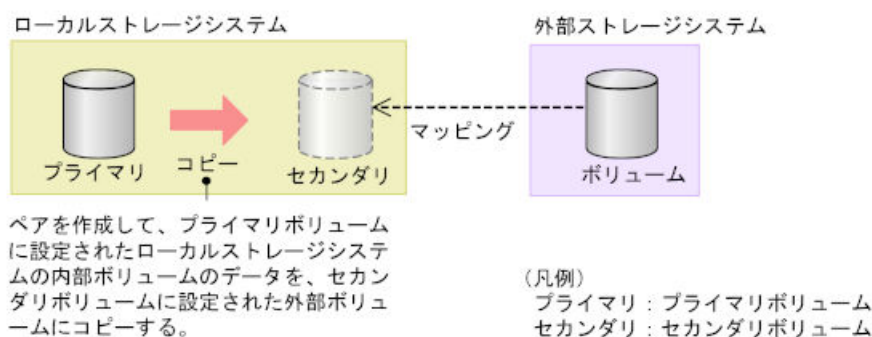
- [1.5 Universal Volume Manager と併用できるプログラムプロダクト](#)

関連タスク

- [4.2 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングする](#)

C.4 Universal Volume Manager と ShadowImage の外部ボリューム運用の流れ

ShadowImage で外部ボリュームを使用する場合の運用例を、次の図に示します。この図では、外部ボリュームを ShadowImage ペアのセカンダリボリュームに、ローカルストレージシステムのボリュームをプライマリボリュームに、それぞれ設定しています。



図で示した運用の流れを次に説明します。

操作手順

1. Universal Volume Manager を使って、外部ストレージシステムのボリュームをローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングします。マッピング時に設定するエミュレーションタイプは、使用目的に応じて選択してください。オープンシステム用のエミュレーションタイプ（OPEN-V）を選択した場合は、手順 2 に進んでください。メインフレームシステム用のエミュレーションタイプ（3390-3 など）を選択した場合は、手順 3 に進んでください。
2. マッピング時にオープンシステム用のエミュレーションタイプを設定した場合、マッピングされたボリュームの状態は自動的に正常になります。しかし、ボリュームのフォーマットは自動で実行されません。ボリュームのフォーマットが必要な場合は、VLL 機能を使ってボリュームをフォーマットしてください。ボリュームをフォーマットする手順については、『オープンシステム構築ガイド』を参照してください。
手順 4 に進んでください。
3. マッピング時にメインフレームシステム用のエミュレーションタイプを設定した場合、マッピングされたボリュームの状態は閉塞状態になります。VLL 機能を使ってボリュームをフォーマットしてください。また、外部ストレージシステム側ですでにデータ領域がゼロフォーマットされているボリュームをマッピングした場合は、VLL 機能の Write to Control Blocks の操作を実行してボリュームを回復できます。ボリュームのフォーマットおよび Write to Control Blocks の操作手順については、『メインフレームシステム構築ガイド』を参照してください。
手順 4 に進んでください。
4. ShadowImage ペアのプライマリボリュームとセカンダリボリュームを設定します。

ShadowImage の詳細については、『ShadowImage ユーザガイド』を参照してください。



メモ

コピー先プールのプール容量に注意してください。詳細は、「[C.5 Universal Volume Manager と仮想ボリュームを併用してボリュームコピーする場合の注意事項](#)」を参照してください。

関連概念

- [1.5 Universal Volume Manager と併用できるプログラムプロダクト](#)

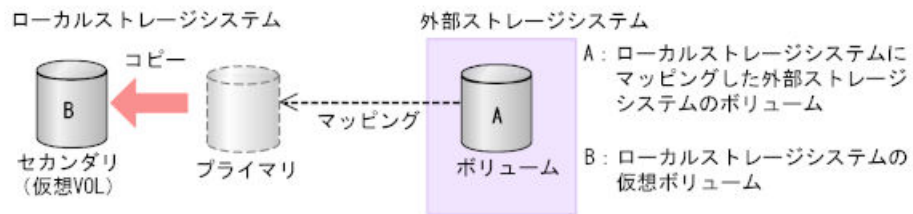
関連タスク

- [4.2 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングする](#)

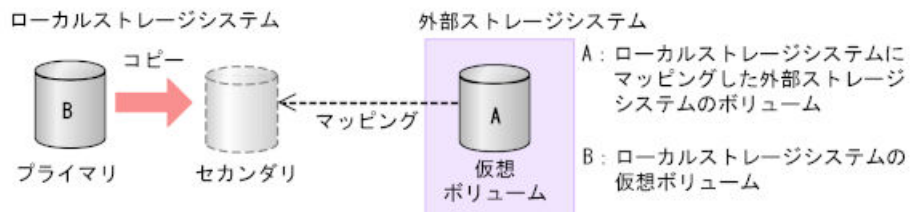
C.5 Universal Volume Manager と仮想ボリュームを併用してボリュームコピーする場合の注意事項

外部ボリュームと仮想ボリュームを併用してボリュームコピーする場合は、コピー先のプールに、コピー元のボリューム定義容量以上の空き容量があることを確認してください。例えば、定義容量が 100GB のボリュームをコピーするには、そのボリュームの使用量が 30GB であっても、コピー先のプールに 100GB 以上の空き容量が必要です。これは、外部ボリュームのページ割り当て情報が、ローカルストレージシステムに引き継がれないためです。

- ケース 1：外部ボリュームを、仮想ボリュームにコピー
A を B にコピーする際は、A の定義容量以上の空き容量が B のプールに必要です。



- ケース 2: 外部ストレージシステム上の仮想ボリュームをマッピングした外部ボリュームにコピー
 B を A にコピーする際は、B の定義容量以上の空き容量が A のプールに必要です。



この注意事項が該当するプログラムプロダクトを示します。

- TrueCopy
- TrueCopy for Mainframe
- global-active device
- Universal Replicator
- Universal Replicator for Mainframe
- ShadowImage
- ShadowImage for Mainframe
- Volume Migration

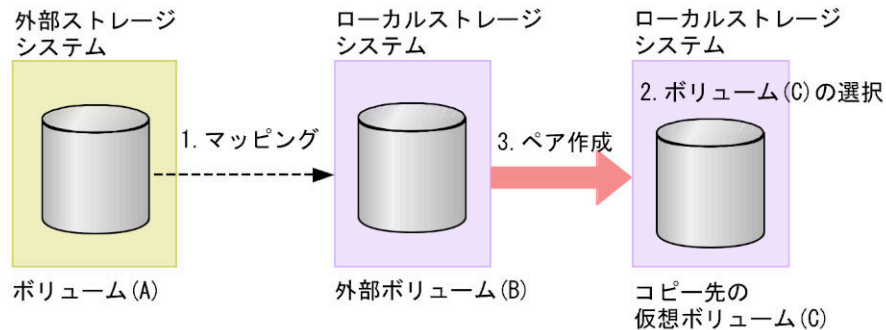
ペアに設定するボリュームの容量の調整

ここでは、ペアに設定するボリュームの容量の調整について説明します。

- D.1 外部ボリュームをプライマリボリュームにして外部ストレージシステムのデータをコピーする流れ
- D.2 外部ボリュームをセカンダリボリュームにして外部ストレージシステムにデータをコピーする流れ

D.1 外部ボリュームをプライマリボリュームにして外部ストレージシステムのデータをコピーする流れ

外部ボリュームをプライマリボリュームにして外部ストレージシステムのデータをコピーする流れを次の図に示します。



操作手順

1. 外部ストレージシステムのボリューム (A) をローカルストレージシステムのボリューム (B) としてマッピングします。エミュレーションタイプは **OPEN-V** を選択してください。
2. コピー先のボリュームとして、外部ボリューム (B) と同じか、または外部ボリューム (B) より大きい容量の **OPEN-V** エミュレーションタイプのボリューム (C) を選択します。
3. ペアを作成します。



メモ

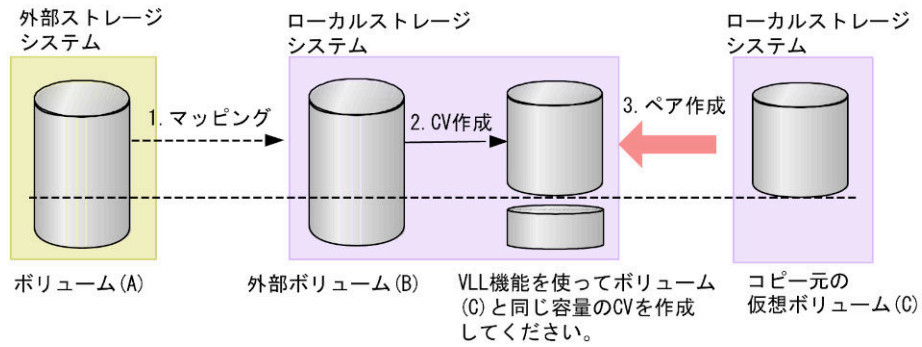
コピー先プールのプール容量に注意してください。詳細は、「[C.5 Universal Volume Manager と仮想ボリュームを併用してボリュームコピーする場合の注意事項](#)」を参照してください。

関連概念

- [1.5 Universal Volume Manager と併用できるプログラムプロダクト](#)

D.2 外部ボリュームをセカンダリボリュームにして外部ストレージシステムにデータをコピーする流れ

外部ボリュームをセカンダリボリュームにして外部ストレージシステムに、ローカルストレージシステムの Dynamic Provisioning の仮想ボリュームのデータをコピーする流れを次の図に示します。



操作手順

1. 外部ストレージシステムのボリューム (A) をローカルストレージシステムのボリューム (B) としてマッピングします。コピー元の仮想ボリューム (C) と同じエミュレーションタイプを選択してください。
2. 外部ボリューム (B) の容量を確認します。外部ボリューム (B) の容量がコピー元の仮想ボリューム (C) と異なる場合は、VLL 機能を使って外部ボリューム (B) をコピー元の仮想ボリューム (C) と同じ容量の CV にします。
3. ペアを作成します。

関連概念

- [1.5 Universal Volume Manager と併用できるプログラムプロダクト](#)

リモートコマンドデバイスのマッピングと 注意事項

リモートコマンドデバイスを使用すると、外部ストレージシステム内のボリュームに対して、ホストの RAID Manager から操作ができます。

- E.1 リモートコマンドデバイスの概要
- E.2 リモートコマンドデバイスとしてマッピングできるコマンドデバイス
- E.3 リモートコマンドデバイスの注意事項

E.1 リモートコマンドデバイスの概要

リモートコマンドデバイスとは、外部ストレージシステムのコマンドデバイスをローカルストレージシステムのボリュームとしてマッピングしたものです。

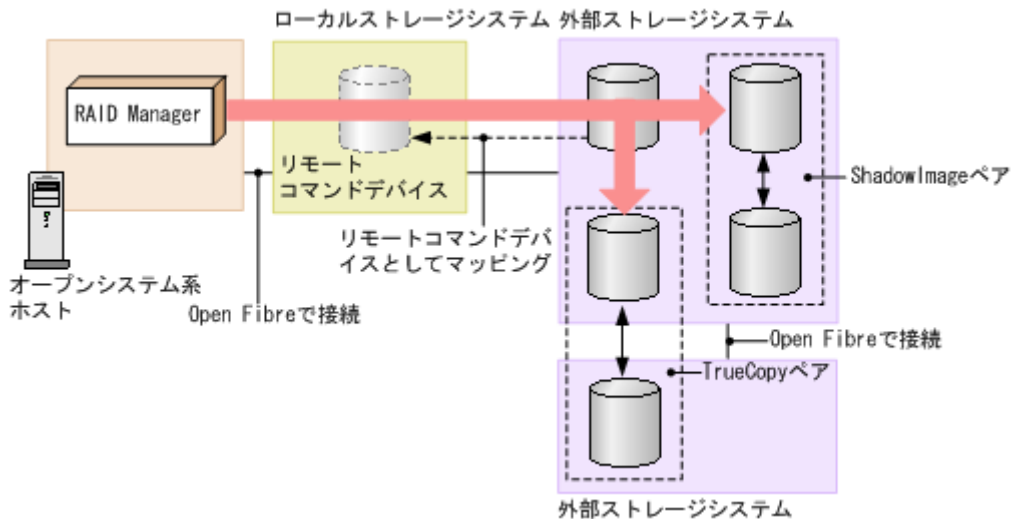
リモートコマンドデバイスのマッピング操作には、Universal Volume Manager のライセンスは必要ありません。

リモートコマンドデバイスに対して RAID Manager コマンドを発行すれば、外部ストレージシステムのコマンドデバイスに RAID Manager コマンドを実行でき、外部ストレージシステムの RAID Manager を操作できます。

例えば、次の図では、リモートコマンドデバイスに RAID Manager の ShadowImage や TrueCopy のコマンドを発行することで、外部ストレージシステムのコマンドデバイスに RAID Manager のコマンドを実行でき、外部ストレージシステムの ShadowImage ペアや TrueCopy ペアを操作しています。

RAID Manager およびコマンドデバイスの詳細については、『RAID Manager インストール・設定ガイド』を参照してください。

リモートコマンドデバイスの概要を次の図に示します。



関連概念

- ・ [付録 E.2 リモートコマンドデバイスとしてマッピングできるコマンドデバイス](#)
- ・ [付録 E.3 リモートコマンドデバイスの注意事項](#)

E.2 リモートコマンドデバイスとしてマッピングできるコマンドデバイス

リモートコマンドデバイスとしてマッピングできるコマンドデバイスは、次の表の形式で表示されます。

マッピングできるコマンドデバイスを選択してマッピングしてください。

ストレージシステム	デバイス名の表示
VSP One B80 VSP One B20 VSP E シリーズ VSP G130, G150, G350, G370, G700, G900, F350, F370, F700, F900 VSP G100, G200, G400, G600, G800, F400, F600, F800 VSP 5000 シリーズ VSP G1000, G1500, F1500 VX7 XP7 Storage XP8 Storage	形式: 「エミュレーションタイプ」 + 「-CM」 例: OPEN-V-CM
Unified Storage Adaptable Modular Storage	DF600F-CM

関連概念

- ・ [付録 E.1 リモートコマンドデバイスの概要](#)
- ・ [付録 E.2.1 リモートコマンドデバイスからホストに報告されるコマンドデバイスのデバイス情報](#)

関連タスク

- ・ [4.2 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングする](#)

E.2.1 リモートコマンドデバイスからホストに報告されるコマンドデバイスのデバイス情報

- ・ シリアル番号
- ・ ベンダ名
- ・ デバイス名
ホストに報告されるデバイス名は、デバイス名として表示される内容と同じになります。

オープンシステム用ホストからリモートコマンドデバイスに接続した場合、リモートコマンドデバイスから報告されるデバイス情報は、リモートコマンドデバイスとしてマッピングした外部ストレージシステムのコマンドデバイスのデバイス情報になります。

関連概念

- ・ [付録 E.2 リモートコマンドデバイスとしてマッピングできるコマンドデバイス](#)

E.3 リモートコマンドデバイスの注意事項

リモートコマンドデバイスの注意事項は次のとおりです。

- ・ リモートコマンドデバイスの状態が正常でも、リモートコマンドデバイスに対する操作やコマンドを実行したときにエラーが発生することがあります。
リモートコマンドデバイスの状態が正常であるにも関わらずエラーが発生した場合は、リモートコマンドデバイスではなく、外部ストレージシステムのコマンドデバイスの状態を確認してください。
- ・ コマンドデバイスをリモートコマンドデバイスとしてマッピングする場合には、次のような制限があります。

項目	制限
外部ボリューム数	1 個
キャッシュモード	無効
最小容量	96,000block (約 47MB)
最大容量	4TB
リモートコマンドデバイスごとに起動できる RAID Manager の最大インスタンス数	16 [※]

注※

DKC 間のパス数によって、起動できるインスタンス数が 16 未満になる場合があります。

- Universal Volume Manager のポート探索やボリューム探索では、リモートコマンドデバイスは認識できません。
- 外部ストレージシステムのリモートコマンドデバイスをマッピングすることはできません (リモートコマンドデバイスのカスケード接続はできません)。
- 外部ストレージシステムの先頭ボリュームにリモートコマンドデバイスが設定されている場合、そのボリュームのポートに対して、ポート探索やボリューム探索をすることはできません (外部ストレージシステムのシリアル番号とは異なるシリアル番号が表示される場合があります)。
- リモートコマンドデバイスには、I/O を実行できません。
- リモートコマンドデバイスに対して、コマンドデバイスを無効にする設定はできません。
- リモートコマンドデバイスに対して、コマンドデバイスセキュリティを設定できません。
- リモートコマンドデバイスとしてマッピングした外部ストレージシステムのコマンドデバイスに対しては、外部ストレージシステム側で、コマンドデバイスセキュリティを設定しないでください。
- リモートコマンドデバイスに対しては、VLL 機能を使って CV を作成できません。
- リモートコマンドデバイスを global storage virtualization の機能によって仮想化することはできません。
- 1 つのコマンドデバイスを複数のローカルストレージシステムからリモートコマンドデバイスとしてマッピングすることはできません。

関連概念

- [付録 E.1 リモートコマンドデバイスの概要](#)

関連タスク

- [4.2 外部ストレージシステムのボリュームをマッピングする](#)



RAID Manager コマンドリファレンス

RAID Manager を使用するに当たっての参考情報を示します。

- [F.1 RAID Manager コマンドとアクションの対応表](#)
- [F.2 RAID Manager のオプションのパラメータの設定範囲](#)

F.1 RAID Manager コマンドとアクションの対応表

各アクション名に対応する RAID Manager コマンドを次の表に示します。

アクション名	RAID Manager コマンド
外部ストレージシステムのポート一覧の取得	raidcom discover external_storage [※]
外部ストレージシステム側のポートの LU 一覧の取得	raidcom discover lun [※]
外部バスグループ情報の取得	raidcom get path
外部ストレージシステムのボリュームのマッピング	raidcom add external_grp [※]
ボリュームの作成	raidcom add ldev
外部バスの追加	raidcom add path [※]
外部ストレージシステムのポート設定の変更	raidcom modify path
外部ストレージシステムのボリュームへの外部バスの切断	raidcom disconnect path
外部バスの削除	raidcom delete path
外部ボリュームグループ情報の取得	raidcom get external_grp
外部ボリュームグループのキャッシュモードの変更 外部ボリュームのキャッシュ書き込み制御 外部ボリュームグループのバスモード変更 外部ストレージシステムへの I/O 負荷分散方式の変更 外部ボリュームグループに割り当てられた MP ユニットの変更	raidcom modify external_grp
外部ストレージシステムのボリュームへの接続の切断	raidcom disconnect external_grp
外部ストレージシステムのボリュームのマッピング解除	raidcom delete external_grp 強制削除: -forcible オプション指定
外部ストレージシステムのボリュームへの再接続	raidcom check_ext_storage external_grp
外部ストレージシステムのボリュームへの外部バスの再接続	raidcom check_ext_storage path
外部ストレージシステム側ポートの iSCSI ターゲット情報の取得	raidcom discover external_iscsi_name
外部ストレージシステム側ポートの iSCSI 名の登録	raidcom add external_iscsi_name
外部ストレージシステムの iSCSI 名の取得	raidcom get external_iscsi_name
外部ストレージシステムの iSCSI ターゲットへのログインテスト	raidcom check external_iscsi_name
CHAP 認証モードと CHAP 認証方向の編集	raidcom add external_iscsi_name
ローカルストレージシステム側ポート (イニシエータ) の CHAP ユーザ名と CHAP ユーザのシークレットパスワードの編集	raidcom modify initiator_chap_user
外部ストレージシステム側ポート (ターゲット) の CHAP ユーザ名と CHAP ユーザのシークレットパスワードの編集	raidcom modify external_chap_user
iSCSI ターゲットの iSCSI 名の削除	raidcom delete external_iscsi_name

注※

-safety_check enable オプションを指定して実行することを推奨します。-safety_check enable オプションを指定しない場合は、外部ストレージシステムからローカルストレージシステムへの経路で接続の切断が発生する可能性があります。詳細は「[2.2.4 外部バスに関する注意事項](#)」を参照してください。

F.2 RAID Manager のオプションのパラメータの設定範囲

RAID Manager のオプションのパラメータで設定できる範囲を次の表に示します。コマンドの詳細については、『RAID Manager コマンドリファレンス』を参照してください。

パラメータの内容	設定範囲
外部ボリュームバスグループ番号	0~63,231
外部ボリュームグループ番号	gno : 1~16,384 sgno : 1~4,096
I/O タイムアウト値	5~240 秒
外部接続ポートのバス閉塞監視時間	5~180 秒
外部ストレージシステムのボリュームに対して、一度に発行（キューイング）できる Read / Write コマンドの数（Q depth）	2~128



このマニュアルの参考情報

このマニュアルを読むに当たっての参考情報を示します。

- G.1 操作対象リソースについて
- G.2 このマニュアルでの表記
- G.3 このマニュアルで使用している略語
- G.4 KB (キロバイト) などの単位表記について

G.1 操作対象リソースについて

このマニュアルで説明している機能を使用するときには、各操作対象のリソースが特定の条件を満たしている必要があります。

各操作対象のリソースの条件については『オープンシステム構築ガイド』または『メインフレームシステム構築ガイド』を参照してください。

G.2 このマニュアルでの表記

このマニュアルで使用している表記を次の表に示します。

表記	製品名
DP	Dynamic Provisioning
EVA	HPE Enterprise Virtual Array 3000/4000/ 5000/6000/8000
Virtual Storage Platform F350, F370, F700, F900	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none">Virtual Storage Platform F350Virtual Storage Platform F370Virtual Storage Platform F700Virtual Storage Platform F900
Virtual Storage Platform F400, F600, F800	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none">Virtual Storage Platform F400Virtual Storage Platform F600Virtual Storage Platform F800
Virtual Storage Platform G100, G200, G400, G600, G800	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none">Virtual Storage Platform G100Virtual Storage Platform G200Virtual Storage Platform G400Virtual Storage Platform G600Virtual Storage Platform G800
Virtual Storage Platform G130, G150, G350, G370, G700, G900	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none">Virtual Storage Platform G130Virtual Storage Platform G150Virtual Storage Platform G350Virtual Storage Platform G370Virtual Storage Platform G700Virtual Storage Platform G900
VSP E シリーズ	次の製品を区別する必要がない場合の表記です。 <ul style="list-style-type: none">Virtual Storage Platform E390Virtual Storage Platform E590Virtual Storage Platform E790Virtual Storage Platform E990Virtual Storage Platform E1090

表記	製品名
	<ul style="list-style-type: none"> • Virtual Storage Platform E390H • Virtual Storage Platform E590H • Virtual Storage Platform E790H • Virtual Storage Platform E1090H
VSP F350	Virtual Storage Platform F350
VSP F370	Virtual Storage Platform F370
VSP F400	Virtual Storage Platform F400
VSP F600	Virtual Storage Platform F600
VSP F700	Virtual Storage Platform F700
VSP F800	Virtual Storage Platform F800
VSP F900	Virtual Storage Platform F900
VSP F1500	Virtual Storage Platform F1500
VSP G100	Virtual Storage Platform G100
VSP G130	Virtual Storage Platform G130
VSP G150	Virtual Storage Platform G150
VSP G200	Virtual Storage Platform G200
VSP G350	Virtual Storage Platform G350
VSP G370	Virtual Storage Platform G370
VSP G400	Virtual Storage Platform G400
VSP G600	Virtual Storage Platform G600
VSP G700	Virtual Storage Platform G700
VSP G800	Virtual Storage Platform G800
VSP G900	Virtual Storage Platform G900
VSP G1000	Virtual Storage Platform G1000
VSP G1500	Virtual Storage Platform G1500
VSP 5000 シリーズ	<p>次の製品を区別する必要がない場合の表記です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Hitachi Virtual Storage Platform 5100 • Hitachi Virtual Storage Platform 5200 • Hitachi Virtual Storage Platform 5500 • Hitachi Virtual Storage Platform 5600 • Hitachi Virtual Storage Platform 5100H • Hitachi Virtual Storage Platform 5200H • Hitachi Virtual Storage Platform 5500H • Hitachi Virtual Storage Platform 5600H
Hitachi Virtual Storage Platform One Block 20 VSP One B20	<p>次の製品を区別する必要がない場合の表記です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Hitachi Virtual Storage Platform One Block 23 • Hitachi Virtual Storage Platform One Block 26 • Hitachi Virtual Storage Platform One Block 28
VSP One B23	Hitachi Virtual Storage Platform One Block 23
VSP One B26	Hitachi Virtual Storage Platform One Block 26
VSP One B28	Hitachi Virtual Storage Platform One Block 28

表記	製品名
Hitachi Virtual Storage Platform One Block 80 VSP One B80	次の製品のシリーズ表記です。 ・ Hitachi Virtual Storage Platform One Block 85
VSP One B85	Hitachi Virtual Storage Platform One Block 85
VX7	Hitachi Virtual Storage Platform VX7

G.3 このマニュアルで使用している略語

このマニュアルで使用している略語を次の表に示します。

略語	フルスペル
CLPR	Cache Logical Partition
CV	Customized Volume
FC	Fibre Channel
I/O	Input/Output
ID	IDentifier
LDEV	Logical DEvice
LU	Logical Unit
LUN	Logical Unit Number
MCU	Main Control Unit
OEM	Original Equipment Manufacturer
OLTP	On-Line Transaction Processing
OS	Operating System
RCU	Remote Control Unit
SAS	Serial Attached SCSI
SNMP	Simple Network Management Protocol
SSD	Solid-State Drive
VDEV	Virtual Device
WWN	World Wide Name

G.4 KB（キロバイト）などの単位表記について

1KB（キロバイト）は1,024バイト、1MB（メガバイト）は1,024KB、1GB（ギガバイト）は1,024MB、1TB（テラバイト）は1,024GB、1PB（ペタバイト）は1,024TBです。

1block（ブロック）は512バイトです。

1Cyl（シリンダ）をKBに換算した値は、ボリュームのエミュレーションタイプによって異なります。オープンシステムの場合、1Cylは960KBです。メインフレームシステムの場合、1Cylは870KBです。3380-xx、6586-xxについて、CLIのLDEV容量の表示は、ユーザがデータを格納できるユーザ領域の容量を表示するため、1Cylを720KBとしています。xxは任意の数字または文字を示します。



用語解説

(英字)

AMC

(Array Management Controller)

HSNBX に搭載される ESM アプリケーションが動作するハードウェア。

ALUA

(Asymmetric Logical Unit Access)

SCSI の非対称論理ユニットアクセス機能です。

ストレージ同士、またはサーバとストレージシステムを複数の冗長パスで接続している構成の場合に、どのパスを優先して使用するかをストレージシステムに定義して、I/O を発行できます。優先して使用するパスに障害が発生した場合は、他のパスに切り替わります。

bps

(bits per second)

データ転送速度の標準規格です。

CBX

(Controller Box)

CBX は DKC、コントローラシャーシと同義語です。詳しくは、「コントローラシャーシ」を参照してください。CBX2 台を指す場合は CBX ペアと記載する場合があります。

CC

(Concurrent Copy)

IBM 社の Concurrent Copy 機能のことです。

CHAP

(Challenge Handshake Authentication Protocol)

認証方式のひとつ。ネットワーク上でやり取りされる認証情報はハッシュ関数により暗号化されるため、安全性が高いです。

CHB

(Channel Board)

詳しくは「チャンネルボード」を参照してください。

Child

Thin Image Advanced の用語で、Parent のメタデータを共有する先のペアまたはボリュームを指します。

Family 内に vClone 属性のボリュームが存在しない場合、ルートボリュームと同じスナップショットツリーに属するペアまたはボリュームが該当します。

Family 内に vClone 属性のボリュームが存在する場合、vClone Parent 属性のボリュームと同じスナップショットツリーに属するペアまたはボリューム、同一 Family 内の vClone 属性のボリューム、同一 Family 内の vClone 属性のボリュームと同じスナップショットツリーに属するペアまたはボリュームが該当します。

CLPR

(Cache Logical Partition)

キャッシュメモリを論理的に分割すると作成されるパーティション (区画) です。

CM

(Cache Memory (キャッシュメモリ))

詳しくは「キャッシュ」を参照してください。

CNA

(Converged Network Adapter)

HBA と NIC を統合したネットワークアダプタ。

CRC

(Cyclic Redundancy Check)

巡回冗長検査。コンピュータデータに対し、偶発的変化を検出するために設計された誤り訂正符号。

CSV

(Comma-Separated Values)

データベースソフトや表計算ソフトのデータをファイルとして保存するフォーマットの 1 つで、主にアプリケーション間のファイルのやり取りに使われます。それぞれの値はコンマで区切られています。

CTG

(Consistency Group)

詳しくは「コンシステンシーグループ」を参照してください。

CU

(Control Unit (コントロールユニット))

主に磁気ディスク制御装置を指します。

CV

(Customized Volume)

任意のサイズに設定できる論理ボリュームです。

CYL

(Cylinder (シリンダ))

複数枚の磁気ディスクから構成される磁気ディスク装置で、磁気ディスクの回転軸から等距離にあるトラックが磁気ディスクの枚数分だけ垂直に並び、この集合を指します。

DKB

(Disk Board)

ドライブとキャッシュメモリ間のデータ転送を制御するモジュールです。

DKC

(Disk Controller)

DKC は CBX、コントローラシャーシと同義語です。また、システムを総称する論理的な呼称として DKC が使われる場合があります。詳しくは、「コントローラシャーシ」を参照してください。

DKU

(Disk Unit)

各種ドライブを搭載するためのシャーシ（筐体）です。

DP-VOL

詳しくは「仮想ボリューム」を参照してください。

EAV

(Extended Address Volume)

IBM 社のストレージシステムが提供している、従来の 3390 型ボリュームではサポートできない大容量のボリュームを定義するための機能です。最大で、1,182,006 シリンダ/ボリュームまで定義できます。

ECC

(Error Check and Correct)

ハードウェアで発生したデータの誤りを検出し、訂正することです。

ENC

ドライブボックスに搭載され、コントローラシャーシまたは他のドライブボックスとのインターフェース機能を有します。

ESE-VOL

(Extent Space - Efficient Volume)

IBM 製品と互換性のある仮想ボリュームで、User Directed Space Release 機能によるページ解放が可能なボリュームです。

ESM

(Embedded Storage Manager)

本ストレージシステムにおける管理系ソフトウェアです。

ESMOS

(Embedded Storage Manager Operating System)

ESM を動作させるための OS や OSS を含んだファームウェアです。

ExG

(External Group)

外部ボリュームを任意にグループ分けしたものです。詳しくは「外部ボリュームグループ」を参照してください。

External MF

詳しくは「マイグレーションボリューム」を参照してください。

External ポート

外部ストレージシステムを接続するために使用する、ストレージシステムのポートです。

Failover

故障しているものと機能的に同等のシステムコンポーネントへの自動的置換。
この **Failover** という用語は、ほとんどの場合、同じストレージデバイスおよびホストコンピュータに接続されているインテリジェントコントローラに適用されます。
コントローラのうちの1つが故障している場合、**Failover** が発生し、残っているコントローラがその I/O 負荷を引き継ぎます。

Family

Thin Image Advanced の用語で、メタデータを共有する **Parent** (メタデータ共有元となるボリューム) と **Child** (**Parent** のメタデータ共有するペアまたはボリューム) の群れを指します。

FC

(Fibre Channel)

ストレージシステム間のデータ転送速度を高速にするため、光ケーブルなどで接続できるようにするインターフェースの規格のことです。

FICON

(Fibre Connection)

メインフレームシステム用の光チャネルの一種です。**FICON** では、ファイバチャネルの標準に基づいて **ESCON**[®] の機能が拡張されており、全二重データによる高速データ転送がサポートされています。

FM

(Flash Memory (フラッシュメモリ))

詳しくは「フラッシュメモリ」を参照してください。

GID

(Group ID)

ホストグループを作成するときに付けられる 2 桁の 16 進数の識別番号です。

GUI

(Graphical User Interface)

コンピュータやソフトウェアの表示画面をウィンドウや枠で分け、情報や操作の対象をグラフィック要素を利用して構成するユーザインターフェース。マウスなどのポインティングデバイスで操作することを前提に設計されます。

HBA

(Host Bus Adapter)

詳しくは「ホストバスアダプタ」を参照してください。

Hyper PAV

IBM OS の機能で、PAV の発展機能です。あるベースデバイスに割り当てたエイリアスデバイスが、同一 CU 内のベースデバイスすべてのエイリアスデバイスとして共有化されます。本ストレージシステムで **Compatible Hyper PAV** 機能を使用することにより、IBM OS から本ストレージシステム上のデバイスに対してこの機能を使えるようになります。

I/O モード

global-active device ペアのプライマリボリュームとセカンダリボリュームが、それぞれに持つ I/O の動作です。

I/O レート

ドライブへの入出力アクセスが 1 秒間に何回行われたかを示す数値です。単位は IOPS (I/Os per second) です。

In-Band 方式

RAID Manager のコマンド実行方式の 1 つです。コマンドを実行すると、管理ツールの操作端末またはサーバから、ストレージシステムのコマンドデバイスにコマンドが転送されます。

Initiator

属性が RCU Target のポートと接続するポートを持つ属性です。

iSNS

(Internet Storage Naming Service)

iSCSI デバイスで使われる、自動検出、管理および構成ツールです。

iSNS によって、イニシエータおよびターゲット IP アドレスの特定リストで個々のストレージシステムを手動で構成する必要がなくなります。代わりに、iSNS は、環境内のすべての iSCSI デバイスを自動的に検出、管理および構成します。

LACP

(Link Aggregation Control Protocol)

複数回線を 1 つの論理的な回線として扱うための制御プロトコル。

LCU

(Logical Control Unit)

主に磁気ディスク制御装置を指します。

LDEV

(Logical Device (論理デバイス))

RAID 技術では冗長性を高めるため、複数のドライブに分散してデータを保存します。この複数のドライブにまたがったデータ保存領域を論理デバイスまたは LDEV と呼びます。ストレージ内の LDEV は、LDKC 番号、CU 番号、LDEV 番号の組み合わせで区別します。LDEV に任意の名前を付けることもできます。

このマニュアルでは、LDEV (論理デバイス) を論理ボリュームまたはボリュームと呼ぶことがあります。

LDEV 名

LDEV 作成時に、LDEV に付けるニックネームです。あとから LDEV 名の変更もできます。

LDKC

(Logical Disk Controller)

複数の CU を管理するグループです。各 CU は 256 個の LDEV を管理しています。

LUN/LU

(Logical Unit Number)

論理ユニット番号です。オープンシステム用のボリュームに割り当てられたアドレスです。オープンシステム用のボリューム自体を指すこともあります。

LUN セキュリティ

LUN に設定するセキュリティです。LUN セキュリティを有効にすると、あらかじめ決めておいたホストだけがボリュームにアクセスできるようになります。

LUN パス、LU パス

オープンシステム用ホストとオープンシステム用ボリュームの間を結ぶデータ入出力経路です。

LUSE ボリューム

オープンシステム用のボリュームが複数連結して構成されている、1つの大きな拡張ボリュームのことです。ボリュームを拡張することで、ポート当たりのボリューム数が制限されているホストからもアクセスできるようになります。

MCU

(Main Control Unit)

リモートコピーペアのプライマリボリューム (正 VOL) を制御するディスクコントロールユニットです。ユーザによって管理ツールの操作端末から要求されたリモートコピーコマンドを受信・処理し、RCU に送信します。

Mfibre

(Mainframe Fibre)

IBM のメインフレームのファイバチャネルを示す用語です。

MP ユニット

データ入出力を処理するプロセッサを含んだユニットです。データ入出力に関連するリソース (LDEV、外部ボリューム、ジャーナル) ごとに特定の MP ユニットの割り当てると、性能をチューニングできます。特定の MP ユニットの割り当ての方法と、ストレージシステムが自動的に選択した MP ユニットの割り当ての方法があります。MP ユニットに対して自動割り当ての設定を無効にすると、その MP ユニットがストレージシステムによって自動的にリソースに割り当てられることはないため、特定のリソース専用の MP ユニットとして使用できます。

MTIR

(Multi Target Incremental Resynchronization)

IBM 社の Multiple Target PPRC 機能で、2つの副サイト間で作成されるペアです。

MU

(Mirror Unit)

1つのプライマリボリュームと1つのセカンダリボリュームを関連づける情報です。

MVS

(Multiple Virtual Storage)

IBM 社のメインフレームシステム用 OS です。

Namespace

複数 LBA 範囲をまとめた、論理ボリュームの空間のことです。

Namespace Globally Unique Identifier

Namespace を識別するための、グローバルユニーク性を保証する 16Byte の識別情報です。SCSI LU での NAA Format6 で表現される、WWN に類似する情報です。

Namespace ID

NVM サブシステム上に作成された Namespace を、NVM サブシステムの中でユニークに識別するための識別番号です。

NGUID

(Namespace Globally Unique Identifier)

詳しくは、「Namespace Globally Unique Identifier」を参照してください。

NQN

(NVMe Qualified Name)

NVMe-oF 通信プロトコルで、NVMe ホストまたは NVM サブシステムを特定するためのグローバルユニークな識別子です。

NSID

(Namespace ID)

Namespace を特定するための、4Byte の識別情報です。

NVM

(Non-Volatile Memory)

不揮発性メモリです。

NVMe

(Non-Volatile Memory Express)

PCI Express を利用した SSD の接続インタフェース、通信プロトコルです。

NVMe over Fabrics

NVMe-oF 通信プロトコルによる通信を、様々な種類のネットワークファブリックに拡張する NVMe のプロトコルです。

NVMe/TCP

TCP/IP ネットワーク越しにホストとストレージ間で、NVMe-oF 通信プロトコルによる通信をするための NVMe over Fabrics 技術のひとつです。

NVMe コントローラ

NVMe ホストからのコマンド要求を処理する、物理的または論理的な制御デバイスです。

NVM サブシステム

NVM のデータストレージ機能を提供する制御システムです。

NVM サブシステムポート

ホストとコントローラが、NVMe I/O をするための Fabric に接続する通信ポートです。

Open/MF コンシステンシーグループ

Open/MF コンシステンシー維持機能を使用した、コンシステンシーグループのことです。Open/MF コンシステンシーグループ内の TrueCopy ペアおよび TrueCopy for Mainframe ペアを、同時に分割したり再同期したりできます。

Out-of-Band 方式

RAID Manager のコマンド実行方式の 1 つです。コマンドを実行すると、クライアントまたはサーバから LAN 経由で ESM/AMC/RAID Manager サーバの中にある仮想コマンドデバイスにコマンドが転送されます。仮想コマンドデバイスからストレージシステムに指示を出し、ストレージシステムで処理が実行されます。

Parent

Thin Image Advanced の用語で、メタデータの共有元となるボリュームを指します。

Family 内に vClone 属性のボリュームが存在しない場合、ルートボリュームが該当します。Family 内に vClone 属性のボリュームが存在する場合、vClone Parent 属性のボリュームが該当します。

PAV

IBM OS の機能で、一つのデバイスに対して複数の I/O 操作を並行して発行できるようにする機能です。本ストレージシステムで Compatible PAV 機能を使用することにより、IBM OS から本ストレージシステム上のデバイスに対してこの機能を使えるようになります。

PCB

(Printed Circuit Board)

プリント基盤です。このマニュアルでは、コントローラボードやチャンネルボード、ディスクボードなどのボードを指しています。

Point to Point

2 点を接続して通信するトポロジです。

PPRC

(Peer-to-Peer Remote Copy)

IBM 社のリモートコピー機能です。

Quorum ディスク

パスやストレージシステムに障害が発生したときに、global-active device ペアのどちらのボリュームでサーバからの I/O を継続するのかを定めるために使われます。外部ストレージシステムに設置します。

RAID

(Redundant Array of Independent Disks)

独立したディスクを冗長的に配列して管理する技術です。

RAID Manager

コマンドインタフェースでストレージシステムを操作するためのプログラムです。

RCU

(Remote Control Unit)

リモートコピーペアのセカンダリボリューム (副 VOL) を制御するディスクコントロールユニットです。リモートパスによって MCU に接続され、MCU からコマンドを受信して処理します。

RCU Target

属性が Initiator のポートと接続するポートを持つ属性です。

RCU Target ポート

Initiator ポートと接続します。RCU Target ポートは、ホストのポートとも通信できます。

RDEV

(Real Device)

IBM 用語です。DASD の実装置アドレスを意味します。

Read Hit 率

ストレージシステムの性能を測る指標の 1 つです。ホストがディスクから読み出そうとしていたデータが、どのくらいの頻度でキャッシュメモリに存在していたかを示します。単位はパーセントです。Read Hit 率が高くなるほど、ディスクとキャッシュメモリ間のデータ転送の回数が少なくなるため、処理速度は高くなります。

S/N

(Serial Number)

ストレージシステムに一意に付けられたシリアル番号（装置製番）です。

SAN

(Storage-Area Network)

ストレージシステムとサーバ間を直接接続する専用の高速ネットワークです。

SIM

(Service Information Message)

ストレージシステムのコントローラがエラーやサービス要求を検出したときに生成されるメッセージです。原因となるエラーを解決し、VSP One Block Administrator 画面上で SIM が解決したことを報告することを、「SIM をコンプリートする」と言います。

SM

(Shared Memory)

詳しくは「シェアドメモリ」を参照してください。

SMS

(Storage Management Subsystem)

IBM 社のメインフレームの OS が提供するツールで、データセットを容易かつ効率的に割り当てることができます。

SNMP

(Simple Network Management Protocol)

ネットワーク管理するために開発されたプロトコルの 1 つです。

SSID

ストレージシステムの ID です。ストレージシステムでは、搭載される LDEV のアドレスごと (64、128、256) に 1 つの SSID が設定されます。

SSL

(Secure Sockets Layer)

インターネット上でデータを安全に転送するためのプロトコルであり、Netscape Communications 社によって最初に開発されました。SSL が有効になっている 2 つのピア (装置) は、秘密鍵と公開鍵を利用して安全な通信セッションを確立します。どちらのピア (装置) も、ランダムに生成された対称キーを利用して、転送されたデータを暗号化します。

Super PAV

IBM OS の機能で、Hyper PAV の拡張機能です。あるベースデバイスに割り当てたエイリアスデバイスが、複数 CU 内のすべてのベースデバイスのエイリアスデバイスとして共有化されます。本ストレージシステムで Super PAV 機能を有効にすれば、IBM OS から本ストレージシステム上のデバイスに対してこの機能を使えるようになります。

T10 PI

(T10 Protection Information)

SCSI で定義された保証コード基準の一つです。T10 PI では、512 バイトごとに 8 バイトの保護情報 (PI) を追加して、データの検証に使用します。T10 PI にアプリケーションおよび OS を含めたデータ保護を実現する DIX (Data Integrity Extension) を組み合わせることで、アプリケーションからディスクドライブまでのデータ保護を実現します。

Target

ホストと接続するポートが持つ属性です。

TSE-VOL

(Track Space - Efficient Volume)

DP-VOL 同様の仮想ボリュームですが、IBM 製品の FlashCopy、および Compatible Software for IBM® FlashCopy® SE のターゲットボリュームとしてのみ使用できます。IBM ホストから認識できるよう互換を保持しています。DP-VOL とプールを共用するため、TSE-VOL を使用するためには、Compatible Software for IBM® FlashCopy® SE だけでなく、Dynamic Provisioning for Mainframe のライセンスもインストールする必要があります。

UPS

(Uninterruptible Power System)

ストレージシステムが停電や、瞬停のときでも停止しないようにするために搭載してある予備の電源のことです。

URL

(Uniform Resource Locator)

リソースの場所や種類の両方を記載しているインターネット上の住所を記述する標準方式です。

UUID

(User Definable LUN ID)

ホストから論理ボリュームを識別するために、ストレージシステム側で設定する任意の ID です。

Vary Offline

メインフレームシステム用ホストとオンライン接続しているデバイスを、オフライン状態に切り替える操作です。Vary Offline の操作をするには、メインフレームシステム用ホストからコマンドを実行します。

Vary Online

デバイスをメインフレームシステム用ホストとオンライン接続するための操作です。Vary Online の操作をするには、メインフレームシステム用ホストからコマンドを実行します。

vClone Parent 属性のボリューム

Thin Image Advanced の用語で、Family 内に vClone 属性のボリュームが存在する場合、そのメタデータの共有元になるボリュームを指します。

vClone 属性のボリューム

Thin Image Advanced の用語で、仮想クローン作成によって取得したスナップショットデータを格納するボリュームを指します。

VDEV

(Virtual Device)

IBM 用語です。DASD の仮想アドレスを意味します。

または、Hitachi 用語でパリティグループ内にある論理ボリュームのグループを意味します。

VDEV は任意のサイズの論理ボリューム (CV) とフリースペースから構成されます。VDEV 内に任意のサイズの論理ボリューム (CV) とフリースペースを作成することもできます。

VLAN

(Virtual LAN)

スイッチの内部で複数のネットワークに分割する機能です (IEEE802.1Q 規定)。

VOLSER

(Volume Serial Number)

個々のボリュームを識別するために割り当てられる番号です。VSN とも呼びます。LDEV 番号や LUN とは無関係です。

VSN

(Volume Serial Number)

個々のボリュームを識別するために割り当てられる番号です。VOLSER とも呼びます。

VSP One Block Administrator

ストレージシステムの構成やリソースを操作するシンプルな GUI の管理ツールです。

VTOC

(Volume Table of Contents)

ディスク上の複数データセットのアドレスや空き領域を管理するための情報を格納するディスク領域です。

Write Hit 率

ストレージシステムの性能を測る指標の 1 つです。ホストがディスクへ書き込もうとしていたデータが、どのくらいの頻度でキャッシュメモリに存在していたかを示します。単位はパーセントです。Write Hit 率が高くなるほど、ディスクとキャッシュメモリ間のデータ転送の回数が少なくなるため、処理速度は高くなります。

WWN

(World Wide Name)

ホストバスアダプタの ID です。ストレージ装置を識別するためのもので、実体は 16 桁の 16 進数です。

zHyperWrite 機能

IBM 社の DS シリーズ ディスクアレイ装置でサポートしている zHyperWrite の互換機能です。上位アプリケーションである DB2 のログを書き込むときに行われる二重化処理で、TrueCopy for Mainframe の更新コピーを使用して二重化処理を行うのではなく、ホストから TrueCopy for Mainframe のプライマリボリュームおよびセカンダリボリュームに対して書き込みを行います。zHyperWrite の詳細については、IBM のマニュアルを参照してください。

(ア行)

アクセス属性

ボリュームが読み書き可能になっているか (Read/Write)、読み取り専用になっているか (Read Only)、それとも読み書き禁止になっているか (Protect) どうかを示す属性です。

アクセスパス

ストレージシステム内の、データとコマンドの転送経路です。

インクリメンタルリシンク

IBM 社の Multiple Target PPRC 機能で、MTIR ペア間で実行される差分コピーです。

インスタンス

特定の処理を実行するための機能集合のことです。

インスタンス番号

インスタンスを区別するための番号です。1 台のサーバ上で複数のインスタンスを動作させる
とき、インスタンス番号によって区別します。

エクステント

IBM 社のストレージシステム内で定義された論理デバイスは、ある一定のサイズに分割されて
管理されます。この、分割された最小管理単位の名称です。

エミュレーション

あるハードウェアまたはソフトウェアのシステムが、ほかのハードウェアまたはソフトウェア
のシステムと同じ動作をすること（または同等に見えるようにすること）です。一般的には、
過去に蓄積されたソフトウェアの資産を役立てるためにエミュレーションの技術が使われま
す。

(力行)

外部ストレージシステム

本ストレージシステムに接続されているストレージシステムです。

外部パス

本ストレージシステムと外部ストレージシステムを接続するパスです。外部パスは、外部ボリ
ュームを内部ボリュームとしてマッピングしたときに設定します。複数の外部パスを設定する
ことで、障害やオンラインの保守作業にも対応できます。

外部ボリューム

外部ボリュームグループに作成した LDEV のことです。マッピングした外部ストレージシ
ステムのボリュームを実際にホストや他プログラムプロダクトから使用するためには、外部ボリ
ュームグループに LDEV を作成する必要があります。

外部ボリュームグループ

外部ストレージシステムのボリュームをマッピングしている、本ストレージシステム内の仮想
的なボリュームです。
外部ボリュームグループはパリティ情報を含みませんが、管理上はパリティグループと同じよ
うに取り扱います。

鍵管理サーバ

暗号化鍵を管理するサーバです。暗号化鍵を管理するための規格である KMIP (Key
Management Interoperability Protocol) に準じた鍵管理サーバに暗号化鍵をバックアップで
き、また、鍵管理サーバにバックアップした暗号化鍵から暗号化鍵をリストアできます。

書き込み待ち率

ストレージシステムの性能を測る指標の 1 つです。キャッシュメモリに占める書き込み待ち
データの割合を示します。

仮想ボリューム

実体を持たない、仮想的なボリュームです。Dynamic Provisioning、または Dynamic Provisioning for Mainframe で使用する仮想ボリュームを DP-VOL と呼びます。

監査ログ

ストレージシステムに対して行われた操作や、受け取ったコマンドの記録です。Syslog サーバへの転送設定をすると、監査ログは常時 Syslog サーバへ転送され、Syslog サーバから監査ログを取得・参照できます。

管理ツールの操作端末

ストレージシステムを操作するためのコンピュータです。

キャッシュ

チャンネルとドライブの間にあるメモリです。中間バッファとしての役割があります。キャッシュメモリとも呼ばれます。

共用メモリ

詳しくは「シェアドメモリ」を参照してください。

形成コピー

ホスト I/O プロセスとは別に、プライマリボリュームとセカンダリボリュームを同期させるプロセスです。

更新コピー

形成コピー（または初期コピー）が完了したあとで、プライマリボリュームの更新内容をセカンダリボリュームにコピーして、プライマリボリュームとセカンダリボリュームの同期を保持するコピー処理です。

構成定義ファイル

RAID Manager を動作させるためのシステム構成を定義するファイルを指します。

コピー系プログラムプロダクト

ストレージシステムに備わっているプログラムのうち、データをコピーするものを指します。ストレージシステム内のボリューム間でコピーするローカルコピーと、異なるストレージシステム間でコピーするリモートコピーがあります。

コピーグループ

プライマリボリューム（正側ボリューム）、およびセカンダリボリューム（副側ボリューム）から構成されるコピーペアを1つにグループ化したものです。または、正側と副側のデバイスグループを1つにグループ化したものです。RAID Manager でレプリケーションコマンドを実行する場合、コピーグループを定義する必要があります。

コマンドデバイス

ホストから RAID Manager コマンドを実行するために、ストレージシステムに設定する論理デバイスです。コマンドデバイスは、ホストから RAID Manager コマンドを受け取り、実行対象の論理デバイスに転送します。

Out-of-band 方式で接続された RAID Manager、もしくは内蔵 CLI を用いて設定してください。

コマンドデバイスセキュリティ

コマンドデバイスに適用されるセキュリティです。

コレクションコピー

ストレージシステム内のディスク障害を回復するためのコピー動作のことです。予備ディスクへのコピー、または交換ディスクへのコピー等が含まれます。

コンシステンシーグループ

コピー系プログラムプロダクトで作成したペアの集まりです。コンシステンシーグループ ID を指定すれば、コンシステンシーグループに属するすべてのペアに対して、データの整合性を保ちながら、特定の操作を同時に実行できます。

コントローラシャーシ

ストレージシステムを制御するコントローラが備わっているシャーシ（筐体）です。コントローラシャーシは DKC、CBX と同義語です。

(サ行)

サーバ証明書

サーバと鍵ペアを結び付けるものです。サーバ証明書によって、サーバは自分がサーバであることをクライアントに証明します。これによってサーバとクライアントは SSL を利用して通信できるようになります。サーバ証明書には、自己署名付きの証明書と署名付きの信頼できる証明書の 2 つの種類があります。

サイドファイル

コンカレントコピーで使用している内部のテーブルです。コピー未完了部分に更新 I/O が発生した際、バックアップデータ（スナップショット）をサイドファイルに退避することで、コピー先のデータ整合性を正しく保つために使用されます。

サイドファイルキャッシュ

コンカレントコピー実施中に生成されるバックアップデータ（スナップショット）を格納する領域で、キャッシュ内に一時的に確保されます。

サブシステム NQN

NVM サブシステムに定義された NQN です。
NQN の詳細については、「NQN」を参照してください。

差分テーブル

コピー系プログラムプロダクトおよび Volume Migration で共有するリソースです。Volume Migration 以外のプログラムプロダクトでは、ペアのプライマリボリュームとセカンダリボリュームのデータに差分があるかどうかを管理するために使用します。Volume Migration では、ボリュームの移動中に、ソースボリュームとターゲットボリュームの差分を管理するために使用します。

差分データ

ペアボリュームがサスペンドしたときの状態からの正ボリュームへの更新データのことです。

シェアドメモリ

キャッシュ上に論理的に存在するメモリです。共用メモリとも呼びます。ストレージシステムの共通情報や、キャッシュの管理情報（ディレクトリ）などを記憶します。これらの情報を基に、ストレージシステムは排他制御を行います。また、差分テーブルの情報もシェアドメモリで管理されており、コピーペアを作成する場合にシェアドメモリを利用します。

自己署名付きの証明書

自分自身で自分用の証明書を生成します。この場合、証明の対象は証明書の発行者と同じになります。ファイアウォールに守られた内部 LAN 上でクライアントとサーバ間の通信が行われている場合は、この証明書でも十分なセキュリティを確保できるかもしれません。

システムディスク

ストレージシステムが使用するボリュームのことです。一部の機能を使うためには、システムディスクの作成が必要です。

システムプールボリューム、システムプール VOL

プールを構成するプールボリュームのうち、1つのプールボリュームがシステムプールボリュームとして定義されます。システムプールボリュームは、プールを作成したとき、またはシステムプールボリュームを削除したときに、優先順位に従って自動的に設定されます。なお、システムプールボリュームで使用可能な容量は、管理領域の容量を差し引いた容量になります。管理領域とは、プールを使用するプログラムプロダクトの制御情報を格納する領域です。

ジャーナルボリューム

Universal Replicator と Universal Replicator for Mainframe の用語で、プライマリボリュームからセカンダリボリュームにコピーするデータを一時的に格納しておくためのボリュームのことです。ジャーナルボリュームには、プライマリボリュームと関連づけられているマスタジャーナルボリューム、およびセカンダリボリュームと関連づけられているリストアジャーナルボリュームとがあります。

詳細 API

リクエストラインに simple を含まない REST API です。ストレージシステムの情報取得や構成変更することができます。

状態遷移

ペアボリュームのペア状態が変化することです。

冗長パス

チャンネルボードの故障などによって LUN パスが利用できなくなったときに、その LUN パスに代わってホスト I/O を引き継ぐ LUN パスです。交替パスとも言います。

初期コピー

新規にコピーペアを作成すると、初期コピーが開始されます。初期コピーでは、プライマリボリュームのデータがすべて相手のセカンダリボリュームにコピーされます。初期コピー中も、ホストサーバからプライマリボリュームに対する Read/Write などの I/O 操作は続行できます。

署名付きの信頼できる証明書

証明書発行要求を生成したあとで、信頼できる CA 局に送付して署名してもらいます。CA 局の例としては VeriSign 社があります。

シリアル番号

ストレージシステムに一意に付けられたシリアル番号（装置製番）です。

シンプル API

リクエストラインに simple を含む REST API です。ストレージシステムの情報取得や構成変更することができます。

スナップショットグループ

Thin Image Advanced で作成した複数のペアの集まりです。複数のペアに対して同じ操作を実行できます。

スナップショットデータ

Thin Image Advanced では、特定時点のデータの複製のことを指します。

スワップ

プライマリボリューム/セカンダリボリュームを逆転する操作のことです。

正 VOL、正ボリューム

詳しくは「プライマリボリューム」を参照してください。

正サイト

通常時に、業務（アプリケーション）を実行するサイトを指します。

セカンダリボリューム

ペアとして設定された 2 つのボリュームのうち、コピー先のボリュームを指します。なお、プライマリボリュームとペアを組んでいるボリュームをセカンダリボリュームと呼びますが、Thin Image Advanced では、セカンダリボリューム（仮想ボリューム）ではなく、プールにデータが格納されます。

絶対 LUN

SCSI/iSCSI/Fibre ポート上に設定されているホストグループとは関係なく、ポート上に絶対的に割り当てられた LUN を示します。

センス情報

エラーの検出によってペアがサスペンドされた場合に、正サイトまたは副サイトのストレージシステムが、適切なホストに送信する情報です。ユニットチェックの状況が含まれ、災害復旧に使用されます。

専用 DASD

IBM 用語です。z/VM 上の任意のゲスト OS のみ利用可能な DASD を意味します。

ソースボリューム

Compatible FlashCopy[®]、および Volume Migration の用語で、Compatible FlashCopy[®] の場合はボリュームのコピー元となるボリュームを、Volume Migration の場合は別のパリティグループへと移動するボリュームを指します。

ゾーニング

ホストとリソース間トラフィックを論理的に分離します。ゾーンに分けることにより、処理は均等に分散されます。

(タ行)

ターゲットボリューム

Compatible FlashCopy[®]、および Volume Migration の用語で、Compatible FlashCopy[®] の場合はボリュームのコピー先となるボリュームを、Volume Migration の場合はボリュームの移動先となる領域を指します。

チャンネルエクステンダ

遠隔地にあるメインフレームホストをストレージシステムと接続するために使われるハードウェアです。

チャンネルボード

ストレージシステムに内蔵されているアダプタの一種で、ホストコマンドを処理してデータ転送を制御します。

重複排除用システムデータボリューム（データストア）

容量削減の設定が重複排除および圧縮の仮想ボリュームが関連づけられているプール内で、重複データを格納するためのボリュームです。

重複排除用システムデータボリューム（フィンガープリント）

容量削減の設定が重複排除および圧縮の仮想ボリュームが関連づけられているプール内で、重複排除データの制御情報を格納するためのボリュームです。

ディスクボード

ストレージシステムに内蔵されているアダプタの一種で、キャッシュとドライブの間のデータ転送を制御します。

データ削減共有ボリューム

データ削減共有ボリュームは、Adaptive Data Reduction の容量削減機能を使用して作成する仮想ボリュームです。Thin Image Advanced ペアのボリュームとして使用できます。データ削減共有ボリュームは、Redirect-on-Write のスナップショット機能を管理するための制御データ（メタデータ）を持つボリュームです。

データ削減共有ボリュームには、容量削減設定が有効なデータ削減共有ボリュームと、容量削減設定が無効なデータ削減共有ボリュームという 2 種類があります。詳しくは、「容量削減設定が有効なデータ削減共有ボリューム」または「容量削減設定が無効なデータ削減共有ボリューム」を参照してください。

転送レート

ストレージシステムの性能を測る指標の 1 つです。1 秒間にディスクへ転送されたデータの大きさを示します。

同期コピー

ホストからプライマリボリュームに書き込みがあった場合に、リアルタイムにセカンダリボリュームにデータを反映する方式のコピーです。ボリューム単位のリアルタイムデータバックアップができます。優先度の高いデータのバックアップ、複写、および移動業務に適しています。

トポロジ

デバイスの接続形態です。Fabric、FC-AL、および Point-to-point の 3 種類があります。

ドライブボックス

各種ドライブを搭載するためのシャーシ（筐体）です。

（ナ行）

内部ボリューム

本ストレージシステムが管理するボリュームを指します。

(ハ行)

パリティグループ

同じ容量を持ち、1つのデータグループとして扱われる一連のドライブを指します。パリティグループには、ユーザデータとパリティ情報の両方が格納されているため、そのグループ内の1つまたは複数のドライブが利用できない場合にも、ユーザデータにはアクセスできます。場合によっては、パリティグループを RAID グループ、ECC グループ、またはディスクアレイグループと呼ぶことがあります。

非対称アクセス

global-active device でのクロスパス構成など、サーバとストレージシステムを複数の冗長パスで接続している場合で、ALUA が有効のときに、優先して I/O を受け付けるパスを定義する方法です。

非同期コピー

ホストから書き込み要求があった場合に、プライマリボリュームへの書き込み処理とは非同期に、セカンダリボリュームにデータを反映する方式のコピーです。複数のボリュームや複数のストレージシステムにわたる大量のデータに対して、災害リカバリを可能にします。

ピントラック

(pinned track)

物理ドライブ障害などによって読み込みや書き込みができないトラックです。固定トラックとも呼びます。

ファイバチャネル

光ケーブルまたは銅線ケーブルによるシリアル伝送です。ファイバチャネルで接続された RAID のディスクは、ホストからは SCSI のディスクとして認識されます。

プール

プールボリューム（プール VOL）を登録する領域です。Dynamic Provisioning、Dynamic Provisioning for Mainframe、および Thin Image Advanced がプールを使用します。

プールボリューム、プール VOL

プールに登録されているボリュームです。Dynamic Provisioning および Dynamic Provisioning for Mainframe ではプールボリュームに通常のデータを格納し、Thin Image Advanced ではスナップショットデータをプールボリュームに格納します。

副 VOL、副ボリューム

詳しくは「セカンダリボリューム」を参照してください。

副サイト

主に障害時に、業務（アプリケーション）を正サイトから切り替えて実行するサイトを指します。

プライマリボリューム

ペアとして設定された2つのボリュームのうち、コピー元のボリュームを指します。

フラッシュメモリ

各プロセッサに搭載され、ソフトウェアを格納している不揮発性のメモリです。

ブロック

ボリューム容量の単位の一つです。1ブロックは512バイトです。

ペア

データ管理目的として互いに関連している2つのボリュームを指します（例、レプリケーション、マイグレーション）。ペアは通常、お客様の定義によりプライマリもしくはソースボリューム、およびセカンダリもしくはターゲットボリュームで構成されます。

ペア状態

ペアオペレーション前後にボリュームペアに割り当てられた内部状態。ペアオペレーションが実行されている、もしくは結果として障害となっているときにペア状態は変化します。ペア状態はコピーオペレーションを監視したり、システム障害を検出するために使われます。

ペアテーブル

ペアを管理するための制御情報を格納するテーブルです。

ページ

DPの領域を管理する単位です。Dynamic Provisioningの場合、1ページは42MB、Dynamic Provisioning for Mainframeの場合、1ページは38MBです。

ポートモード

ストレージシステムのチャンネルボードのポート上で動作する、通信プロトコルを選択するモードです。ポートの動作モードとも言います。

ホスト-Namespaceパス

日立ストレージシステムで、Namespaceセキュリティを使用する際に、ホストNQNごとに各Namespaceへのアクセス可否を決定するための設定です。Namespaceパスとも呼びます。

ホストNQN

NVMeホストに定義されたNQNです。NQNの詳細については、「NQN」を参照してください。

ホストグループ

ストレージシステムの同じポートに接続し、同じプラットフォーム上で稼働しているホストの集まりのことです。あるホストからストレージシステムに接続するには、ホストをホストグループに登録し、ホストグループをLDEVに結び付けます。この結び付ける操作のことを、LUNパスを追加するとも呼びます。

ホストグループ0 (ゼロ)

「00」という番号が付いているホストグループを指します。

ホストデバイス

ホストに提供されるボリュームです。HDEV (Host Device) とも呼びます。

ホストバスアダプタ

(Host Bus Adapter)

オープンシステム用ホストに内蔵されているアダプタで、ホストとストレージシステムを接続するポートの役割を果たします。それぞれのホストバスアダプタには、16桁の16進数によるIDが付いています。ホストバスアダプタに付いているIDをWWN (Worldwide Name) と呼びます。

ホストモード

オープンシステム用ホストのプラットフォーム（通常は OS）を示すモードです。

(マ行)

マイグレーションボリューム

異なる機種のストレージシステムからデータを移行させる場合に使用するボリュームです。

マッピング

本ストレージシステムから外部ボリュームを操作するために必要な管理番号を、外部ボリュームに割り当てることです。

ミニディスク DASD

IBM 用語です。z/VM 上で定義される仮想 DASD を意味します。

(ヤ行)

容量削減設定が無効なデータ削減共有ボリューム

Adaptive Data Reduction の容量削減機能が有効、かつ、容量削減設定（「圧縮」または「重複排除および圧縮」）が無効である仮想ボリュームを指します。

容量削減設定が有効なデータ削減共有ボリューム

Adaptive Data Reduction の容量削減機能が有効、かつ、容量削減設定（「圧縮」または「重複排除および圧縮」）が有効である仮想ボリュームを指します。

(ラ行)

リソースグループ

ストレージシステムのリソースを割り当てたグループを指します。リソースグループに割り当てられるリソースは、LDEV 番号、パリティグループ、外部ボリューム、ポートおよびホストグループ番号です。

リモートコマンドデバイス

外部ストレージシステムのコマンドデバイスを、本ストレージシステムの内部ボリュームとしてマッピングしたものです。リモートコマンドデバイスに対して RAID Manager コマンドを発行すると、外部ストレージシステムのコマンドデバイスに RAID Manager コマンドを発行でき、外部ストレージシステムのペアなどを操作できます。

リモートストレージシステム

ローカルストレージシステムと接続しているストレージシステムを指します。

リモートパス

リモートコピー実行時に、遠隔地にあるストレージシステム同士を接続するパスです。

リンクアグリゲーション

複数のポートを集約して、仮想的にひとつのポートとして使う技術です。これによりデータリンクの帯域幅を広げるとともに、ポートの耐障害性を確保します。

レコードセット

非同期コピーの更新コピーモードでは、正 VOL の更新情報と制御情報をキャッシュに保存します。これらの情報をレコードセットといいます。ホストの I/O 処理とは別に、RCU に送信されます。

レスポンスタイム

モニタリング期間内での平均の応答時間。あるいは、エクスポートツール 2 で指定した期間内でのサンプリング期間ごとの平均の応答時間。単位は、各モニタリング項目によって異なります。

ローカルストレージシステム

管理ツールの操作端末を接続しているストレージシステムを指します。

索引

数字

3PAR T400、T800、F400、V800、V400、StoreServ
シリーズ
システムオプションパラメータ 110
注意事項 111
3PAR ストレージシステム 24

A

ALUA モード 50, 73

C

CLPR 47

D

Dell EMC Symmetrix シリーズ
システムオプションパラメータ 105
Dell EMC VNX シリーズ
システムオプションパラメータ 104
システムオプションモード 104
注意事項 105
Dell EMC ストレージシステム 24
DMX シリーズ
システムオプションパラメータ 105
Dynamic Provisioning 21

E

EVA ストレージシステム 24
システムオプションパラメータ 100
デバイス ID 101
パスモード 24
ファームウェア 100

F

Fujitsu ETERNUS DX400 S2 シリーズ
システムオプションパラメータ 109
Fujitsu ETERNUS DX60 S2/DX80 S2/DX90 S2
システムオプションパラメータ 109
Fujitsu FibreCAT CX シリーズ
システムオプションパラメータ 108
システムオプションモード 108
注意事項 109

G

global-active device 21

H

Hitachi Virtual Storage Platform VX7 24
パスモード 24
HPE Primera A630/A650/A670/C630/C650/C670
システムオプションパラメータ 102
注意事項 102
HPE XP7 Storage 24
パスモード 24
HPE XP8 Storage 24
パスモード 24

I

IBM DS3000/DS4000/DS5000 シリーズ
システムオプションパラメータ 106
IBM SVC シリーズ
システムオプションパラメータ 107
IBM V7000 シリーズ
システムオプションパラメータ 107
注意事項 107
IBM XIV シリーズ
シリアル番号表示 108
IBM ストレージシステム 24

L

LDEV 16
LDEV 基本容量 114
LDEV 最小容量 114
LUN Manager 21

M

MIH 30
Multi モード 50

N

NEC ストレージシステム 24
NetApp ストレージシステム 24

P

PowerMax シリーズ
システムオプションパラメータ 105

R

RAID レベル 27

S

SGI IS4600 シリーズ
システムオプションパラメータ 110
ShadowImage 21
外部ボリューム運用例 123
SIM 30
Single モード 50
SNMP Agent 21
Sun StorageTek V2X2 ストレージシステム
注意事項 104
Sun StorEdge 6120/6320 ストレージシステム
システムオプションパラメータ 103
システムオプションモード 103
SUN ストレージシステム 24

T

TrueCopy 21
外部ボリューム運用例 121

U

Universal Replicator 21
外部ボリューム運用例 122

V

VDEV 16
Virtual LUN (VLL) 21
VMAX シリーズ
システムオプションパラメータ 105
Volume Migration
外部ボリューム運用例 120
VSP G1000 ストレージシステム
パスモード 24
VSP 5000 シリーズストレージシステム 24
エラー表示 94
ホストモードとポート属性 94
VSP E シリーズストレージシステム 24
パスモード 24
VSP F350, F370, F700, F900 ストレージシステム 24
エラー表示 93, 97
ホストモードとポート属性 97
VSP F400, F600, F800 ストレージシステム 24
エラー表示 98
ホストモードとポート属性 98
VSP G100, G200, G400, G600, G800 ストレージシステム 24
エラー表示 98
パスモード 24
ホストモードとポート属性 98
VSP G1000, G1500, F1500 ストレージシステム 24
VSP G1000, VSP G1500, VSP F1500 ストレージシステム
エラー表示 95
ホストモードとポート属性 95
VSP G130, G150, G350, G370, G700, G900 ストレージシステム 24
エラー表示 93, 97
パスモード 24
ホストモードとポート属性 97
VSP One B20 ストレージシステム 24
パスモード 24
VSP One B85 ストレージシステム 24
パスモード 24

か

外部ストレージシステム 16
種類 24
電源操作 77
負荷分散方式の変更 74
ポート設定変更 74
保守時の注意事項 34
外部ストレージシステムのボリューム 16
外部ストレージシステムを接続するポートの設定 46
外部バス 16, 49
再接続 72
削除 67
冗長化 51
切断 72
設定 62
注意事項 63
追加 63

変更 68
優先順位変更 64
外部ボリュームグループ 16, 47
最大数 27
マッピング 47
外部ボリューム 16, 28
MP ユニット変更 75
外部パス再接続 72
外部パス切断 72
キャッシュモード 72
使用再開 71
接続停止 69
属性 47
属性の注意事項 30, 31
ドライブタイプ 26
パスモード変更 73
マッピング解除 74
概要 14
拡張ラウンドロビン方式 50
管理 LU 62
管理ツールの操作端末 24

き

基本データ領域容量 114
キャッシュモード 47, 72
キャッシュ流入制御 47

く

クラスタ 49

け

計画停止
外部ストレージシステム 78
ローカルストレージシステム 76

こ

構成要素 16

さ

最小データ領域容量 114
最小容量 27
再接続
外部パス 72
最大容量 27
再マッピング 34

し

システムオプションパラメータ
3PAR T400、T800、F400、V800、V400、StoreServ
シリーズ 110
Dell EMC Symmetrix シリーズ 105
Dell EMC VNX シリーズ 104
DMX シリーズ 105
EVA ストレージシステム 100
Fujitsu ETERNUS DX400 S2 シリーズ 109
Fujitsu ETERNUS DX60/80/90 S2 109
Fujitsu FibreCAT CX シリーズ 108
HPE Primera A630/A650/A670/C630/C650/C670
102
IBM DS3000/DS4000/DS5000 シリーズ 106
IBM SVC シリーズ 107
IBM V7000 シリーズ 107
PowerMax シリーズ 105
SGI IS4600 シリーズ 110
Sun StorEdge 6120/6320 ストレージシステム 103
VMAX シリーズ 105
冗長パス 51
設定例 51
所有権 29

す

ストレージシステム
外部 16
電源操作 76
ローカル 16

せ

制御情報領域容量 114
切断
外部パス 72

た

他のプログラムプロダクトとの外部ボリューム運用例
119
ShadowImage 123
TrueCopy 121
Universal Replicator 122
Volume Migration 120

て

デバイス名列の表示 132
電源オフ
ローカルストレージシステム 76
電源操作
外部ストレージシステム 77
ストレージシステム 76
ローカルストレージシステム 76

と

- ドライブタイプ 26
 - FC 26
 - SAS 26
 - SATA 26
 - SSD 26
- トラブルシューティング 81
 - 一般的なトラブルシューティング 82
 - ボリューム探索 87
 - マッピングパス 84

は

- Virtual LUN 16
- パスグループ 54
- パスモード 50
 - ALUA 50
 - Multi 50
 - Single 50

ひ

- 標準ラウンドロビン方式 50

ふ

- VLL 16
- 富士通ストレージシステム 24
- プライマリコントローラ 29
- プライマリパス 51

へ

- 併用できるプログラムプロダクト 21
 - Dynamic Provisioning 21
 - global-active device 21
 - LUN Manager 21
 - ShadowImage 21
 - SNMP Agent 21
 - TrueCopy 21
 - Universal Replicator 21
 - Virtual LUN (VLL) 21

ほ

- ポート設定変更 74
- ポート探索 20
- ボリューム 16
- ボリューム探索 20
 - トラブルシューティング 87
- ボリュームの容量の調整 127
- ボリュームプロパティ 101
- ボリューム容量の考え方 114

ま

- マッピング 19
 - 解除 74
 - 外部ボリュームグループ 47
 - 外部ボリューム属性 47
 - 制限事項 46
 - 操作 59
 - 注意事項 29
- マッピングパス 16
 - 最大数 27
 - トラブルシューティング 84

め

- メインフレームシステム用ボリューム
 - 注意事項 30

よ

- 要件
 - Universal Volume Manager の要件 27
 - システム要件 24

ら


- ライセンスキー 24

り

- リモートコマンドデバイス 132

ろ

- ローカルストレージシステム 16
 - 電源オフ 76
 - 電源操作 76
- ロードバランスモード 49, 50
 - 変更 74

 日立ヴァンタラ株式会社

〒 244-0817 神奈川県横浜市戸塚区吉田町 292 番地
